

# 令和2年度 野田村のみなさまの 暮らしとお仕事に関する

## アンケート調査報告書

2021年3月  
弘前大学人文社会科学部

弘前大学特定プロジェクト教育研究センター

地域未来創生センター  
— Innovative Regional Research Center —

# はじめに

東日本大震災から間もなく10年の歳月が過ぎようとしています。被災地では依然として課題は残されているものの、着実に平穏な日常を取り戻してきたように思われます。弘前大学とチーム北リアスは、震災直後から岩手県九戸郡野田村の復旧・復興事業をお手伝いさせていただいてきました。瓦礫撤去や支援物資の仕分け、そして交流事業に至るまで、野田村の皆さまに寄り添って歩んできました。また、支援活動と並行して、震災の記憶を記録する事業や生活実態を把握する調査事業、そして地域資源を発掘する事業などにも取り組んできました。

本報告書は、2020年8月に実施いたしました「野田村のみなさまの暮らしとお仕事に関するアンケート調査」の結果をまとめたものであります。この調査は、野田村住民の暮らしと生活の変化と現状を正確に把握することを目指しました。具体的には、人間関係、地域間移動、住まいや仕事の現況を調査し、震災被害と復興状況を把握することを目的に実施したものです。

本調査報告書が、震災からの長期的な復興政策や持続可能な村づくりの長期戦略を立案する上で、一助になれば幸いです。

この調査にあたり、ご協力いただきました皆さまや関係機関に、心から感謝申し上げます。

2021年3月

弘前大学特定プロジェクト教育研究センター  
地域未来創生センター長 李 永 俊



## はじめに

<b>第1章 調査の概要</b> .....	1
1. 調査の背景と目的 .....	1
2. 調査の方法 .....	1
3. 調査結果の概要 .....	2
3-1 回収状況 .....	2
3-2 回答者のプロフィール .....	2
4. 報告書の構成 .....	3
<b>第2章 震災10年目の生活実態</b> .....	7
1. 生活実態 .....	7
2. 人間関係 .....	12
3. 復興感の決定要因について .....	14
4. 小括 .....	17
<b>第3章 震災10年目の復興感</b> .....	19
1. 生活の復興や村の復興はどのくらい進んでいると感じているか .....	19
2. 震災をきっかけとした生活や人間関係の変化 .....	22
3. 野田村は暮らしやすい村になったか .....	25
おわりに .....	27
<b>第4章 復興感と復興時期に影響を与える要因の分析</b> .....	29
1. はじめに .....	29
2. 復興感の状況 .....	29
3. 復興感に影響を与える要因 .....	31
4. 復興時期に影響を与える要因 .....	33
5. まとめ .....	35

<b>第5章 移動性向の変化について</b>	37
1. 移動性向の実態	37
1-1 移動性向の動向とその理由	37
1-2 個人属性別および家族状況から見た移動性向	39
1-3 経済環境別に見た移動性向	42
1-4 復興状況と移動性向	43
2. 移動性向の決定要因分析	44
3. 小括	46
<b>第6章 新たなコミュニティづくりと世代差</b>	47
1. 地域活動への参加の世代差	47
2. 震災後の暮らしや人間関係の世代差	49
3. 震災後の人間関係の変化の世代差	51
4. 震災前後の日常生活の質の変化の世代差	53
おわりに	56
<b>第7章 野田村の声を探る：自由回答より</b>	57
1. はじめに	57
2. 漢字一文字で表すこの10年間	57
3. 野田村での生活で困っていることや将来の生活について	59
3-1 雇用やインフラ面への不満や希望	59
3-2 少子高齢化や人口減少への不安や希望	60
3-3 教育や子育て支援への希望	61
3-4 つながりのメリットとデメリット	61
3-5 生活の苦しさ	62
3-6 震災やコロナ感染症への思い	62
3-7 村政やボランティアへの要望	63
4. おわりに	64
<b>付録</b>	
回答者の集計表	65
回答者用質問紙	79

# 第1章

## 調査の概要

李 永 俊

### 1. 調査の背景と目的

東日本大震災のような未曾有の大規模災害からの復興は、今まで経験したことのない多くの困難をとまなう。復興過程でなにより優先しなければならないのは、言うまでもなく住民の日々の暮らしを建て直すことである。復興のための復興ではなく、住民の生活の質（Quality of life）を重視した復興を成し遂げるためには、住民一人一人がどのような経済的、社会的被害に見舞われていたのか、現在どのように生活を営んでいるのか、そしてどのような希望や将来への夢を抱いているのかを正確に把握する必要がある。この調査は、そのような住民の暮らしと生活に関する状況を正確に把握することの一助になることを願い実施するものであり、特に、人間関係、地域間移動、住まいや仕事の現況を調査し、震災被害と復興状況を把握することを目的としている。

### 2. 調査の方法

調査方法の概要は以下のとおりである。

- ・ 調査対象者と回答者数

調査対象者は、岩手県九戸郡野田村に居住する20歳以上の男女、計2,726名（2015年国勢調査ベース）を調査対象者としている。

- ・ 調査法

郵送による質問紙法を用いた。

- ・ 調査期間

2020年8月～9月

第1章  
調査の概要第2章  
震災10年目の  
生活実態第3章  
震災10年目の  
復興感第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与えた要因の分析第5章  
移動性向の  
変化について第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差第7章  
野田村の声を探る…  
自由回答より付録  
回答者の集計表付録  
回答者用質問紙

### 3. 調査結果の概要

#### 3-1 回収状況

対象者の有効回答は609名だった。直接配布数2,214通に対する回収率は609/2,214で27.5%だった。

#### 3-2 回答者のプロフィール

図の1-1から1-4に、回答者の属性をまとめた。

性別の構成比では、男性が280名で全体の46.0%、女性が320名で52.6%となっており、女性が6.6ポイント多くなっている。また、年齢階級別の構成比では、20代が45名で全体の7.4%、30代が39名で6.4%、40代は67名で11.0%、50代は117名で19.2%と、50代以下が44.0%にしかない。一方、60代は174名で28.6%、70代以上は115名で18.9%となっており、60代以上が全体の47.5%を占めている。2015年の国勢調査では、60代以上人口が全体の43.4%（1,801名）であったのと比較すると若干高齢者層の回答の割合が高いことが分かる。また、男女比では国勢調査の女性の割合が52.7%であったので、ほぼ同数となっていることがわかる。

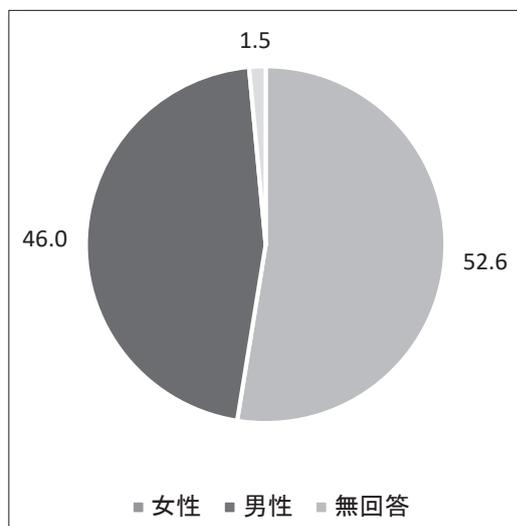


図1-1 回答者の性別 (%)

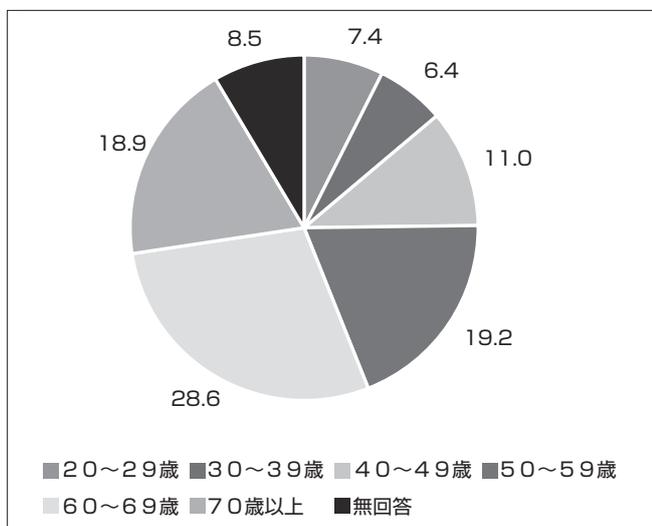


図1-2 回答者の年齢構成 (%)

地域間の移動に注目するために、回答者の地域間移動の有無によって次のように分類する。定住者は一度も野田村を出ることなく、住み続けている人と定義する。Uターン者は野田村を出て、他地域での生活経験を持ち、野田村に帰ってきた人を言う。Iターン者は野田村以外の出身で、現在村内に住んでいるものを指す。各タイプ別の割合をみると、定住者が114名で21.6%、Uターン者が239名で45.3%であるのに対し、Iターン者が175名で33.1%となっている。野田村出身者が全体の66.9%、村外出身者が33.1%となっている。

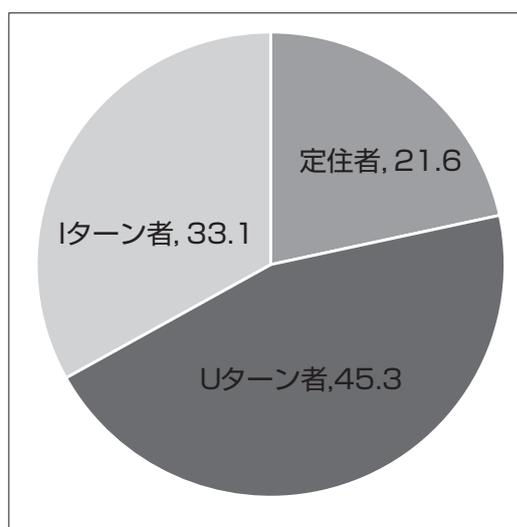


図1-3 タイプ別構成比 (%)

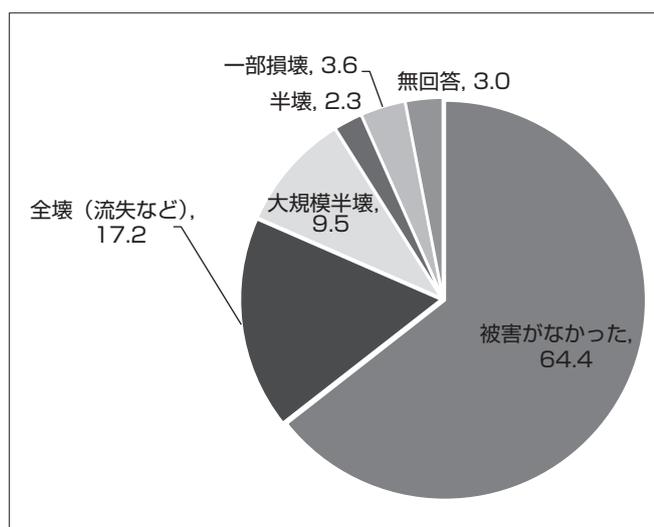


図1-4 住まいの被害状況別構成比 (%)

最後に住まいの被害状況別構成比をみると、「被害がなかった」が392名で64.4%、「全壊（流出等）」が105名で17.2%、「大規模半壊」は58名で9.5%、「半壊」は14名で2.3%、「一部損壊」22名で3.6%となっている。村が発表している「岩手県野田村の震災の記憶（平成28年6月発行）」によると、「全壊」が311棟で震災当時全世帯1,674世帯の18.6%、「大規模半壊」は136棟で8.1%、「半壊」32棟で1.9%、「一部損壊」36棟で2.2%と比較すると、ほぼ一致していることがわかる。

## 4. 報告書の構成

この報告書はこの章を含めて全7章で構成されている。

第2章では、アンケート調査から見えた野田村住民の収入と仕事、そして人間関係や主観的な復興感などを、データを通して概観した。収入では若年層で収入増が4割を超えているのに対し、高齢層では収入減が6割に達していた。他方、被害有無と収入の変化の間には統計的な有意な関係は見られず、経済的な面においては震災の影響は薄くなっていると言える。ただ、注目される点としては、高所得層で収入増が低所得層で収入減が多く見られる点である。2017年調査でも指摘した復興過程における所得格差の拡大が懸念される。仕事においては、職場の復旧状況では、「廃業した」または「まだ不十分」と答えた人が1割を超えており、震災からの復旧の困難さをうかがうことが出来る。人間関係においては、若年層で人間関係が増えた人が多い一方、高齢者層で付き合いが減っている人が多い。また、被害の有無では被害があった人に、家族・親せき、地域の仲間が減った人が多かった。村外の人々との付き合いも被害があった層に十分に届いていない実態も明らかにしている。

第3章では、震災から10年目にあたって、野田村の人々が自身の生活や野田村がどの程度復興し、またどのように変化したと考えているのかを明らかにした。震災10年目、自身

の生活復興や野田村の復興はどの程度進んでいると感じられているだろうか。震災前と比べて、野田村は暮らしやすくなっただろうか。生活復興については、2017年調査と同じく大多数の人が半分以上復興したと感じており、復興が進んでいないという人はほぼなくなった。野田村復興については、2017年調査と比べて復興が進んだと感じる人が増えている。また、野田村が暮らしやすくなったと感じるかどうかについては、半数の人は「変化なし」、残りは「暮らしやすくなった」と「暮らしにくくなった」人がほぼ同数だった。興味深いことに、生活や村の復興感と暮らしやすさにはほとんど関連がなく、自分の生活や村の復興は進んだが、村は暮らしにくくなったという人が1割ほどいた。暮らしやすさと関連の強い事柄を探ったところ、将来が明るく楽しくはつらつとしている人、地域の仲間や村外の人々との付き合いが増えた人、地域行事の世話をしている人との関連が強かった。生活復興や野田村復興については、関連の強い事柄について特筆すべきものはなかった。このことは、人々の日常生活は、震災からの復興というフェーズから、震災以前からの連続性というフェーズに移行したことを示唆している。

第4章では、被災者の復興感、および復興時期に影響を与える要因について考察した。復興感と復興がほぼ完了したと感じる時期に影響を与える要因について、決定木を用いて分析した。過去の調査で質問した項目と共通する要素を説明変数として分析を行った結果、次のことがわかった。まず、自分の生活の復興感については収入の維持という経済的要因が大きく影響しており、それ以外の要素はあまり影響していなかった。過去2回の調査結果から、震災直後の短期的な時期には人的ネットワークの影響が強いが、時間が経つにつれて経済的な要因や個人的な要因が強くなることが示されている。10年という長期においてその傾向が強まったと考えられる。

次に復興がほぼ完了したと感じる時期について、自分の生活では世帯年収が高い場合や最終学歴が高い場合は早期に復興が完了したと感じており、一方で震災前に比べて世帯人数が減った場合は復興が完了したと感じる時期が遅くなる傾向にあった。一方、野田村の復興については、子供がいてかつ、住宅の被害が小さい場合や最終学歴が高い場合など、自分の生活の復興感が高いグループほど復興が完了したと感じる時期が遅くなる傾向が示された。以上の点から、短期的には人的ネットワークの維持をしつつ、経済的自立を早める支援をすることがより早く復興感を高めることに繋がることを示唆された。

第5章では、震災から3年目の2013年の調査結果と比較しながら、移動性向の変化について概観した。まず、大きな変化として、「野田村に住み続けたい」とした割合が、2013年調査結果より6.1%増えており、定住志向が強まっていることが明らかになった。また、注目されたのは、住み続けたい理由として、「村内に仕事があるから」が2013年では3.4%に止まっていたのに対し、今回は22.0%で大幅に改善している。復興過程において、仕事の創出が順調に進んでいることがうかがえる。他方、女性や青年層の移住希望者において、「生活が不便だから」を理由として挙げた割合が4割に上っており、青年層や女性、子育て世代に配慮したまちづくりがこれから課題であると指摘した。

第6章では、新たなコミュニティづくりにおける世代差の問題を検討した。東日本大震

災に伴う津波の影響で、震災以前に住んでいた地域が居住禁止区域に設定されたことにより、元の場所から転居を余儀なくされた住民も多かった。その結果、仮設住宅を離れた後、地域コミュニティの変化が生じ、現在の生活にも多大な影響が及んでいることは明らかである。そうして形成された新たなコミュニティでは、世代差による考え方の違いがしばしば問題になっているが、これについて、本質的にどのような違いがあるのかを見出す。

AICとクロス集計による分析を行った結果、地域の活動への参加については年齢層が高いほど参加度が高く、年齢層が低いほど参加度が低い傾向、人間関係の増減については年齢層が高いほど付き合いが減ったとした割合が高く、年齢層が低いほど付き合いが増えたとした割合が高い傾向、震災前後での生活の比較については年齢層が高い人ほど震災以前の生活と比較して現在が悪化したと考えており、年齢層が低い人ほど震災以前の生活と比較して現在の方が良くなったと考えていることが読み取れた。これらを総合すると、年齢層の低い人は、現在の生活様式において、地域の活動に参加する頻度は低いものの、震災以前よりも周囲の人々との関係は増えていると感じている上、生活には満足しているという傾向があることが明らかになった。

第7章では、漢字一文字で表す10年間について、および生活で困っていることや村の将来の生活について、自由回答の分析を行った。込められている思いを正確にはとらえきれないが、この10年間を一文字で表した漢字で最も多かったのは、「変」であり、次がやや前向きなイメージの「進」であった。続いて多かったのは順に「耐」「苦」「忍」と、ややネガティブなイメージの漢字が続き、この10年間の複雑な状況が想像される。次に、生活で困っていることや将来の生活についての自由回答は、大きく分けると、雇用やインフラ面への不満や希望、少子高齢化や人口減少への不安や希望、教育や子育て支援への希望、つながりのメリットとデメリット、生活の苦しさ、震災やコロナ感染症への思い、村政やボランティアへの要望、の7つに整理された。前回の調査と比べると震災のことに直接的に触れている回答は大幅に減ったが、もちろん課題がなくなったわけではなく、また、震災以前から村が抱えていた課題は継続している様子がうかがえ、さまざまな意見が寄せられていた。

分析結果の詳細については、各章を参照されたい。

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与える要因の分析

第5章  
移動性向の  
変化について

第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る…  
自由回答より

付録  
回答者の集計表

付録  
回答者用質問紙



# 第2章

## 震災10年目の生活実態

李 永 俊

東日本大震災から10年目となる2021年度は多くの復興関連事業が完了する時期に当たる。行政が考えている復興と被災住民が感じている復興のズレが生じやすい時期でもある。また、2019年の台風19号や新型コロナウイルス問題など、新たな災害が復興過程で発生している。このような外部環境の変化が被災地の住民の生活にどのような変化をもたらしているのかを正確に把握することは、これからの復興政策を考える上で大変重要である。本章では、アンケート調査から見えた野田村に住む人々の収入と仕事、そして人間関係や主観的な復興感などを、データを通して概観する。

### 1. 生活実態

ここでは、個人属性別に収入や仕事の変化などの経済的側面に注目して震災10年目の生活実態を明らかにする。

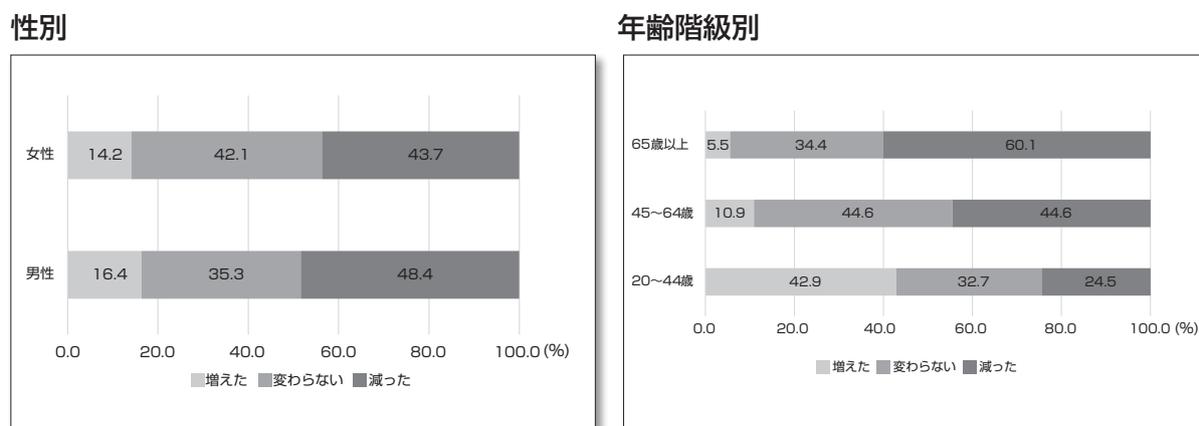


図2-1 性別・年齢階級別収入の変化

図2-1は、性別と年齢階級別に収入の変化をみたものである。薄いグレーから「増えた」、「変わらない」、「減った」の順になっている。性別で見ると男女とも4割以上が

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与えた要因の分析

第5章  
移動性向の  
変化について

第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る…  
自由回答より

付録  
回答者の集計表

付録  
回答者用質問紙

「減った」と回答しており、「増えた」と回答した人を大きく上回っている。男女間の統計的な差はみられなかった。右図は年齢階級別の変化を表している。表から20～44歳の青年層では、収入が増えた人が4割を超えているのに対し、中年層では10.9%、高齢者層では5.5%で、年齢階級別に大きな差があることがわかる。日本の年功的な賃金カーブと一致する傾向を示している。

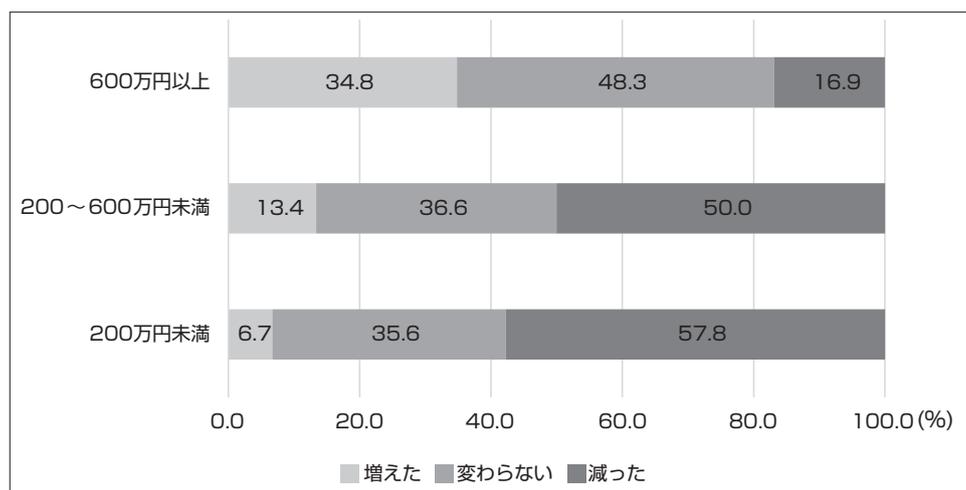


図2-2 世帯年収別収入の変化

次に世帯年収別に収入の変化をみたのが図2-2である。図では個人の年収を含め、同居している家族全体の年収を、600万円以上、200～600万円未満、200万円未満の3つのグループに分類して、収入の変化をみた。ここで注目されるのは、世帯年収が高くなるにつれ、増えた人の割合が高く、減った人の割合が低くなっているということである。その理由として、高齢層の一人暮らしや夫婦のみの世帯で収入減が起きていることが考えられる。また、若者がいる多世代世帯では世帯年収の水準も高く、なおかつ若者の存在が収入増につながっていると思われる。ただ、その結果として村内の所得格差が広がってしまうことには政策的な配慮が必要である。

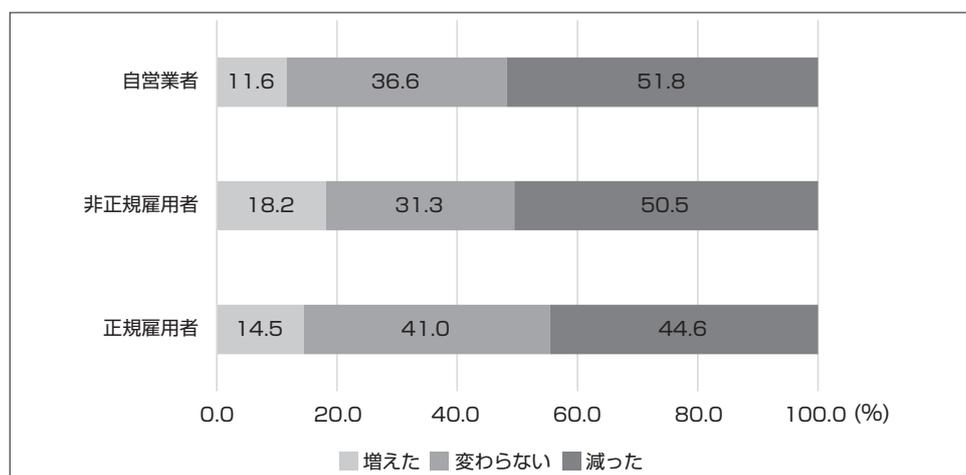


図2-3 雇用形態別収入の変化

図2-3は雇用形態別に収入の変化をみたものである。図から、自営業者と非正規雇用者で収入が減少した人の割合が高くなっていることが分かる。この背景には、相次いだ台風、新型コロナウイルス感染拡大に伴う県外からの観光客の激減などが大きく響いていると推測される。

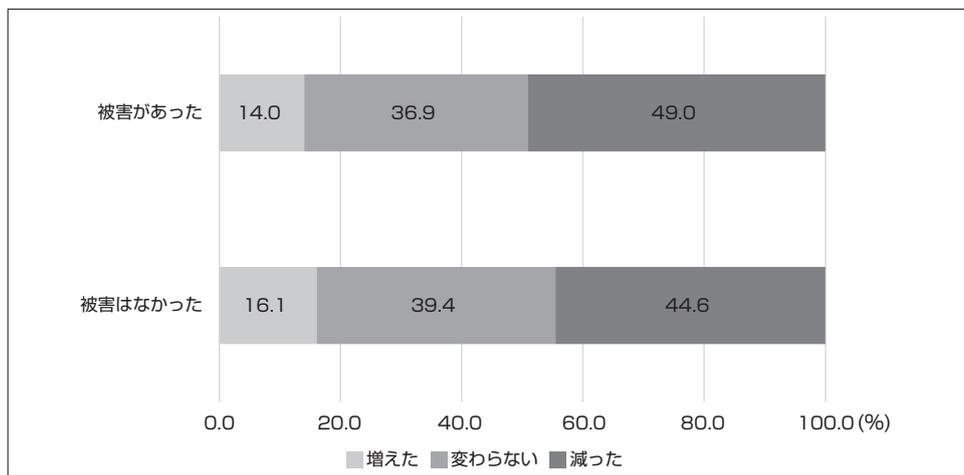
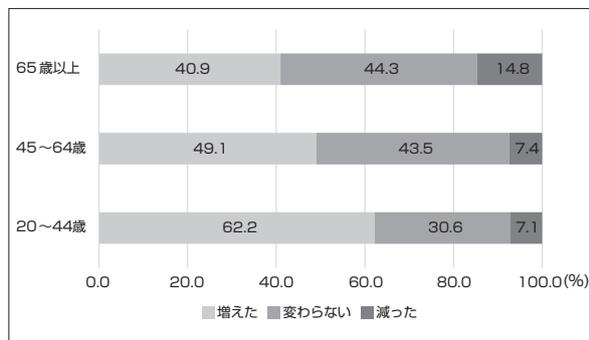


図2-4 被害有無別収入の変化

図2-4は、東日本大震災の大津波による住まいの被害有無別に震災前と現在で収入の変化をまとめたものである。図から、「被災はなかった」と回答した人に収入が増えたケースが多く、被災があったと回答した人に収入が減ったケースが多いように見える。ただ、カイ二乗検定の結果、両グループ間に統計的に明確な差は認められなかった。言い換えると、被災有無による収入の差はないと言える。震災から10年という歳月を経て、経済活動においては日常を取り戻していることを示唆している。

支出



貯蓄

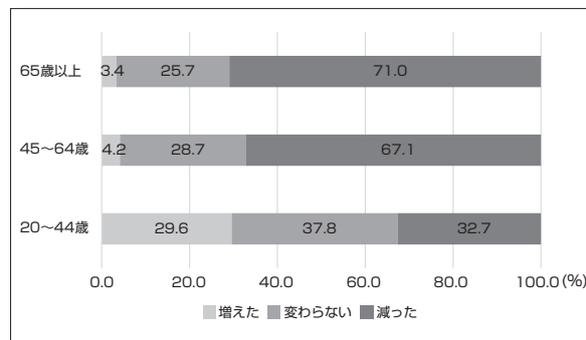


図2-5 年齢階級別支出・貯蓄の変化

図2-5は、収入の変化の差が大きかった年齢階級別に、支出（左図）と貯蓄（右図）の変化をまとめたものである。図から収入が増えた人の割合が多かった青年層で、支出も貯蓄も増えたと回答した人が多いことがわかる。青年層で活発に経済活動が行われている

ことが反映されている。他方、高齢者層では収入が増えた人より支出が増えたと回答した人の割合が高く、貯蓄も大幅に減少している様子がうかがえる。地域全体でこのような高齢者世帯に安心を届けられるような支援がより一層重要になると思われる。

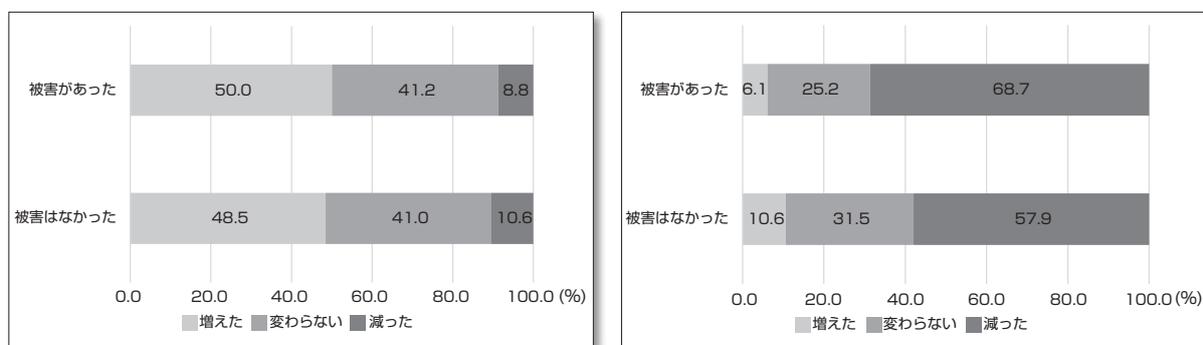


図2-6 被害有無別支出・貯蓄の変化

図2-6は、東日本大震災による住まいの被災有無による支出と貯蓄の変化の差を図示したものである。支出においては、大きな差は見られなかったが、貯蓄においては被害があったグループで貯蓄が減ったと回答した人が68.7%に上っており、被害はなかったグループより10.8ポイント高くなっている。住まいの再建や復旧に大きな支出が重なったことがこの結果につながっていると思われる。長期的な経済支援が欠かせないことがこの結果からうかがえる。

次に、仕事の変化をみる。仕事については、「あなたの主な職業は、震災で変化しましたか」という質問への回答をまとめたものである。図2-7は震災前の雇用形態別にまとめたものである。図から、震災をきっかけに職を失った人が、非正規雇用者で6.0%、正規雇用者で4.2%、自営業者で3.4%である。また、転職・転業を強いられた人も非正規雇用者で25.3%、正規雇用者で15.3%、自営業者で4.3%もあり、震災が仕事において大きな影響を与えたことがわかる。ただ、震災をきっかけに職についたと答えた人も、非正規雇用者で6.0%、正規雇用者で2.8%、自営業者で1.7%と若干ではあるが一定数いることがわかる。ただ、雇用形態別の特徴をみると、職の変化が大きいのは非正規雇用者と自営業者で、災害のような社会経済環境の変化が弱者に対してより大きいダメージを与えていることがうかがえる。

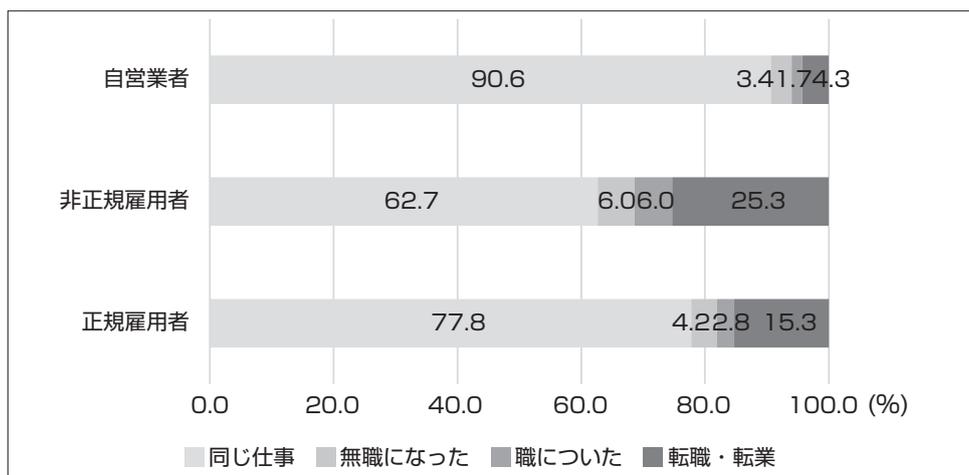
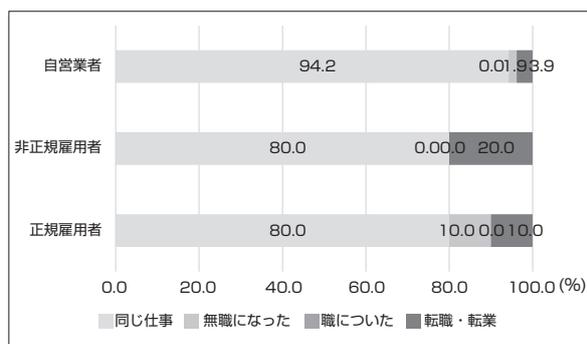
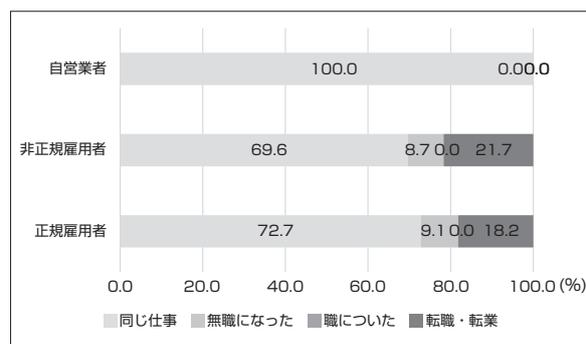


図2-7 雇用形態別仕事の変化

農林水産業



建設業



サービス業

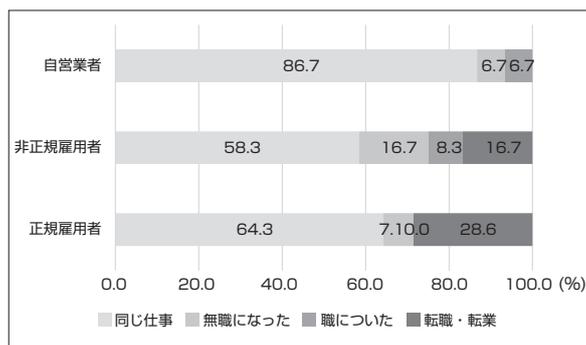


図2-8 産業別・雇用形態別仕事の変化

図2-8は、雇用形態別に仕事の変化を業種別にまとめたものである。同じ仕事であると回答した人の割合に注目する農林水産業と建設業においては、自営業者はほぼ全員が震災前と同じ職業についており、安定的であることがわかる。他方、サービス業においては非正規雇用者を中心に雇用変動が大きく、流動的であることがわかる。この流動性がサービス業の強みでもあるし、弱みでもあると思われる。

次に職場の復旧・復興状況を見てみよう。図2-9は震災前の勤め先の現時点での復旧

状況を尋ねた結果である。産業計に注目すると、5.8%が「廃業した」、5.5%が「まだ十分に復旧したとはいえない」と回答しており、震災の爪痕がまだまだ大きいことがわかる。産業別の特徴をみると、建設業において、「被害はなかった」と答えた人の割合が高かった。農林水産業では、「ほぼ震災前の状況に復旧した」と回答した人が半数に上っており、復旧が順調であることが分かる。ただ、全ての産業で1割強は「廃業した」もしくは「まだ不十分である」と答えており、復旧にはまだまだ時間を要していることがうかがえる。

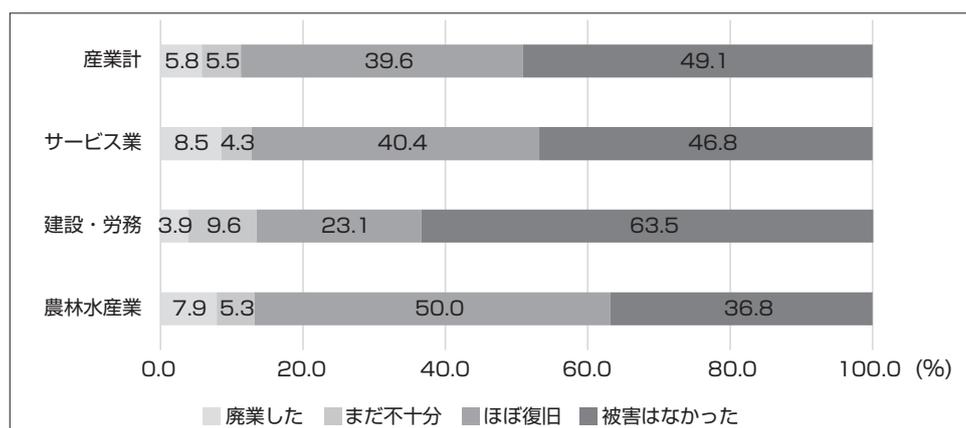


図2-9 産業別職場の復興状況

## 2. 人間関係

災害からの復興を支えるのに、経済的な環境と同じく重要なのは、支えとなる人との付き合いである。社会心理学や経済学では人付き合いを、社会関係資本といい、進学や就職だけでなく、営業活動などの経済活動を効率的に行う要因にもなる。また、人々に対する信頼や安心感から人々の満足度を高める要因にもなっていると考えられている。そのため、筆者らは災害からの復興感を高める要因であると注目してきた。ここでは、人との付き合いが震災から10年間でどのように変化してきたを概観する。

表2-1 性別人付き合いの変化

(単位：%)

	男性		女性	
	増えた	減った	増えた	減った
家族・親せき	7.8	14.3	9.4	11.2
地域の仲間	9.4	23.1	10.5	20.9
仕事の仲間	10.3	25.5	12.2	16.5
村外の人々	15.1	18.7	8.3	18.1

表2-1は、「震災前後で野田村での、家族・親せき、地域の仲間、仕事の仲間、村外の人々との付き合いは増えましたか、減りましたか」の答えの中から、「増えた」と「減った」

を取り出し、まとめたものである。まず、残念ながら男女ともに「増えた」と回答した人より「減った」と回答した人の割合が高いことが気になる。次に、性別でみると、男性では仕事の仲間が大幅に減っているのに対し、女性では地域の仲間が2割以上減っていると答えている。また、村外の人々との付き合いでは男性が増えたと答えた人が15.1%、女性では8.3%で、村外からのボランティアなどとの付き合いは男性が多いことがわかる。

表2-2 年齢階級別人付き合いの変化

	20～44歳		45～64歳		65歳以上	
	増えた	減った	増えた	減った	増えた	減った
家族・親せき	16.5	8.7	5.1	11.1	9.6	15.3
地域の仲間	21.6	11.8	6.9	19.4	7.7	30.0
仕事の仲間	21.6	7.8	8.7	17.8	7.4	32.4
村外の人々	24.3	9.7	11.3	13.4	4.3	29.3

次に表2-2は、年齢階級別の違いをまとめたものである。年齢階級別では、青年層と高齢者層で大きく異なることがわかる。青年層では、全ての属性の人との付き合いが増えたという回答の割合が、減ったという回答の人より多くなっているのに対し、65歳以上の高齢者層では、減ったという回答の人が全ての項目で多くなっている。両年代で大きな差があることがわかる。特に地域の仲間や仕事の仲間では、高齢者層で3割が減ったと答えているのに対し、青年層では2割以上が増えていると回答している。また、村外の人々との付き合いについても、高齢者層では29.3%が減ったと答えているのに対し、青年層では24.3%が増えたという回答があり、真逆の様子がうかがえる。村外のボランティアの多くが若い学生であることや、様々なイベントなどを中心に活動を展開していることも影響しているのではと推測される。より高齢者に配慮した活動の展開も今後充実させなければならないと思われる。

表2-3 被害有無別人付き合いの変化

	被害はなかった		被害があった	
	増えた	減った	増えた	減った
家族・親せき	7.6	10.2	10.2	17.1
地域の仲間	11.2	13.6	7.0	38.0
仕事の仲間	11.3	19.2	10.1	24.1
村外の人々	12.8	16.1	9.5	22.6

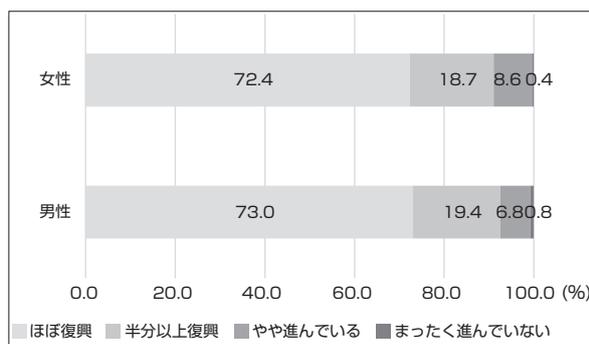
次に被害有無別に整理してみる。表2-3は震災による被害有無別にみたものである。被害があった人には、家族・親せきや地域仲間が減ったと答えた人が多いことがわかる。その背景には災害による直接の被害と震災後に仮設住宅や高台移転など、震災後の住まいの移動に伴う付き合いの途切れなどが影響していると思われる。新しいコミュニティの中でまだ十分に人間関係が形成されていないこともこの結果からうかがうことができる。新

しいコミュニティ形成への支援がより一層必要であると思われる。

### 3. 復興感の決定要因について

以上のような経済的な側面や人間関係などを総合して、人々は生活の満足度を得ることができる。仕事が安定し、収入が増え、家族・親せきや地域の仲間なども良好な関係を築くと、人々は生活に大きな満足感を感じる。そのような総合的な評価指標としてここでは復興感を用いる。復興感についてはさまざまな定義があるが、ここでは「あなたは、自分の生活（野田村）の復興が、どれくらい進んでいると思いますか」の問いに、「ほぼ復興した」「半分以上復興した」「やや進んでいる」「まったく進んでいない」の4段階評価を行った。

自分の生活



野田村の復興

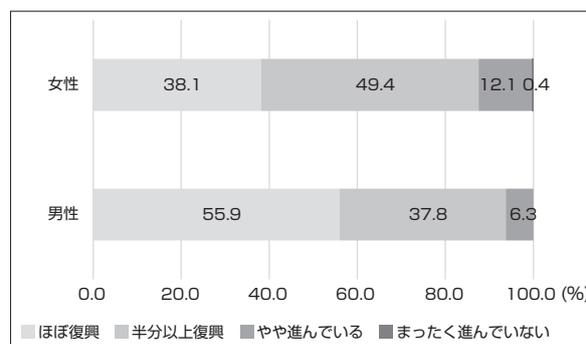
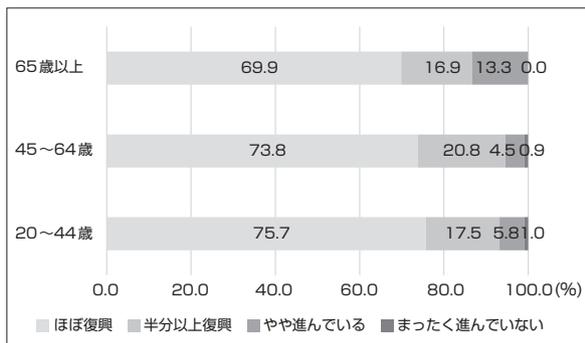


図2-10 性別復興感の違い

図2-10は男女別の復興感の差を図示したものである。まず自分の生活について、男女ともに7割以上が「ほぼ復興している」と答えており、順調に生活復興が進んでいることが分かる。ただ、「半分以上」と答えた人が約2割、「やや進んでいる」が男性で6.8%、女性で8.6%、「まったく進んでいない」と感じている人が男性で0.8%、女性で0.4%もいることが注目される。災害からの復興がいかに難しいのかが感じられる。

他方、野田村の復興状況についての認識は男女で大きく異なっている。男性では55.9%が「ほぼ復興した」と感じているのに対し、女性では「復興した」と感じている人が38.1%に留まっており、大きな差が生じている。ただ、半分以上を含めると男女間に大きな差は見られない。どのような部分で認識の差が生じているのか、復興政策を進める上で、人々の属性別にきめ細かな対応が求められていることがわかる。

自分の生活



野田村の復興

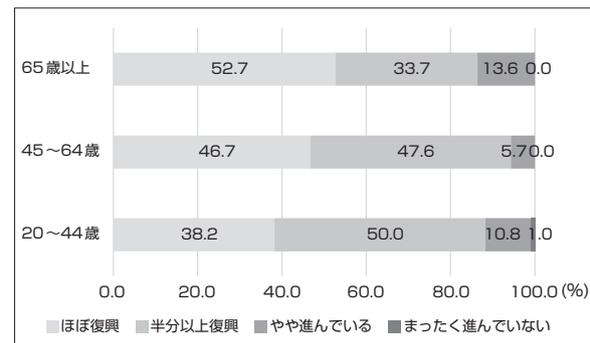
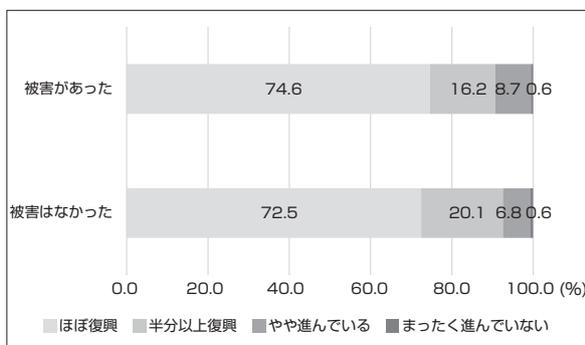


図2-11 年齢階級別復興感の違い

こちらは年齢階級別に復興感の差をみたものである。自分の生活では、「ほぼ復興した」の割合は年齢階級別に大きな差は見られないが、「やや進んでいる」では高齢者層で13.3%となっており、青年層の5.8%を大きく上回っている。他方、野田村の復興において「ほぼ復興した」の割合が高齢者層では52.7%で青年層では38.2%となっており、年齢階級別に大きな差が見られた。年齢階級別に村へ求める生活インフラの違いなどがこの結果に反映されていると思われる。前述したように、村民一人一人の声に耳を傾けながらきめ細かな配慮が必要であることがこの結果からもうかがえる。

自分の生活



野田村の復興

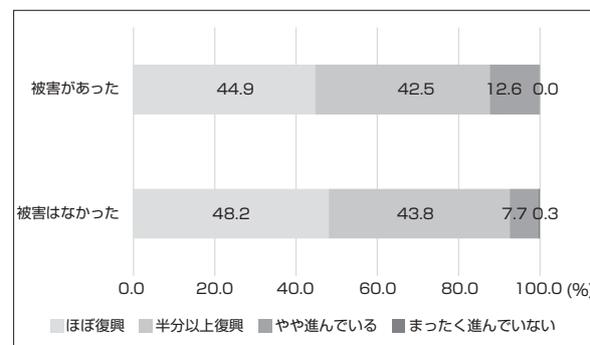


図2-12 被害有無別復興感の違い

図2-12は災害による被害有無別にみたものである。まず、カイ二乗検定において自分の生活および野田村の復興、両方において被害有無の統計的な差はなかったことが注目される。つまり、被害有無の影響が薄れていることを表している。その理由としては、被害を受けた被災者の皆さんの日常を取り戻すための努力があったからだと思われる。また、地域の仲間や村役場など多くの方の配慮とサポートがこの結果につながったと言えるだろう。村外からのボランティアなども一定の貢献をしていると評価できる。そして、震災から10年という時間の経過が被害有無の影響を薄めているのだろう。

表2-4 復興感の決定要因分析結果

	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4
女性ダミー	-0.02	-0.03	-0.01	-0.01
20～44歳ダミー	0.05	-0.02	0.08	0.01
65歳以上ダミー	-0.07	0.00	-0.04	-0.01
有配偶ダミー	0.16 **	0.09	0.15 **	0.08
被害ありダミー	0.05	0.03	0.03	0.01
正規雇用者ダミー	0.07	0.09	0.09	0.09
自営業者ダミー	-0.10	-0.13	-0.07	-0.09
収入増ダミー		0.26 ***		0.24 **
支出増ダミー		-0.08		-0.07
貯金増ダミー		0.11		0.10
家族・親せき増ダミー			-0.39 ***	-0.25 **
地域の仲間増ダミー			0.00	0.04
仕事の仲間増ダミー			-0.01	-0.11
村外の人々増ダミー			0.22 **	0.14
定数	3.53 ***	3.60 ***	3.53 ***	3.61 ***
サンプル数	479	424	441	397
決定係数	0.0235	0.0505	0.0579	0.0641

表2-4は、自分の生活の復興感を、個人属性と経済的变化、人との付き合いの変化で回帰分析をした結果である。モデル1は個人属性のみ、モデル2は個人属性+経済的变化、モデル3は個人属性+人との付き合いの変化、モデル4は全要因を含めた分析となっている。

分析結果から、有配偶ダミー変数はモデル1と3で、5%水準で正で有意となっており、配偶者有無が復興感に大きな影響を与えていることがわかる。また、女性ダミー変数の係数が負であることを考慮すると、一人暮らしの男性に対する十分な配慮が必要であることがうかがえる。次に注目されるのは収入増ダミー変数である。係数が正で有意となっており、収入の増減が災害からの復興に大きく左右していることがわかる。

人との付き合いの変数においては、家族・親せき増ダミー変数がモデル3では1%で、モデル4では5%で有意で、係数が負である。家族や親せきは困難を乗り越える大きな力にもなるが、逆に増えすぎると生活満足度を下げる要因にもなることがこの結果からうかがえる。狭い地域内の親せき付き合いがいかに難しいものかがわかる。もう一点、注目されるのは、村外の人々との付き合い増のダミー変数が5%水準で有意で、係数が正であることである。この結果は、村外からのボランティアなどとの付き合いが野田村住民の復興感を高めているということの意味する。活動を継続してきたボランティアの一人として、素直に嬉しく思う。

最後に、被害ありダミー変数の結果に注目されたい。すべてのモデルにおいて、統計的に有意でなく、村民の皆さんの生活復興感には被害有無の影響が残っていないことをこの結果は表している。前述したように、被災者の皆さんの努力と多くの人々の支えがこの結

果につながっていると言えるだろう。ただ、図2-12で示したように、被災者の中には今も苦しんでいる人々が1割近く存在するという事実もしっかり受け止める必要がある。声なき声に耳を傾ける繊細な支援がより一層求められていることを指摘したい。

## 4. 小括

本章では、震災から10年目の生活実態と復興感について概観した。経済活動においては、青年層が活発に経済活動を行っているのに対し、高齢者層で収入、支出、貯蓄共に減少した人が多く、高齢者層への配慮が求められていることがわかった。また、人との付き合いにおいても、若年層では地域の仲間、仕事の仲間、村外の人々共に増えている人が多いのに対し、高齢者層ではその真逆になっている。経済活動や人との付き合いは、行動範囲などとも大きく関係するので、年齢が若いほど、より活発になっていることがこの結果につながっていると思われる。高齢者層で行動範囲が狭くなった原因には、震災による住まいの移動などが影響しているものと推測される。高齢者層においても震災以前のようなコミュニティが形成できるように、交通インフラや高齢者の移動を手助けするような支援が必要であると思われる。そして、重要な論点である震災による被害の有無による生活への影響は、概ね薄まっており、震災の影響がようやく柔らいでいることがわかった。ただ、中にはいまだに十分に復興していると感じられない人々もいることを忘れてはならない。より一層のきめ細かい支援が求められる。

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与えた要因の分析

第5章  
移動性向の  
変化について

第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る…  
自由回答より

付録  
回答者の集計表

付録  
回答者用質問紙



# 第3章

## 震災10年目の復興感

永田素彦

東日本大震災津波から2021年3月11日でちょうど10年になる。野田村では2017年に住宅再建がほぼ完了し、津波で家を失い仮設住宅などで暮らしていた人たちの多くが新たな「自宅」での生活をスタートさせた。野田村全体を見ても、防潮堤や復興道路の建設が完了に近づくなど、復興が着実に進んでいる。震災から10年を経て、このように復興が進んでいる中、野田村の人々は自身の生活や野田村がどのくらい復興したと感じているだろうか。震災前と比べて、野田村は暮らしやすい村になっただろうか。復興感や暮らしやすさの認知の違いをもたらしているのは、どのような事柄だろうか。

本章では、震災から10年目にあたって、野田村の人々が自身の生活や野田村がどの程度復興し、またどのように変化したと考えているのかを明らかにする。以下、第1節では、自身の生活や野田村の復興がどのくらい進んでいると感じているか、またその要因は何かを、2017年の調査と比較しつつ述べる。第2節では、震災をきっかけとした人間関係の変化や震災前後での生活の質の変化に焦点をあてる。最後に第3節では、野田村が震災前とくらべて暮らしやすい村になったと思われるかどうか、どのような事柄が暮らしやすさの認知と関連しているのかを分析する。

### 1. 生活の復興や村の復興はどのくらい進んでいると感じているか

震災から10年、野田村の人々は自身の生活復興がどのくらい進んでいると感じているだろうか。「あなたは、自分の生活の復興が、どれくらい進んでいると思いますか」という質問への回答は、「ほぼ復興した」が66%、「半分以上復興した」が19%、「やや進んでいる」が7%、「まったく進んでいない」が0.5%だった（無回答8%、図3-1）。半分以上復興したという声が大多数を占めるが、裏を返せば、1割程度の人々は震災から10年経ってなお生活復興が半分も進んでいないと感じているということでもある。

2013年および2017年の調査結果と比べると、2013年から2017年にかけて生活の復興はかなり進んだと感じられており、2017年と2020年では大きな変化はないことがわかる。少し詳しくみると、「ほぼ復興した」がやや減少しその分「半分以上復興した」が増加している。

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与え要因の分析

第5章  
移動性向の  
変化について

第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る…  
自由回答より

付録  
回答者の集計表

付録  
回答者用質問紙

また、「まったく進んでいない」と感じている人がさらに減少した。全体として、2017年と比べると生活復興が大きく進んでいると感じられているわけではないことがわかる。

では、野田村全体の復興はどのくらい進んでいるとされているだろうか。「あなたは、野田村の復興が、どれくらい進んでいると思いますか」という質問への回答は、「ほぼ復興した」が44%、「半分以上復興した」が42%、「やや進んでいる」が8%、「まったく進んでいない」が0%だった（無回答6%、図3-2）。「ほぼ復興した」が半分以下なので、まだ十分に復興したと感じられているわけではないが、2013年、2017年と比べると野田村の復興は確かに進んでいると感じられているようだ。

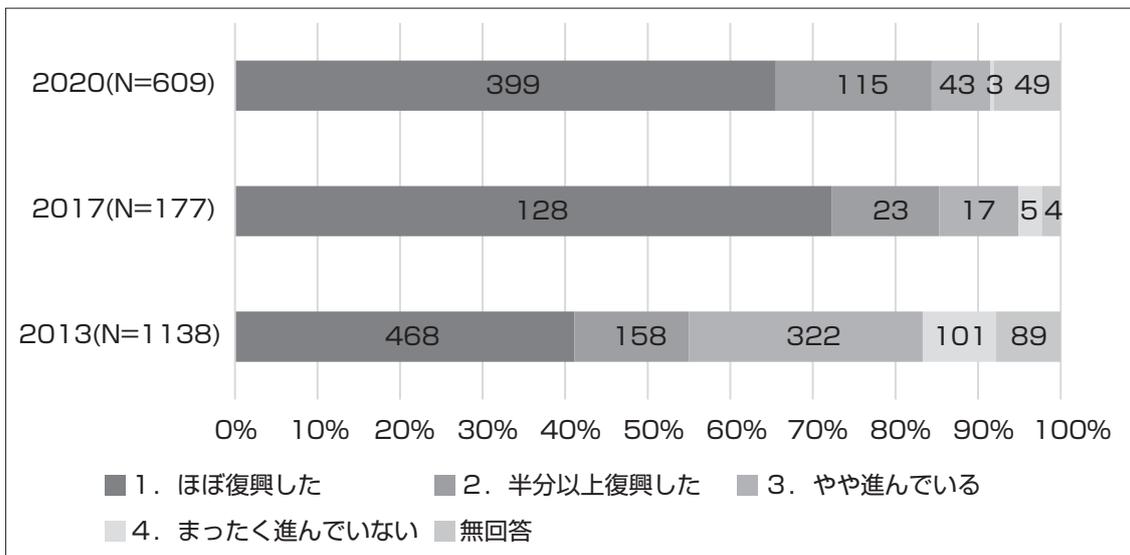


図3-1 自身の生活復興がどれくらい進んでいるか

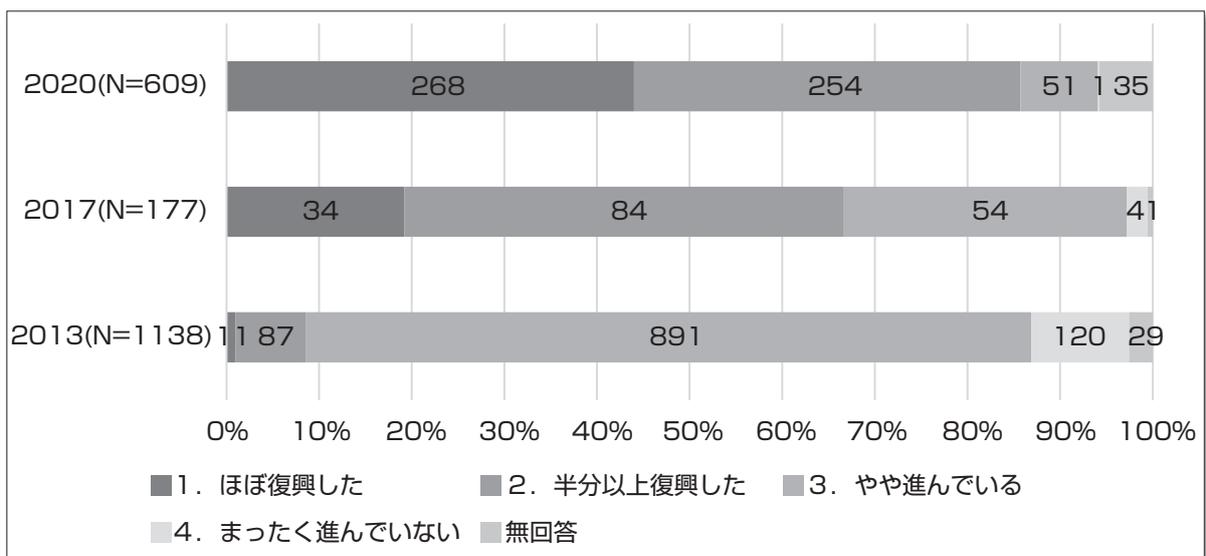


図3-2 野田村の復興がどれくらい進んでいるか

生活復興感と野田村復興感の関連を見るために、両者のクロス表を作成した(表3-1)。ここでは「やや進んでいる」と「まったく進んでいない」を統合し、無回答は削除している。約7割の人が自身の生活復興と野田村の復興のスピードが一致していると感じており、相対的に生活の復興と比べて野田村の復興が遅いと感じている人が27%、逆に自身の生活復興の方が遅いと感じている人が4%となっている。

では自身の生活や野田村の復興が進んでいると感じる程度は、どのような事柄と関連が強いのだろうか。このことを明らかにするために、生活復興感、野田村復興感をそれぞれ目的変数として、AIC(赤池情報量基準)によるクロス表の分析を行った。説明変数にはほぼすべての質問項目を用いた。その際、必要に応じて回答選択肢の統合を行った(例えば、「あなたは、震災以前と比べて、野田村が暮らしやすい村になったと思いますか」という質問の回答選択肢について、「1. 暮らしやすくなった」「2. 少し暮らしやすくなった」「3. 変わらない」「4. 少し暮らしにくくなった」「5. 暮らしにくくなった」の5つから、1と2、4と5をそれぞれ一つにまとめて「暮らしやすくなった」「変わらない」「暮らしにくくなった」の3つに統合する、など)。なお、AICの値が小さいほど(負で絶対値が大きいほど)、その説明変数は目的変数と強く関連している。AICの値が正の場合には、関連があるとはいえない。

表3-1 生活復興感と野田村復興感のクロス表

		野田村復興感			合計
		1	2	3	
生活復興感	1	245	124	17	386
	2	6	101	8	115
	3	3	13	27	43
合計		254	238	52	544

表3-2に生活復興感と関連の強い項目の主なものを列挙している。野田村復興感との関連がとびぬけて強いが、これは両者が一致している人が全体の7割を占めることによる。野田村復興感をのぞけば、生活復興感と最も強く関連しているのは、「震災以降、自分だけが頼りという気持ちが増した」という項目であった。具体的には、自分の生活がほぼ復興したと感じている人とそれ以外の人を比べると、後者の方が自分だけが頼りと感じている割合が多い。ほぼ復興した人は、それ以外の人と比べて、相対的に「忙しく活動的な時間を送ること」や「日常生活を楽しく送ること」や「自分のしていることに生きがいを感じる」が増え、「被災から立ち直りきっかけを与えてくれた人」や「心を開いて話すことができる人」や「被災後の生活設計が定まったと感じられるような人」との出会いがあるなど、生活の質が震災前と比べて充実しているとともに、震災をきっかけとした重要他者との出会いを経験している割合が多いことがわかる。また、「自分だけが頼り」に次いで関連が強かったのは、「震災前と現在で収入が増えたか減ったか」という項目であった。ほぼ復興した人はそれ以外の人と比べて収入が増えた人の割合が多く、逆に、それ以外の

人では収入が減った人の割合が多い。収入の増減も、生活の復興を感じる基準の一つとなっていることが見てとれる。なお、震災による住宅の被害の程度、仮設住宅での生活を経験したかどうか、年齢や性別などのデモグラフィック要因などは、生活復興感との関連は見られなかった。

表3-2 生活復興感と関連の強い項目群 (AIC)

	AIC 値
1 野田村の復興がどれくらい進んでいると思うか	-227.1
2 震災以降、自分だけが頼りという気持ちが増した	-17.43
3 震災前と現在で、収入が増えた／減った	-16.07
4 震災前と比べて、忙しく活動的な生活を送ることが増えた／減った	-14.48
5 震災以降、ボランティアのありがたさを知った	-12.47
6 震災以降、被災から立ち直るきっかけを与えてくれた人がいた	-11.86
7 震災前と比べて、日常生活を楽しく送ることが増えた／減った	-11.03
8 震災以降、心を開いて話すことができる人との出会いがあった	-10.9
9 震災以降、近所づきあいの大切さを知った	-10.67
10 震災前と比べて、自分のしていることに生きがいを感じるが増えた／減った	-9.88
11 震災以降、その人のおかげで被災後の生活設計が定まったと感じられるような人との出会いがあった。	-9.54
12 震災前後で仕事の仲間との付き合いが増えた／減った	-9.16

野田村復興感については、生活復興感を除けば、明らかに強く関連している項目はなかった。やや関連がある項目としては性別があり (AIC値は-7.79)、男性の方が女性よりも野田村の復興が進んでいると感じている傾向があった。なお後述するように、野田村が暮らしやすい村になったと思うかどうかは、生活復興感とも野田村復興感とも関連がなかった。

## 2. 震災をきっかけとした生活や人間関係の変化

今回の調査では、2017年調査に引き続き、阪神・淡路大震災のケースを参考にして、(1) 震災以降に生じた人と人のつながりの変化、(2) 震災前と現在の生活の変化を尋ねた。本節ではその結果を報告する。

(1) 「震災以降、人と人のつながりに、つぎのような変化や出来事がありましたか。それぞれについて、それが自分自身に「あてはまる」か「あてはまらない」かのどちらかに○をしてください」という質問への回答を図3-3に示す。

図3-3のグラフを見ると、まず、約6割の人々が、⑤ボランティアのありがたさや⑨近所づきあいの大切さを知ったと回答している。⑧行政への頼もしさが増したという人も4割近く存在する。また、概ね2割前後の人々が、震災後に何らかの意味での重要他者との出会い (①心を開いて話すことができる人との出会い、②その人のおかげで被災後の生活設計が定まったと感じられるような人との出会い、③被災から立ち直るきっかけを与え

てくれた人、④その後の人生を変える出会い)を経験している。⑥震災をきっかけに同志的なつながりができたという人も2割以上いる。一方で、⑦自分だけが頼りという気持ちが増したという人も2割程度存在している。このように、震災をきっかけに、ボランティア、近所づきあい、行政の重要性を(再)確認したり、重要他者との出会いを経験した人が一定程度いることがわかる。以上の傾向は、2017年調査からほとんど変化していない。

また、前節で述べたように、これらの項目は生活復興感の高低と関連していた。特に、復興感が高い人は、重要他者との出会い(①、②、③)を経験している割合が高く、また、ボランティアや近所づきあいに助けられたと感じている割合が高い点が重要である。これらの関連は、2017年の調査ではあまり見られなかったものである(⑦と③のみ弱い関連があった)。なお、野田村復興感との関連は、2017年調査に続いて今回の調査でも特に見出されなかった。

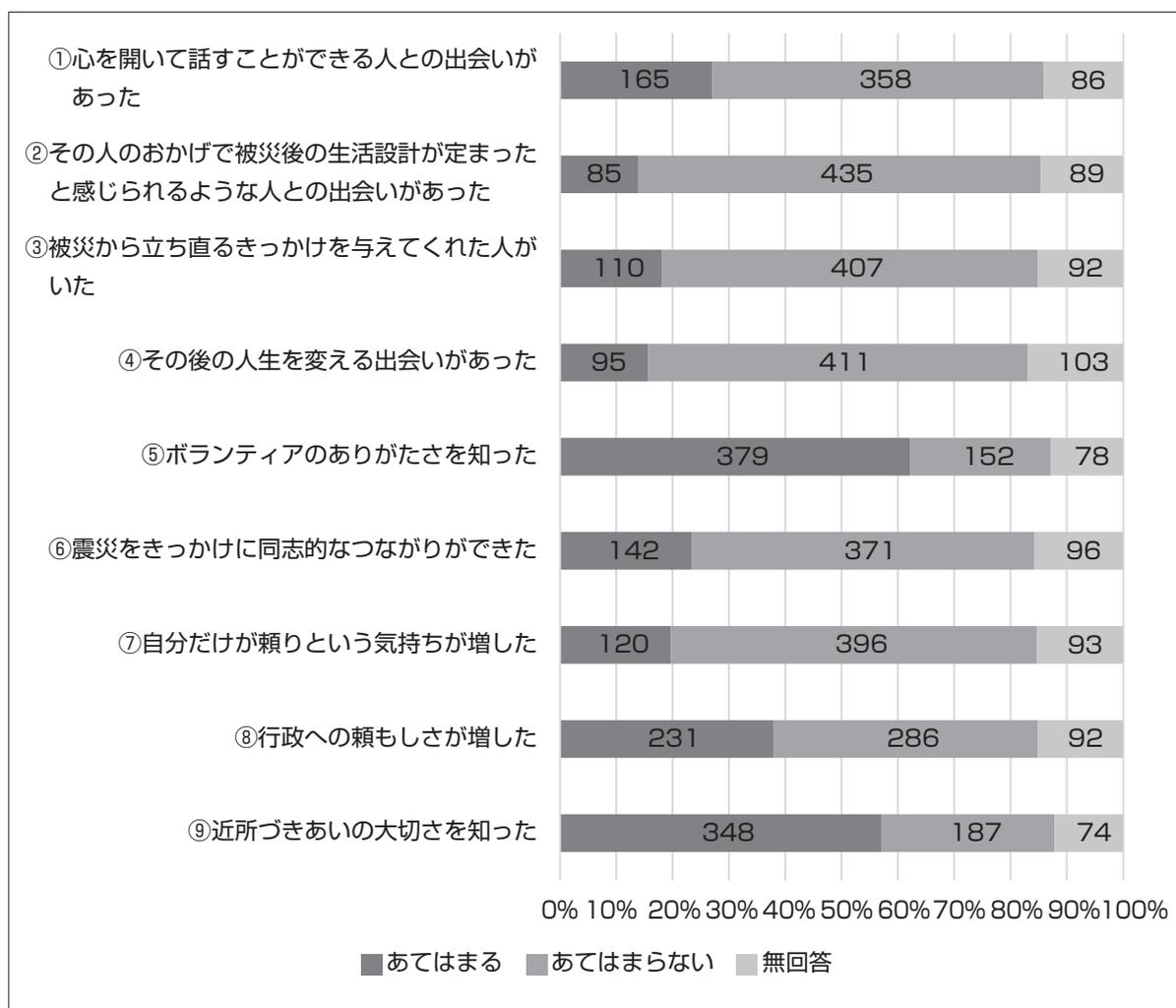


図3-3 震災をきっかけとした他者とのつながりの変化

(2)「あなたは、現在（令和2年8月）の生活を、震災前の生活と比べてどのように感じられますか。以下のそれぞれの質問を読み、当てはまる番号に○をつけてください」という質問への回答を図3-4に示す。

図3-4を見ると、質問項目によって差はあるものの、それぞれの項目について、おおよそ半数の人々は震災の前と後で生活の質は「変わらない」と回答している。「かなり増えた」および「少し増えた」の割合が比較的多い項目は、順に、⑦家で過ごす時間（42%）、⑧仕事の量（24%）、①忙しく活動的な生活を送ること（22%）、②自分のしていることに生きがいを感じることに（17%）、④日常生活を楽しく送ること（16%）、③まわりの人びととうまくつきあっていくこと（16%）、⑥元気ではつらつとしていること（10%）、⑤自分の将来は明るいと感じること（9%）となっている。震災前と比べて物理的にも精神的にも生活の質が充実していると感じている人がある程度の割合で存在していることがわかる。

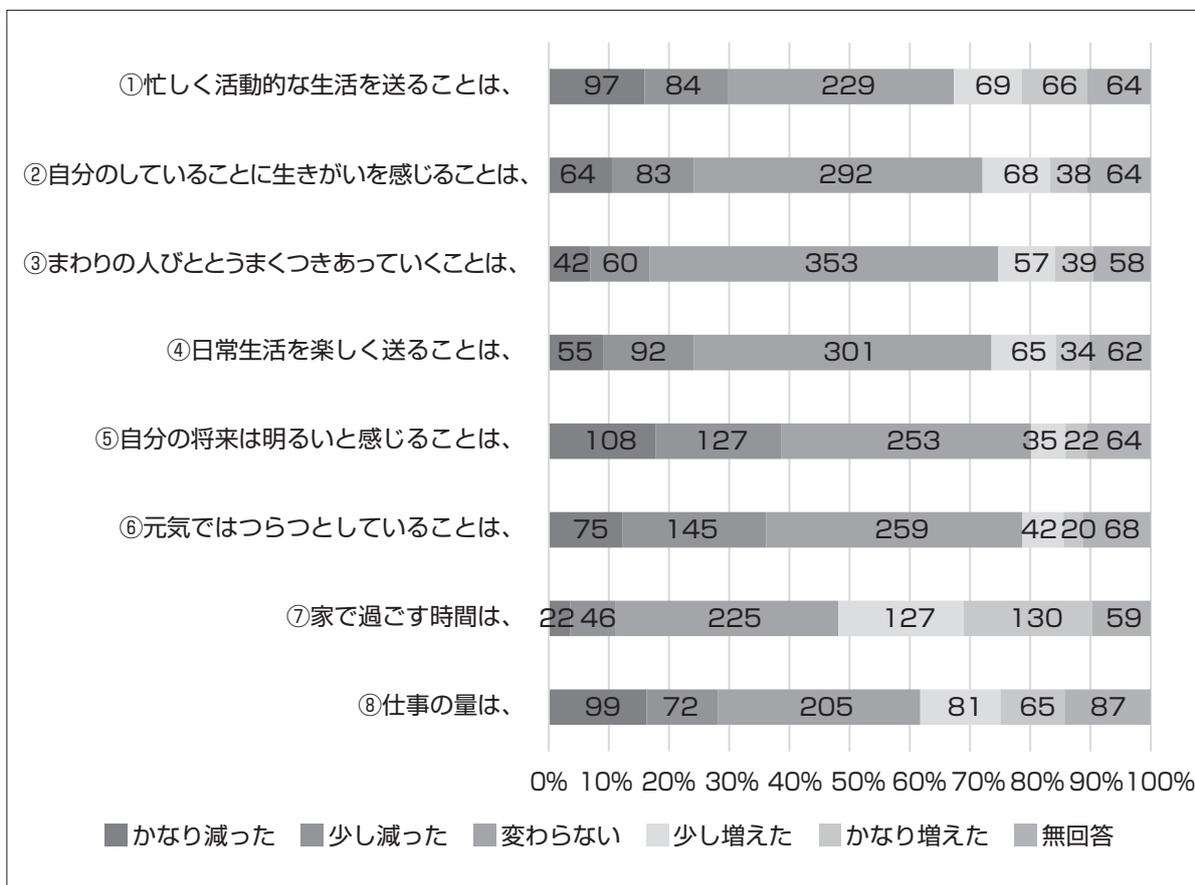


図3-4 震災前後の生活の質の変化

一方、「減った」および「かなり減った」の割合を見ると、多い順に、⑤自分の将来は明るいと感じること（39%）、⑥元気ではつらつとしていること（36%）、①忙しく活動的な生活を送ること（30%）、⑧仕事の量（28%）、②自分のしていることに生きがいを感じることに（24%）、④日常生活を楽しく送ること（24%）、③まわりの人びととうまくつきあっていくこと（17%）、⑦家で過ごす時間（11%）となっており、総体的にはどちらかとい

えば震災前と比べて生活の充実度が低くなっているという回答の方が多い。特に、⑤自分の将来は明るいと感じることや、⑥元気ではつつつとしていることは、震災前よりも減ったという人が多い。

また、前節でも述べたように、これらの項目も生活復興感の高低と関連していた。具体的には、生活復興感の高い人は、震災前と比べて①、②、④が増えたという割合が高かった。これらの関連は、2017年の調査では見られなかったものである。なお、これらの項目と野田村復興感の間には特に関連は見られなかった。

### 3. 野田村は暮らしやすい村になったか

野田村の人々は、震災前と比べて、野田村がどのくらい暮らしやすくなったと感じているだろうか。「あなたは、震災以前と比べて、野田村が暮らしやすい村になったと思いますか」という質問への回答は、「暮らしやすくなった」が7%、「少し暮らしやすくなった」が17%、「変わらない」が50%、「少し暮らしにくくなった」が15%、「暮らしにくくなった」が4%となっている（無回答7%）。半数の人々は震災前後で暮らしやすさは変わらないと感じている一方、残る半数の人々は、震災前と比べて暮らしやすくなったと感じている人と暮らしにくくなったと感じている人にほぼ二分されている。

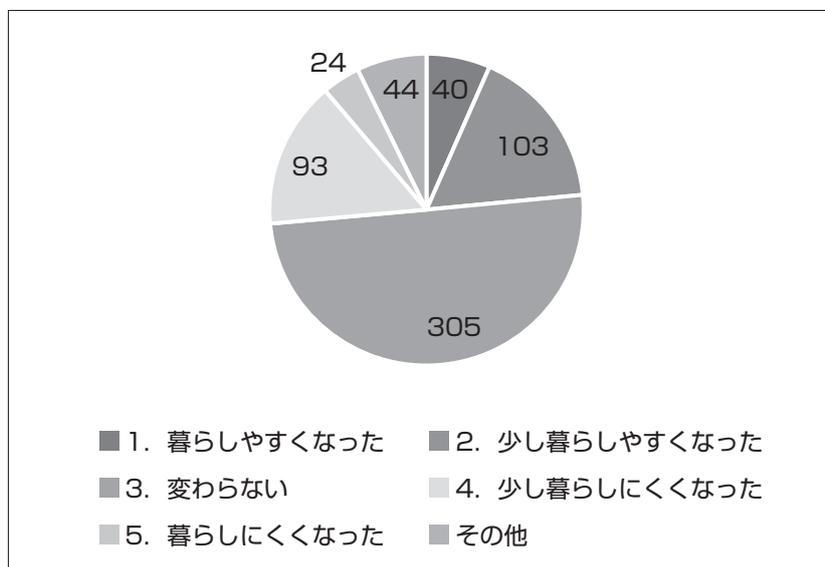


図3-5 野田村は暮らしやすくなったか

次に、「野田村の暮らしやすさ」と生活復興感、野田村復興感の関連を見るために、それぞれのクロス表を作成した（表3-3、表3-4）。ここでは「暮らしやすくなった」と「少し暮らしやすくなった」、「暮らしにくくなった」と「少し暮らしにくくなった」をそれぞれ統合し、その他は削除している。生活復興感との関連をみると、自分の生活はほぼ復興したものの、野田村は以前よりも暮らしにくくなったと感じている人が13%存在す

る。同様に、野田村復興感との関連についても、野田村はほぼ復興したが、以前よりも暮らしにくくなったと感じている人が8%ほど存在する。生活の復興や野田村の復興が進んだからといって、野田村が必ずしも暮らしやすい村になったわけではない点には留意する必要があるだろう。

表3-3 野田村の暮らしやすさと生活復興感のクロス表

		生活復興感			合計
		ほぼ復興	半分以上	やや	
野田村の 暮らしやすさ	暮らしやすい	107	21	9	137
	変わらない	196	57	25	278
	暮らしにくい	69	34	8	111
合計		372	112	42	526

表3-4 野田村の暮らしやすさと野田村復興感のクロス表

		野田村復興感			合計
		ほぼ復興	半分以上	やや	
野田村の 暮らしやすさ	暮らしやすい	75	56	8	139
	変わらない	138	121	26	285
	暮らしにくい	42	56	16	114
合計		255	233	50	538

では、震災前と比べて野田村が暮らしやすくなったと思うかどうかは、どのような事柄と関連があるのだろうか。野田村が暮らしやすくなったと感じる人と、逆に暮らしにくくなったと感じる人の違いは何だろうか。このことを明らかにするために、野田村の暮らしやすさを目的変数として、AIC（赤池情報量基準）によるクロス表の分析を行った。説明変数にはほぼすべての質問項目を用いた。

表3-5に、野田村の暮らしやすさと関連の強い項目の一覧を示す。野田村が暮らしやすくなったと思うかどうかにも最も強く関連していたのは、震災前後で地域の仲間や村外の人々との付き合いが増えたかどうかである。言うまでもなく、暮らしやすくなったと思っている人は、そうでない人と比べて、地域の仲間や村外の人々との付き合いが増えた割合が多い。家族・親戚や仕事仲間との付き合いの増加も、暮らしやすさの認知と関連している。また、「心を開いて話すことができる人」、「その人のおかげで被災後の生活設計が定まったと感じられるような人」、「被災から立ち直るきっかけを与えてくれた人」、「その後の人生を変える出会い」のように、重要他者との出会いの有無も、暮らしやすさの認知と関連していた。野田村が暮らしやすくなったと思っている人は、重要他者との出会いを経験している割合が多い。一方、「自分だけが頼りという気持ちが増した」という人の割合は、暮らしにくくなったと思っている人の方が高い。このように、人間関係が量的にも質的にも充実していることが、野田村が暮らしやすくなったと思うかどうかにも大きく影響していることが見て取れる。

関連の強い項目の上位には、震災前と比べて「自分の将来は明るいと感ずること」、「元気でつらつとしていること」、「日常生活を楽しく送ること」が増えたという項目がある。村が暮らしやすくなったと思っている人は、震災前と比べて自分の生活が充実していると感じていることがうかがえる。ただし興味深いことに、自分の生活の復興がどれくらい進んでいると思うか、野田村の復興がどのくらい進んでいると思うかとは、きわめて弱い関連しか見られなかった（AIC 値は、生活復興が-1.80、野田村復興が-2.79）。また、震災津波による被害程度、仮設住宅の経験、職場の復旧の程度や職業の変化は、いずれも野田村の暮らしやすさの認知とは関連が見られなかった。

表3-5 野田村の暮らしやすさ認知と関連の強い項目群 (AIC)

順位	項目	AIC 値
1	震災前後で地域の仲間との付き合いが増えた／減った	-51.03
2	震災前後で村外の人々との付き合いが増えた／減った	-42.3
3	震災前と比べて、自分の将来は明るいと感ずることが増えた／減った	-30.89
4	震災前と比べて、元気でつらつとしていることが増えた／減った	-30.39
5	震災以降、心を開いて話すことができる人との出会いがあった	-25.37
6	震災前後で家族・親戚との付き合いが増えた／減った	-24.93
7	震災以降、自分だけが頼りという気持ちが増した	-20.17
8	震災以降、行政への頼もしさが増した	-19.61
9	震災以降、その人のおかげで被災後の生活設計が定まったと感ずられるような人との出会いがあった。	-17.08
10	震災前と比べて、日常生活を楽しく送ることが増えた／減った	-16.62
11	震災をきっかけに同志的なつながりができた	-16.52
12	震災以降、ボランティアのありがたさを知った	-15.49
13	震災前と現在で、貯金額が増えた／減った	-14.24
14	震災以降、被災から立ち直るきっかけを与えてくれた人がいた	-14.18
15	震災前後で仕事の仲間との付き合いが増えた／減った	-12.18
16	震災以降、その後の人生を変える出会いがあった	-11.68
17	家族や親戚以外で、おカネの相談に乗ってくれる人はいるか	-9.94

## おわりに

本章では、震災から10年が経った今、野田村の人々が生活の復興や野田村の復興がどのくらい進んでいると感じているのか、震災前とくらべて野田村が暮らしやすい村になったと感じているのかを検討してきた。

生活復興感については、約7割の人が生活はほぼ復興したと感じている反面、生活復興が半分も進んでいないという人も1割ほどいた。今回の調査で尋ねたのはあくまでも復興「感」であり、実際の暮らし向きそのものではないが、生活に震災の爪痕がいまだに残っている人がいることには留意する必要があるだろう。また、生活復興感が低い人は、「震災以降、自分だけが頼りという気持ちが増した」という人の割合が高かった。野田村は、

伝統的に相互扶助的な地域のまとまりが強い村である。しかし震災で多くの人が家を失い、居住禁止区域もできるなど、従来の地域の紐帯が弱まる傾向にあるかもしれない。人々が心理的にも実態としても「孤立化」しないような方策が重要だろう。

野田村が、震災前とくらべて暮らしやすい村になったかどうかについては、変わらないという回答がほぼ半数で、残りの半数は、暮らしやすくなったと感じる人と暮らしにくくなったと感じる人が相半ばしていた。そして、このことと最も強く関連していたのは、地域の仲間や村外の人々との付き合いが増えたかどうかであり、その他、震災以降に重要他者との出会いがあったかどうか、行政やボランティアが頼りになったか、といった事柄が、暮らしやすさの認知と関連していた。このことは人間関係が量的にも質的にも充実していることが、村が暮らしやすくなったと感じさせる大きな要因であることを意味している。野田村では、震災直後から多くのボランティアが訪れ、野田村の人々とボランティアとの交流が広がった。村内をみても、外部者の存在も一つのきっかけとなって、それまでにはなかったような交流の輪が生まれたりもした。ただし、震災から10年経て、ボランティアをはじめとする外部者が野田村を訪れる機会はどんどん減っている。2020年度のコロナ禍はこの減少傾向にますます拍車をかけている。震災をきっかけにできた村外や地域の人々の交流の輪を維持し、さらなる交流を広げていくような工夫や仕掛けがますます求められる。

# 第4章

## 復興感と復興時期に影響を与える要因の分析

花田 真一

### 1. はじめに

本章では、被災者の復興感、および復興時期に影響を与える要因について考察する。過去2回の調査結果から、自身の生活の復興感と村の復興感に影響を与える要因が異なること、また、同じ自身の生活の復興感や村の復興感であっても時期によって影響を与える要因が異なることが示されている。震災から10年という比較的長い時間が経過した場合、影響を与える要因が変化するかを知ることで、より長期的な復興政策に対する知見を得ることが期待される。

また、過去2回の調査の結果から、10年間の経過した今回の調査では、復興感については「ほぼ復興した」という回答が多くなり、分析がむづかしくなることが予想された。そこで、今回の調査では「ほぼ復興した」と回答した調査対象者に対してはそう感じた時期についても質問している。復興が完了した時期に影響を与える要因を分析することで、より早く復興をなすために必要な施策や、復興したと感ずる時期が遅くなる要因についても知見を得ることが期待される。

分析に関しては、決定木分析を用いた。決定木分析は機械学習に基づく分類法の一つで、結果として示される指標を決定する要因を探索する手法である。よく用いられる分類法の一つであるクラスター分析と比べると、結果となる指標を特定し、それに基づいた分類が行われる点に特徴がある。また、同じ結果となった観測対象を、さらにグループ分けすることで、結果に至る複数の経路を区別できる点も特徴である。本章では、分割の基準としてジニ係数を用い、各グループの数が20以下になるか、複雑性指数が0.1を下回った段階で分割を停止した。

### 2. 復興感の状況

分析を行うためには、復興感に関する全体的な傾向と、復興を感じた時期に関する基礎的な情報が必要になる。そこで、まず自分と村、それぞれの復興感についての回答を表4-1にまとめた。

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与える要因の分析

第5章  
移動性向の  
変化について

第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る…  
自由回答より

付録  
回答者の集計表

付録  
回答者用質問紙

表 4-1 自分の復興感と村の復興感

	村				合計	
	ほぼ復興	半分以上復興	やや進んでいる	全く進んでいない		
自分	ほぼ復興	245	124	17	0	386
	半分以上復興	6	101	8	0	115
	やや進んでいる	3	11	26	0	40
	全く進んでいない	0	2	0	1	3
	合計	254	238	51	1	544

自分の生活の復興感と村の復興感、両方に回答しているのは544名であった。表4-1から、ほぼ半数の回答者が自分の生活についても村についてもほぼ復興したと感じていることが示されている。また、自身の生活の復興感と村の復興感を比べると、自身の生活の復興感のほうが「ほぼ復興した」の回答が多いことから、村の復興よりも自分の生活の復興のほうが進んでいると感じている回答者が多かったようだ。ただし、「半分以上復興した」まで含めると、その割合はほとんど変わらない。10年がたち、過去2回の調査と比較しても、復興が進んでいる状況が示されている。

表4-2 自分の生活と村が「ほぼ復興した」時期

	村復興時期										合計
	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	
2011	0	0	0	0	0	0	0	1	3	1	5
2012	0	1	0	0	1	1	4	8	3	0	18
2013	0	0	1	0	0	1	2	4	5	2	15
2014	0	0	0	1	0	0	3	5	0	1	10
2015	0	0	0	0	2	1	4	4	3	1	15
2016	0	0	0	0	0	7	3	4	6	5	25
2017	0	0	0	0	1	0	8	2	1	0	12
2018	0	0	0	0	0	0	2	19	8	3	32
2019	0	0	0	0	0	0	0	2	33	0	35
2020	0	0	0	0	0	0	0	0	1	9	10
合計	0	1	1	1	4	10	26	49	63	22	177

次に、「ほぼ復興した」という回答について、ほぼ復興した時期についてまとめたものが表4-2である。自分の生活の復興感と村の復興感がどちらも「ほぼ復興した」と答えており、かつ、ほぼ復興した時期についても回答しているのは177名であった。

まず、自分の生活の復興についてみると、25%の回答者が2014年以前、50%の回答者が2017年以前に、ほぼ復興したと感じている。一方で、25%の回答者がほぼ復興したのは2019年以降であると回答している。自分の生活の復興についてはやはり回答者によってばらつきがあること、震災後3年という比較的早い時期にほぼ復興したと感じている回答者が25%以上いることが示されている。

一方、村の復興時期については自分の生活の復興と比べるとほぼ復興したと感じた時期が遅い傾向が見て取れる。2017年以前に村がほぼ復興したと感じているのは全体の25%以下である。また、半分以上の回答者が2018年と2019年に集中しており、回答者によるばらつきも少ない。個人の生活に比べると、村の復興感についてはあまり差がないこと、個人の生活に比べると村の復興には時間がかかる傾向が見て取れる。

また、自分の生活の復興時期と村の復興時期を比べると、自分の生活の復興時期のほうが早いという回答が90名（51%）であり、自分の生活の復興時期と村の復興時期が同じという回答は81名（46%）であった。このことは、自分の生活の復興がある程度達成されてはじめて、村全体についても復興が達成されたと感じることを示唆している。

表4-3 住宅の被害状況と自分の生活が復興した時期

	自分復興年										合計
	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	
被害なし	11	22	14	10	19	15	11	31	38	14	185
被害状況											
一部損壊	0	0	2	1	1	2	2	0	0	2	10
半壊	0	1	0	0	0	0	1	2	0	2	6
大規模半壊	3	5	3	3	2	8	1	3	2	0	30
全壊	1	2	4	1	9	15	7	10	4	3	56
合計	15	30	23	15	31	40	22	46	44	21	287
	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	
被害なし	6%	12%	8%	5%	10%	8%	6%	17%	21%	8%	
全壊	2%	4%	7%	2%	16%	27%	13%	18%	7%	5%	

最後に、住宅の被害状況と自分の生活が復興した時期の関係について概観した。結果が表4-3に示されている。自分の生活がほぼ復興した年と、住宅の被害状況を両方回答しているのは287名であった。今回の調査では、住宅の被害状況については被害なしと全壊以外の回答はあまり多くない。そこで、被害なしと全壊について、割合で比較した。この2つの被害状況を見ると、25%の回答者が「ほぼ復興した」と感じた時期は、被害なしが2013年に対して全壊が2015年と、やはり被害がないほうが早い。しかし、半分以上が復興したと回答した年は被害なしが2017年、全壊が2016年とほぼ差がなく、2018年の段階では全壊の場合は88%がほぼ復興したと感じているが、被害なしの場合は71%である。住宅に被害がない場合はほぼ復興するまでにかかる時間が比較的ばらついており、非常に速い被災者がいる一方で復興が遅れてしまう被災者もいる。それに対して全壊の場合はほぼ復興するまでに一定の時間がかかるものの、極端に復興が遅れる回答も少ないように思われる。

### 3. 復興感に影響を与える要因

ここまでの結果を踏まえて、自身の生活の復興感について、決定木分析を行う。自分の復興

感の回答について、「ほぼ復興した」と「半分以上復興した」という回答を『復興』、「やや進んでいる」と「まったく進んでいない」という回答を『未復興』として、その結果を決める要因を探索した<sup>1</sup>。影響を与える要因の候補としては、家族・親戚、地域の仲間、仕事の仲間、村外の人々、それぞれについての震災の前後での付き合いの変化、震災前の世帯人数、現在の世帯人数、(現在の世帯人数－震災前の世帯人数)で測った世帯人数の変化、家族・親戚の手伝いや相談に乗ることがあるか、家族・親戚以外の野田村の知り合いの手伝いや相談に乗ることがあるか、性別、年齢、長子かどうか、最終学歴、婚姻の状況、子供の人数、世帯収入、収入・支出・貯金額それぞれについて震災前と現在の変化、を用いた。過去2回の結果と比較するために、共通する項目に絞って決定木分析を行っている。なお、これらのすべての項目に回答したもののみをサンプルとして利用したため、サンプルサイズは326となっている。

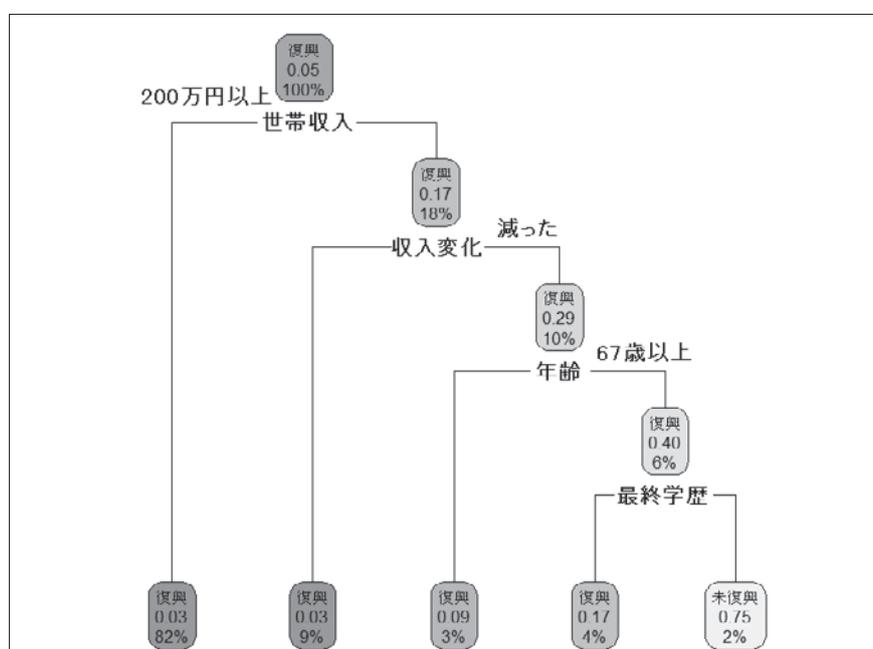


図4-1 自分の生活の復興感に関する決定木

(各箱の上段はカテゴリーの主要な要素を、中段は未復興の割合を、下段は全サンプルに占めるそのカテゴリーの割合を示している)

図4-1には自分の生活の復興感に関する決定木が描かれている。基本的に世帯収入が200万円以上であれば、復興に分類されており、世帯収入が200万円未満であっても、震災前と比べて収入が減っていなければやはり復興に分類されている。また、収入が減っていたとしても、年齢が67歳未満であれば復興に分類されている。未復興に分類されるのは、世帯収入が低くかつ、震災前に比べると収入が減った、67歳以上の回答者であった。

過去2回の調査結果と比べると、地域の仲間との付き合いや家族の状況といった人的ネット

<sup>1</sup> 今回の調査では、全回答者の80%以上、分析に用いたサンプルについては95%が「ほぼ復興した」「半分以上復興した」と答えている。そのため、この分類ではサンプルのバランスが良くない。サンプルのバランスを考えるならば、「ほぼ復興した」とそれ以外で分けたほうが良い。しかし、今回は回答の選択肢の意味を重視し、復興がある程度進んでいるという回答と、まだ復興が不十分であるという回答に分けた。

ワークの影響が小さくなっており、世帯収入といった経済的な要素の影響がかなり大きくなっている。ただし、このことは直ちに長期的には人的ネットワークの影響が小さくなることを示しているわけではない。震災後10年が経過したこともあり、前述のようにほぼすべての回答者が復興に分類されている。その点を踏まえれば、どちらかという経済的な要素が震災前よりも良くない場合に、復興していないと考えると解釈すべきであろう。

## 4. 復興時期に影響を与える要因

このように、復興感を結果の指標とした場合、回答のばらつきが少ないこともあり、分析がむつかしい<sup>2</sup>。そこで、ほぼ復興した時期について、決定木を描くことを試みた。影響を与える要素については前述のものを利用した。また、復興した時期については以下の2つの区分を用いた。

1つ目は、2014年以前を前期、2014年から2017年を中期、2018年以降を後期として3分割する区分である。ほぼ3年間隔で時間的には均等であり、また、自分の生活の復興感については回答者の人数も比較的均等である。ただし、サンプルサイズの制約から、3分割では各カテゴリーの回答者数が少なくなる可能性がある。そこで、2つ目として2015年以前を前半、2016年以降を後半として2分割した区分でも決定木を作成した。すべての項目に回答したのもののみを用いたため、サンプルサイズは124である。

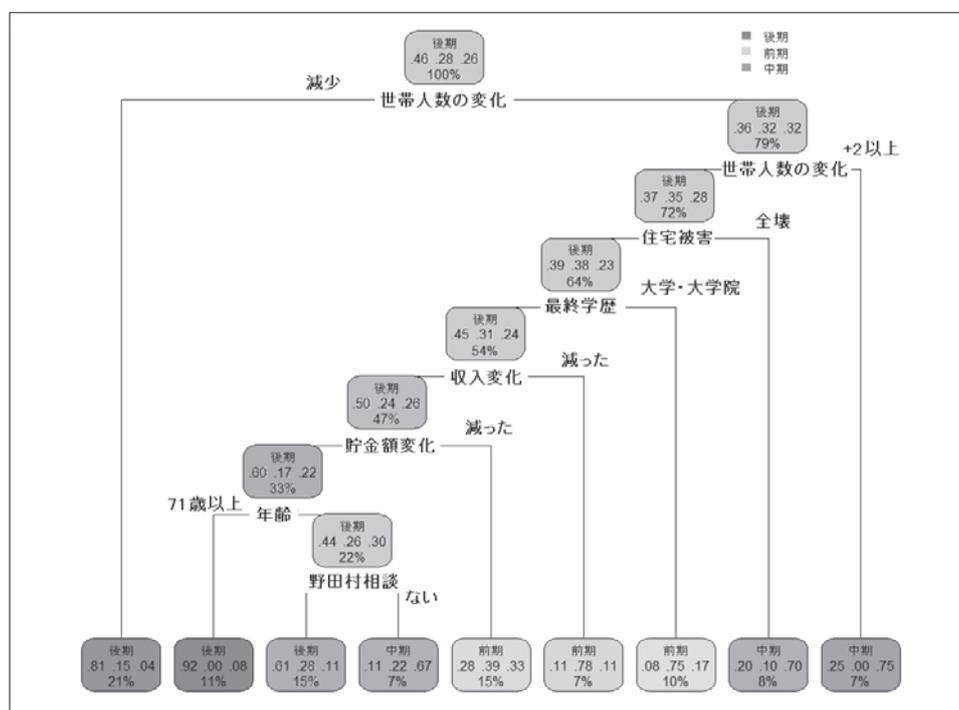


図4-2 自分の生活の復興時期（3分割）

<sup>2</sup> 概要は省略しているが村の復興感についても自分の生活の復興感と同様、決定木分析を試みた。ただし、自分の生活の復興感と同様バリエーションがかなり乏しいこともあり、適切な決定木を書くことができなかった。

図4-2は、自分の生活の復興時期について3分割した結果である。字が小さく見づらいが、灰色が前期、緑色が中期、赤色が後期に対応している。まず、世帯人数が減った場合は復興時期が後期（81%）になっている。一方、世帯人数が2人以上増えた場合は中期（75%）となった。世帯人数が同じか1人だけ増えた場合、住宅の被害状況が全壊以外であれば、最終学歴が大学・大学院であれば前期（75%）、専門学校以下であっても収入が増えた場合は前期（78%）であった。収入が同じか減っており、貯蓄が減った71歳以上については後期（92%）となっている。

この結果は、次のことを示唆している。まず、震災によって世帯人数が減った場合、ほぼ復興したとしてもその時期が遅れることになる。一方で学歴が高い層や、所得が増えた層はほぼ復興に至る時期が早い傾向にある。また、貯蓄が減った高齢者はほぼ復興の時期が遅い。年齢の境目となった71歳以上については、震災時には61歳以上であった。定年前後に被災した場合、貯蓄を切り崩して生活を支えた場合、ほぼ復興に至る時期が遅くなることを示唆しているように思われる。

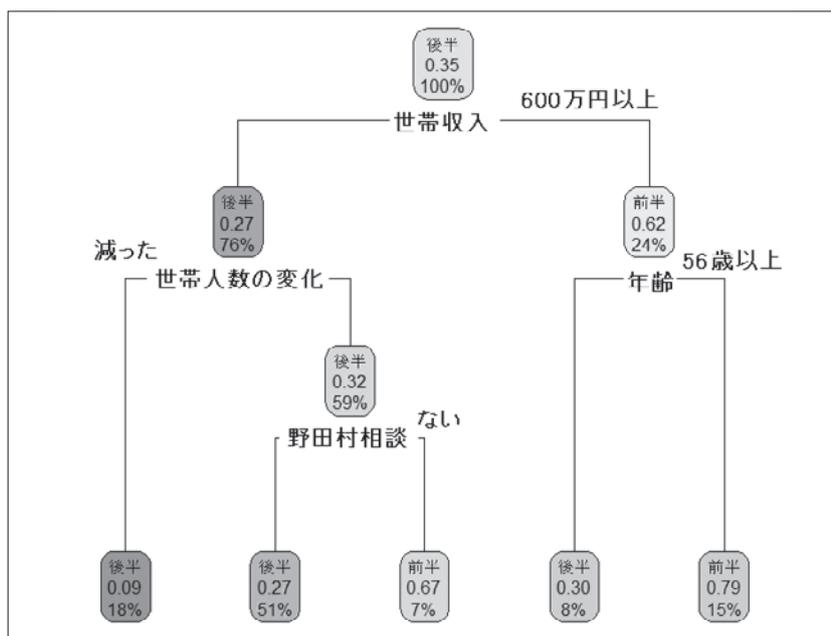


図4-3 自分の生活の復興時期（2区分）

図4-3には、時期を2区分した結果が示されている。2区分の場合、世帯年収が600万円以上で年齢が56歳以上の場合は前半（79%）であった。一方、世帯年収が600万円未満で世帯人数が減った場合はほぼ復興した時期は後半（91%）になっている。

以上2つの結果から、次のことが示唆される。まず、世帯人数が減っている場合、ほぼ復興した時期が遅れる傾向にある。一方で、世帯年収が高い場合や学歴が高い場合はほぼ復興した時期が早くなる傾向にある。なお、今回の結果は、「ほぼ復興した」場合の時期であり、復興感が高いか低いかを表すわけではない。しかし、震災により世帯人数が減った場合はやはり何らかの援助が必要であり、復興感に関する結果とも合わせれば、経済面が再建されることは復

興感を高めるうえでも、その時期を早めるうえでも、重要であることを示唆している。

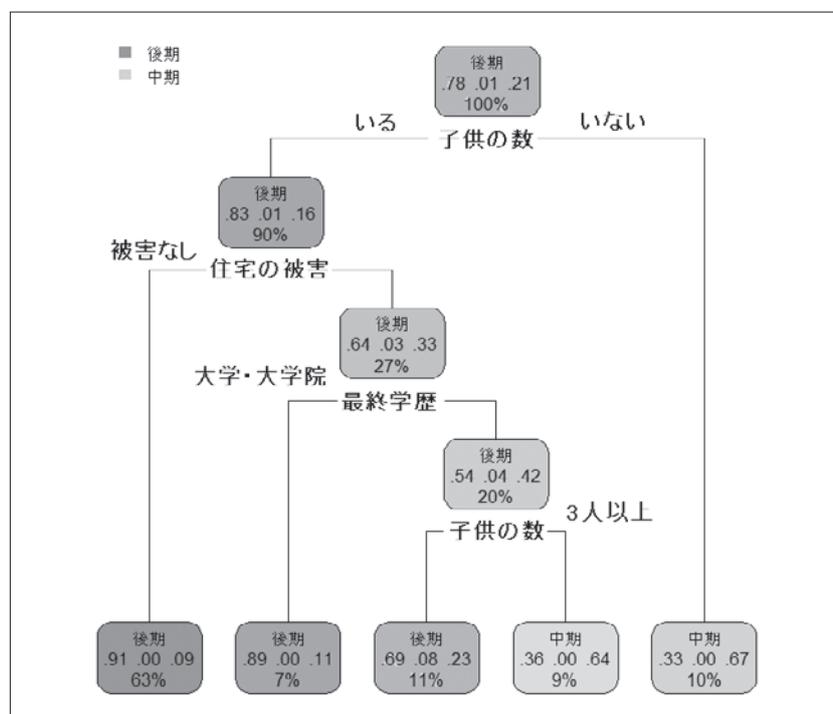


図4-4 村の復興時期 (3区分)

最後に、村の復興時期について3区分した結果が図4-4に示されている。前期については数が少なかったため、グループは基本的に中期と後期に分けられている。村がほぼ復興したと感じる時期が後期になるのは子供がいて住宅に被害がない場合（後期が91%）と、子供がいて住宅に被害があった大学・大学院卒の場合（後期が89%）であった。

子供がいる場合、村の復興時期は遅く感じている。また、住宅の被害がないと、やはり村の復興時期は遅く感じる傾向にある。この点については、子供がいると子供を通じて他の村民とかわること、そのうえで住宅に被害がない場合、自分の被害が軽微な分だけ村の復興を遅く感じている可能性がある。なお、過去2回の調査の結果でも、被災後最初の住宅が自宅である場合や、地域の人的ネットワークのタイプによっては、村の復興感が低いことが示唆されていた。こうした結果とある程度整合した傾向を示しているとも考えられる。なお、村の復興時期の2区分の場合については適切な決定木を書けなかった。

## 5. まとめ

以上の結果から、次のことが示唆される。まず、長期的な復興感には、経済的な要素の影響が大きい。過去の調査結果から、短期的には人的ネットワークが復興感に強い影響を与えているが、中期的には個人的・経済的要因の影響が強くなることが示されていた。今回の結果は、時間の経過とともにさらにその傾向が進み、長期的には経済面の復興が必要であることを示し

ていると考えられる。また、村の復興に対しては社会的ステータスの影響が強いことが示唆されていなが、長期的には子供の数や住宅の被害状況が影響することが示された。住宅の被害状況については過去3回いずれの調査についても影響する項目となっており、子供の数についても2013年の調査では影響する項目となっていた。こうした点を踏まえると、短期的には人的ネットワークが復興感に対してある程度補完する効果があるが、長期的には経済的な再建が重要であるといえる。また、経済的な再建が速いほど、復興したと感じるタイミング自体も早くなるため、生活再建の重要性が改めて示されていると思われる。

# 第5章

## 移動性向の変化について

李 永 俊

長期の復興において、人口の流出は復興を妨げる大きな障壁となる。東日本大震災の直前の2011年2月の野田村の人口は4,835名だった。約10年が経過した2021年1月の人口は4,170名で、その間に13.8%の人口が減少していることがわかる<sup>1</sup>。このような人口減少は震災前から続いている傾向で、震災によってどの程度、加速したのかを断定するのは難しい。ただ、人口減少問題がこれからのまちづくりにおいて最大の課題である。本章では、人口減少の最大の要因の1つである人口流出に注目し、移動性向を通して今後の人口動向、そして流出を食い止めるためのヒントを探りたい。ここでは、同じく野田村に在住の村民を対象に行った2013年の調査結果<sup>2</sup>と比較しながら、どのような変化が起きているのかを通して政策のヒントを探る。

### 1. 移動性向の実態

#### 1-1 移動性向の変化とその理由

ここでは、移動性向の全体像を概観する。移動性向は、「これからもずっと、「野田村」に住み続けたいと思いますか」の質問に、「野田村に住み続けたい」「村外に引っ越したい」「一度は、村外で住んでみたいが、そのうち帰ってきたい」の3つの選択肢を設けた。表5-1は、2013年の回答と2020年の回答を比較したものである。「野田村に住み続けたい」と答えた人の割合に注目すると、2013年の調査では81.0%であったのに対し、2020年では87.1%で定住希望者が多くなっている。表をよく見ると、一時的な移住希望者の割合が減って、定住希望者が増えていることがわかる。両調査の年齢、性別構成もほぼ一緒であることを考慮すると、この間の復興事業およびまちづくりが一定の成果をあげているものと評価できる。ただ、「村外に引っ越したい」と答えた人の割合はほとんど変わらず、一定数の流出希望者は常に存在していることがわかる。

<sup>1</sup> 「広報のだ」の公表値。

<sup>2</sup> 分析結果の詳細については、李ほか（2013）を参照されたい。

表5-1 移住性向の動向

	2020年		2013年
	実数（人）	構成比（%）	構成比（%）
野田村に住み続けたい	460	87.1	81.0
村外に引っ越したい	59	11.2	12.0
一度は、村外で住んでみたいが、そのうちに帰ってきたい	9	1.7	7.0
合 計	528	100.0	100.0

次に、定住希望者の住み続けたい理由について見てみよう。表5-2はその理由を整理したものである。2013年と比較すると、最も大きな差があるのは、「村内に仕事があるから」である。2013年には3.4%だったのに対し、2020年には22.0%である。この違いは一時的な移住希望者を大幅に減らした要因にもなっている。村の雇用対策や地域活性化政策が一定の成果をあげていると思われる。また、両調査において最も多かったのは「知り合いに囲まれて暮らしたい」とした人で、村の良さが定住の理由となっていることがよくわかる。そして、「震災があったから」は2013年が2.0%、2020年が1.8%で、震災をきっかけに定住を希望する人はほとんどいないことがわかる。

表5-2 野田村に住み続けたい理由

	2020年		2013年
	実数（人）	構成比（%）	構成比（%）
村内に仕事があるから	96	22.0	3.4
野田村は、生活が便利	73	16.7	8.6
知り合いに囲まれて暮らしたい	137	31.6	35.0
家族が希望している	84	19.2	27.4
震災があったから	8	1.8	2.0
その他	39	8.9	23.5
合 計	437	100.0	100.0

表5-3は村外に移住したい理由を尋ねたものである。2013年調査で最も多かったのは、「野田村には仕事がない」の回答だったが、2020年には27.3%で大幅に改善している。他方、「野田村は、生活が不便」と回答した人が40.9%と大幅に増加している。不便だと回答した人の属性を見ると、性別では女性が多く、年齢層では20～44歳層と45～64歳層の割合が高かった。女性や子育て世代、そして中等・高等教育が必要な子どもを持つ世代が、不自由を強く感じている。これらの属性の住民に配慮したまちづくりが必要であることを示唆している。

表5-3 村外に移住したい理由

	2020年		2013年
	実数 (人)	構成比 (%)	構成比 (%)
野田村には仕事がない	18	27.3	35.1
野田村は、生活が不便	27	40.9	18.3
野田村では付き合いが大変	9	13.6	9.4
家族が希望している	4	6.1	7.9
震災があったから	3	4.6	7.9
その他	5	7.6	21.5
合 計	66	100.0	100.0

表5-4 性別に見た移動性向

(単位：%)

	2020年		2013年	
	男性	女性	男性	女性
野田村に住み続けたい	91.0	83.5	84.7	77.8
村外に引っ越したい	7.8	14.3	8.0	15.5
一度は、村外で住んでみたいが、 そのうちに帰ってきたい	1.2	2.2	7.4	6.7
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0

## 1-2 個人属性別および家族状況から見た移動性向

ここでは、性別や年齢、学歴などの個人の属性と個人の家族状況別に移動性向を見てみたい。表5-4は性別に移動性向を整理したものである。男性では、「野田村に住み続けたい」人の割合が91.0%と、9割以上が定住を希望しているのに対し、女性ではその割合が83.5%で、7.5ポイントも低くなっている。他方、「村外に引っ越したい」人の割合は女性が14.3%、男性が7.8%で女性が6.5ポイント高くなっている。このような傾向は、2013年調査とほぼ同じで、2013年より全体として定住希望者が多くなっているものの、男女間の差を縮めるまでには至っていないことがわかる。増田（2014）などが指摘しているように、若年女性に住み続けてもらうことは人口の維持、地域の存続に関わる重要な課題である。若年女性の声にもっと耳を傾ける努力が求められている。

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与える要因の分析

第5章  
移動性向の  
変化について

第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る…  
自由回答より

付録  
回答者の集計表

付録  
回答者用質問紙

表5-5 年齢階級別に見た移動性向

(単位：%)

	2020年					2013年				
	20代	30代	40代	50代	60代	20代	30代	40代	50代	60代
野田村に住み続けたい	52.8	86.7	81.5	85.8	92.9	43.8	76.7	81.3	89.0	93.4
村外に引っ越したい	36.1	13.5	18.5	12.4	5.4	32.3	12.5	15.9	8.5	4.9
一度は、村外で住んでみたいが、そのうちに帰ってきたい	11.1	0.0	0.0	1.8	1.8	24.0	10.8	2.8	2.6	1.7
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表5-5は、年齢階級別の移動性向である。定住希望者を見ると、2020年の20代では52.8%で半数に過ぎない。逆に「村外に引っ越したい」が36.1%、「一度は、村外に住んでみたいが、そのうちに帰ってきたい」が11.1%で4割以上が移住を希望していることがわかる。2013年の調査結果と比較すると移動希望者の割合が少なくなっているものの、依然として若者の移動性向は高い。若者を地域に留まらせるには課題が多いことがわかる。ただ、流出を止めることは難しいとしても、できればUターンで返って来れるような地域づくりが求められる。

表5-6 学歴別に見た移動性向

(単位：%)

	2020年			2013年		
	高卒以下	短大・専門卒	大学以上	高卒以下	短大・専門卒	大学以上
野田村に住み続けたい	91.6	80.6	72.4	83.1	78.4	69.2
村外に引っ越したい	7.4	17.5	22.4	11.8	11.6	15.4
一度は、村外で住んでみたいが、そのうちに帰ってきたい	1.1	1.9	5.2	5.2	10.0	15.4
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表5-6は、学歴別に移動性向を整理したものである。表から学歴が高いほど、定住を希望する人の割合が少なく、移住を希望する人の割合が高いことがわかる。また、2013年の調査結果と比較すると、大学・大学院卒の人は定住希望者の割合が、2013年に69.2%であったのに対し、72.4%で3.2ポイント高くなっている。その他、全ての学歴においても定住希望者の割合が多くなっており、定住志向が強まっていることがわかる。ただ、高学歴者の移住希望については、「村外に引っ越したい」の割合が2013年の15.4%から22.4%で7.0ポイント高くなっており、高学歴の移住希望者の割合が高くなっている。

表5-7 配偶者有無別に見た移動性向

(単位：%)

	2020年		2013年	
	配偶者有り	配偶者無し	配偶者有り	配偶者無し
野田村に住み続けたい	88.0	84.3	87.8	61.1
村外に引っ越したい	10.3	14.1	9.5	19.4
一度は、村外で住んでみたいが、 そのうちに帰ってきたい	1.7	1.7	2.7	19.4
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0

次に家族環境別に移動性向を見てみよう。一人暮らしの場合は、移動に伴うコストが家族が多くいる人より低くなる。住まいを借りるにも、一人の場合は経済的な負担は少なくなる。また、子どもがいると保育園や学校など経済的なコストだけでなく、心理的な費用も発生する。そのため、経済学では移動コストが少ない配偶者が無い人や同居家族数が少ない人が、移動性向が高いと考えられている。

表5-7は、配偶者の有無別に移動性向を見たものである。表から、配偶者有りの定住希望者が88.0%で、配偶者無しの84.3%を上回っていることがわかる。また、「村外に引っ越したい」の割合は配偶者無しが14.1%で、配偶者有りの10.3%より3.8ポイント高くなっているように見える。しかし、カイ二乗検定では統計的な有意性は認められず、配偶者有無では移住性向に差がないと思われる。この結果は、2013年の調査結果と大きく異なっている。2013年の調査では、1%水準で統計的な差が見られ、配偶者有無が移住性向に大きく左右していた。その背景については、今後十分な検証が必要であるが、高齢化の影響や震災からの時間の経過が配偶者有無の差を少なくしているのではないかと推測される。

表5-8 子ども有無別に見た移動性向

(単位：%)

	2020年		2013年	
	子ども有り	子ども無し	子ども有り	子ども無し
野田村に住み続けたい	88.5	76.0	83.6	59.3
村外に引っ越したい	9.7	24.0	12.3	20.8
一度は、村外で住んでみたいが、 そのうちに帰ってきたい	1.8	0.0	4.1	19.9
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0

表5-8は子どもの有無別に移動性向を見たものである。子どもがいる場合は前述したように移動の際には大きな経済的・非経済的負担がかかる。そのため、子どもが有りの場合は移動性向が弱まる。表5-8の結果を見ると、子ども有りの人で88.5%が定住を希望しているのに対し、子ども無しの場合は76.0%で、大きな差があることがわかる。また、5%水準で統計的な差も認められる。この傾向は2013年にも同じであった。ただ、留意しな

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与える要因の分析

第5章  
移動性向につ  
いて

第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る…  
自由回答より

付録  
回答者の集計表

付録  
回答者用質問紙

ればならないのは、移動コストが高く、移動が困難な世帯であっても、子育てや教育環境などへの不満が高まると、家族一家で移動する場合もありうるので、十分な政策的配慮が必要であると言える。

表5-9 同居家族数別に見た移動性向

(単位：%)

	2020年					2013年				
	1人	2人	3人	4人	5人以上	1人	2人	3人	4人	5人以上
野田村に住み続けたい	86.8	89.2	84.2	79.8	92.9	79.7	82.1	80.2	81.3	80.7
村外に引っ越したい	13.2	8.8	14.9	18.1	5.1	15.6	13.3	13.5	11.5	9.8
一度は、村外で住んでみたいが、そのうちに帰ってきたい	0.0	2.1	1.0	2.1	2.0	4.7	4.6	6.3	7.2	9.5
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表5-9は、同居家族数別に移動性向を見たものである。表から同居家族数が多くなると定住希望者の割合が高くなることがわかる。5人以上で暮らす家族では、92.9%が定住を希望している。この数値は、2013年の80.7%を大きく上回っており、繰り返し述べているように震災から10年で定住希望者が大幅に増加していることがわかる。

### 1-3 経済環境別に見た移動性向

ここでは、個人を取り巻く経済環境別に移動性向をまとめてみたい。収入や雇用が安定している場合は、移動する動機が弱くなる。他方、収入や雇用が不安定な場合は移動に伴うコストが少ないので、移動する可能性が高くなる。表5-10は雇用形態別に移動性向を整理したものである。表から雇用形態が安定している正規雇用者の定住希望者が91.2%であるのに対し、非正規雇用者では83.3%で、正規雇用者より7.9ポイント低くなっている。これは、2013年も同じであった。また、2013年の調査結果と比較すると、正規雇用者と非正規雇用者共に定住希望者が多くなっていることがわかる。自営業者においては、ほぼ変わらない。

表5-10 雇用形態別に見た移動性向

(単位：%)

	2020年			2013年		
	正規雇用者	非正規雇用者	自営業者	正規雇用者	非正規雇用者	自営業者
野田村に住み続けたい	91.2	83.3	89.1	83.3	76.9	91.6
村外に引っ越したい	8.2	13.7	9.2	13.7	14.1	6.3
一度は、村外で住んでみたいが、そのうちに帰ってきたい	0.6	2.9	1.7	3.0	9.0	2.1
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表5-11 世帯年収水準別に見た移動性向

(単位：%)

	2020年			2013年		
	200万円未満	200~600万円	600万円以上	200万円未満	200~600万円	600万円以上
野田村に住み続けたい	88.5	88.6	86.4	82.7	83.0	84.6
村外に引っ越したい	11.5	10.2	10.2	12.0	11.2	9.6
一度は、村外で住んでみたいが、そのうちに帰ってきたい	0.0	1.2	3.4	5.3	5.8	5.9
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表5-11は世帯年収水準別に見た移動性向である。興味深いのは、2013年、2020年共に世帯年収水準の差による移動性向の違いはほとんど見られないということである。収入より雇用状況が移動性向に大きく影響していることが表5-10と5-11からうかがえる。

### 1-4 復興状況と移動性向

ここでは、震災前と現在の経済的な面や人との付き合い面の変化が、移動性向に与える影響を見てみたい。表5-12では、経済面での変化から移動性向の差を見たものである。収入、支出、貯金の変化に伴う移動性向の違いは、統計的に有意ではなかった。その理由として考えられるのは、収入が減った人の多くは高齢層で、高齢層では移動性向が低かったため、収入の変化が移動性向を高める効果を相殺しているからであると思われる。

表5-12 収入・支出・貯蓄の変化と移動性向

(単位：%)

	収入			支出			貯金		
	減った	変わらない	増えた	減った	変わらない	増えた	減った	変わらない	増えた
野田村に住み続けたい	87.1	89.4	81.1	84.4	89.6	85.0	86.8	89.5	77.3
村外に引っ越したい	12.0	9.0	14.9	15.6	9.4	12.4	11.5	9.0	20.5
一度は、村外で住んでみたいが、そのうちに帰ってきたい	0.9	1.6	4.1	0.0	1.0	2.7	1.7	1.5	2.3
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表5-13 人との付き合いの変化と移動性向

(単位：%)

	家族・親せき			地域の仲間			仕事の仲間			村外の人々		
	減った	変わらない	増えた	減った	変わらない	増えた	減った	変わらない	増えた	減った	変わらない	増えた
野田村に住み続けたい	85.3	87.1	91.3	90.3	85.1	90.4	88.5	86.2	83.3	91.6	86.1	83.1
村外に引っ越したい	14.7	10.7	8.7	9.7	12.9	5.8	11.5	11.7	13.0	8.4	12.1	11.9
一度は、村外で住んでみたいが、そのうちに帰ってきたい	0.0	2.2	0.0	0.0	2.1	3.9	0.0	2.2	3.7	0.0	1.7	5.1
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与えた要因の分析

第5章  
移動性向の  
変化について

第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る…  
自由回答より

付録  
回答者の集計表

付録  
回答者用質問紙

次に表5-13は人との付き合いの変化と移動性向の違いをまとめたものである。統計的に有意な差が見られたのは、家族・親せきとの付き合いの変化であった。家族・親せきとの付き合いが「増えた」と答えた人は91.3%が定住を希望しているのに対し、「減った」とした人で85.3%で、6.0ポイント低くなっている。表5-8で見たように、同居家族の数は移動性向を低下させる大きな力となっている。この結果と整合的であることがわかる。

表5-14 復興感と移動性向

(単位：%)

	自分の復興			村の復興		
	ほぼ復興した	半分以上	やや進んでいる	ほぼ復興した	半分以上	やや進んでいる
野田村に住み続けたい	89.0	83.5	79.0	89.7	86.0	77.1
村外に引っ越したい	9.3	13.4	21.1	9.1	11.3	22.9
一度は、村外で住んでみたいが、そのうちに帰ってきたい	1.7	3.1	0.0	1.3	2.7	0.0
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表5-14は、自分の復興と村の復興がどれくらい進んでいるという認識別に移動性向を見たものである。復興感が高いというのは、野田村での生活の満足度（効用）が高いことを示しており、定住志向が高まることが期待できる。表から、個人の復興について「ほぼ復興した」とした人の定住希望者割合が89.0%であるのに対し、「やや進んでいる」とした人ではその割合が79.0%で、10ポイント低くなっている。また、村の復興についても11.9ポイントの差がある。また、カイ二乗検定においても5%水準で有意となり、個人生活の再建や村の復興の遅れが、人口流出、そして人口減少に直結していることがわかる。

## 2. 移動性向の決定要因分析

ここでは、統計分析手法を用いて、移動性向の決定要因を明らかにしたい。2013年にも同様の分析を行い、年齢が若いほど、女性であるほど、世帯年収の水準が低いほど、そして震災以降に家族・親せきとの付き合いが減った人ほど、野田村から移住したいと考えている人の割合が高くなることがわかった。なかでも、家族・親せきとの付き合いが最も影響力が高い要因であることが明らかになった。ここでは、2013年と同じ分析手法を用いて行った分析結果を紹介したい。

分析は順序プロビットで行った。分析方法の詳細は報告書の性格上割愛するが、分析に用いた変数について述べる。被説明変数は、「野田村に住み続けたい」を1、「一度は、村外に引っ越したいが、いつかは帰ってきたい」を2、「村外に移住したい」を3とした。つまり、数字が高くなれば移動性向が高まることを意味する。説明変数には、個人属性として女性ダミー、年齢階級ダミー、有配偶者ダミー、子ども有ダミー、世帯人数、学歴ダ

ミーを用いた。そして震災・復興関連変数として、被害有無ダミー、家族・親せき増減ダミー、収入増減ダミー、自分の復興感を用いた。分析結果は表5-15の通りである。表のモデル1は個人属性、経済環境変数と被害有無ダミー変数を、モデル2ではモデル1に経済的、人との付き合いの変化、個人の復興感を追加して推計した結果である。

分析の結果はひとめでわかるように、移動性向を有意に高める要因を青で、定着性向を有意に高める要因を赤で囲んでいる。結果を見ると、女性であることや、青年層であること、高学歴である人ほど、移動性向が有意に高くなっていることがわかる。他方、定住志向を高める要因としては、家族・親せきとの付き合いが増えた人、そして自分の復興感が高い人ほど、定住志向が高くなっていることが明らかになった。言い換えると、震災で家族や親せきとの付き合いが減った人や個人の復興が遅れている人に、移動性向が高まっていると言える。また、女性、若者、家族・親せきの増減変数は2013年の結果と一致しており、このような属性の人々へのより一層の配慮が今後の村づくりに求められる。

表5-15 順序プロビット分析結果

	モデル1		モデル2	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差
女性ダミー	0.2908	0.1741 *	0.3443	0.1928 *
20～44歳ダミー	0.6715	0.2671 **	0.9399	0.2994 ***
45～64歳ダミー	0.4185	0.2075 **	0.6141	0.2413 **
有配偶者ダミー	0.1399	0.2340	0.1643	0.2604
子ども有ダミー	-0.2729	0.2628	-0.2574	0.2850
世帯人数	-0.1057	0.0754	-0.1137	0.0849
短大・専門学校卒ダミー	0.4640	0.1911 **	0.4479	0.2050 **
大学・大学院卒ダミー	0.7925	0.2492 ***	0.9684	0.2814 ***
正規雇用者ダミー	-0.3148	0.1988	-0.2212	0.2143
非正規雇用者ダミー	-0.0259	0.2127	-0.0165	0.2414
世帯年収200～599万円ダミー	-0.2177	0.1879	-0.2193	0.2152
世帯年収600万円以上ダミー	-0.2643	0.2607	-0.1550	0.2938
被害有りダミー	-0.0007	0.1744	-0.0288	0.1936
家族・親せき増減			-0.4295	0.1961 **
収入の増減			-0.1581	0.1417
自分の復興感			-0.2311	0.1346 *
/cut1	1.1679	0.3211	0.6516	0.6147
/cut2	1.2640	0.3219	0.7658	0.6150
観測値	455		390	
LR chi (16)	41.39		50.26	
Pseudo R2	0.1020		0.1385	

注) \*は10%水準で、\*\*は5%水準で、\*\*\*は10%水準で有意であることを示す。

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与える要因の分析

第5章  
移動性向の  
変化について

第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る…  
自由回答より

付録  
回答者の集計表

付録  
回答者用質問紙

### 3. 小括

本章では、震災から3年目の2013年の調査結果と比較しながら、移動性向の変化について概観した。まず、大きな変化として、野田村に住み続けたいとした割合が、2013年調査結果より6.1%増えており、定住志向が強まっていることが明らかになった。また、注目されたのは、住み続けたい理由として、「村内に仕事があるから」が2013年では3.4%に留まっていたのに対し、今回は22.0%で大幅に改善している。復興過程において、雇用の創出が順調に進んでいることがうかがえる。他方、女性や青年層の移住希望者において、「生活が不便だから」を理由として挙げた割合が4割に上っており、青年層や女性、子育て世代に配慮したまちづくりがこれから課題であると指摘した。また、震災で家族や親せきの付き合いが減った人や個人の復興が遅れている人に、移動性向が高まっていることを明らかにし、このような属性の人々へのより一層の配慮が今後の村づくりに求められることも主張した。

#### 【参考文献】

- 李永俊ほか（2013）「野田村のみなさまの暮らしとお仕事に関するアンケート調査報告書」弘前大学人文学部（現人文社会科学部）
- 増田寛也編著（2014）『地方消滅－東京一極集中が招く人口急減』中央公論新社

# 第6章

## 新たなコミュニティづくりと世代差

牧田大輝・永田素彦

東日本大震災津波では多くの家屋が流失するなど甚大な被害を受けた。震災以前に住んでいた地域が居住禁止区域に設定されたため、元の場所からの移転を余儀なくされた住民も多い。それにともなって、新たなコミュニティづくりが課題となった。筆者らは、新町（城内地区高台団地）を何度か訪れ、そこの人たちと会話をしたが、新たなコミュニティづくりのことはしばしば話題となった。特に、地域コミュニティに対する意識の世代差を懸念する声が、年配の方々からはよく聞かれた。実際、新町では自治会の役員を務めている人はほとんどが60歳以上の男性だった。

本章では、新たなコミュニティづくりにおける世代差の問題を検討していく。第1節では、自治会など地域活動への参加状況の世代差を明らかにする。第2節以降は、震災後の生活や人間関係（の変化）にかかわる世代差を明らかにする。具体的には、第2節ではAICを用いた分析の概略を示し、第3節では震災後の人間関係の特徴の世代差、第4節では震災前後の日常生活の質の変化の世代差を明らかにする

なお、本章では、世代差を分析するにあたって、39歳以下を「若年層」、40～59歳以上を「中年層」、60歳以上を「高年層」とする。回答者の年齢層ごとの割合は、図6-1の通りであり、若年層が12.4%、中年層が26.9%、高年層が60.7%である。生年月日を尋ねる質問に無回答だった回答者は、分析から除外した。結果として分析対象となったのは、557名である。

### 1. 地域活動への参加の世代差

まず、地域活動への参加の度合いについて、世代差がどの程度あるのかを確認しよう。今回の調査では、震災後10年ほど

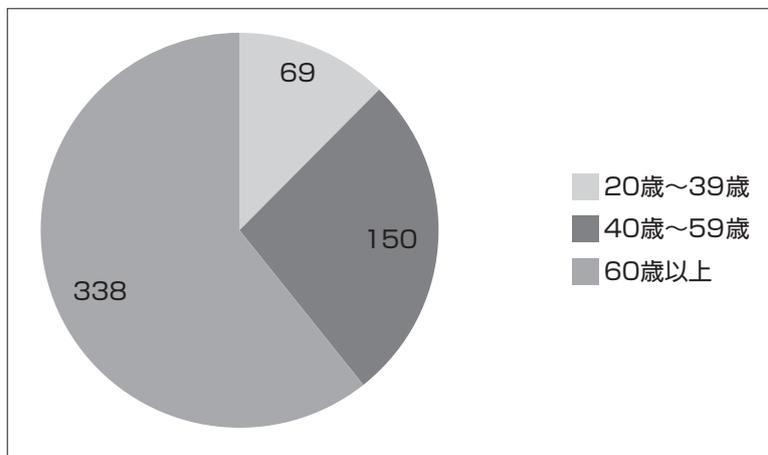


図6-1 アンケート回答者の年齢層別割合

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与えた要因の分析

第5章  
移動性向の  
変化について

第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る…  
自由回答より

付録  
回答者の集計表

付録  
回答者用質問紙

の間で地域のイベントや活動にどの程度参加しているかを尋ねた。図6-2は、「町内会や自治会の仕事をしていますか」という質問への世代別回答パターンを示している。町内会や仕事は年齢層が高いほどよく参加しており、若年層の参加率は「よく参加」と「たまに参加」をあわせても3割強にとどまる。さらに、若年層の過半数が「参加しておらず、興味もない」と回答しており、町内会や自治会の仕事への温度差が明らかといえる。

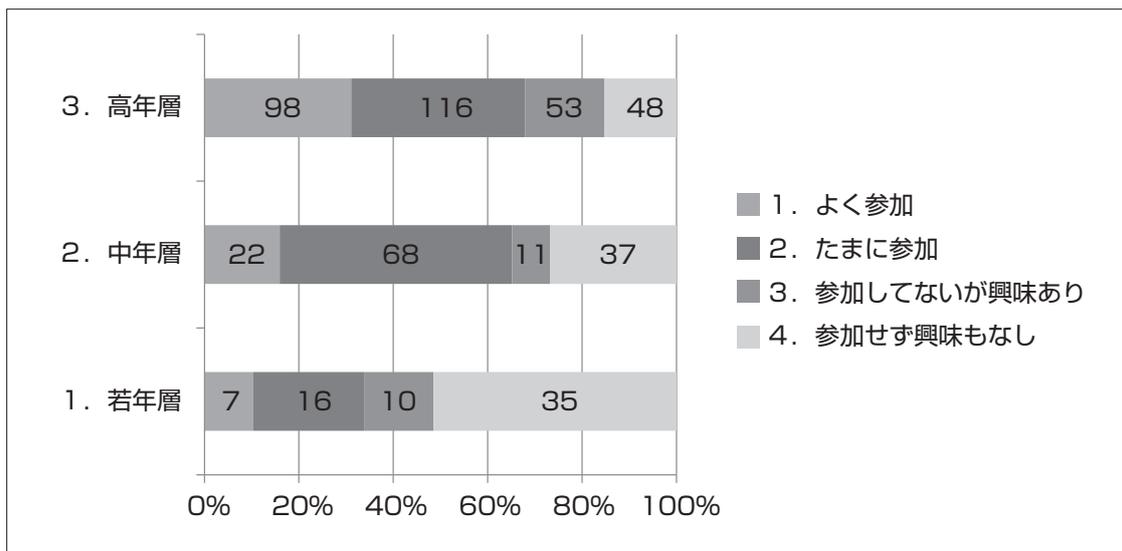


図6-2 町内会や自治会の仕事をしているかの世代差

次に、町内会や自治会よりも少しひろげて、地域の行事やイベントへの参加の度合いの世代差を見てみよう。図6-3は、「地域の行事やイベントにどの程度当日参加していますか」という質問への世代別回答パターンを示している。中年層で「よく参加」の割合がやや少ないが、大きな世代差はないことがわかる。若年層も約半数が参加しており、「参加はしていないが興味はある」を含めれば約8割が地域の行事やイベントへの参加に関心をもっている。

ところが地域の行事やイベントをお世話する立場となると、世代差が顕著にあらわれる。図6-4は「地域のイベントにお世話をする立場で参加したことがありますか」という質問への世代別回答パターンである。年齢層が高いほどお世話をする立場で参加した経験があり、若年層では興味もない割合が多い。図6-2と同じ傾向をいくぶんマイルドにしたようなパターンとなっていることが見て取れる。

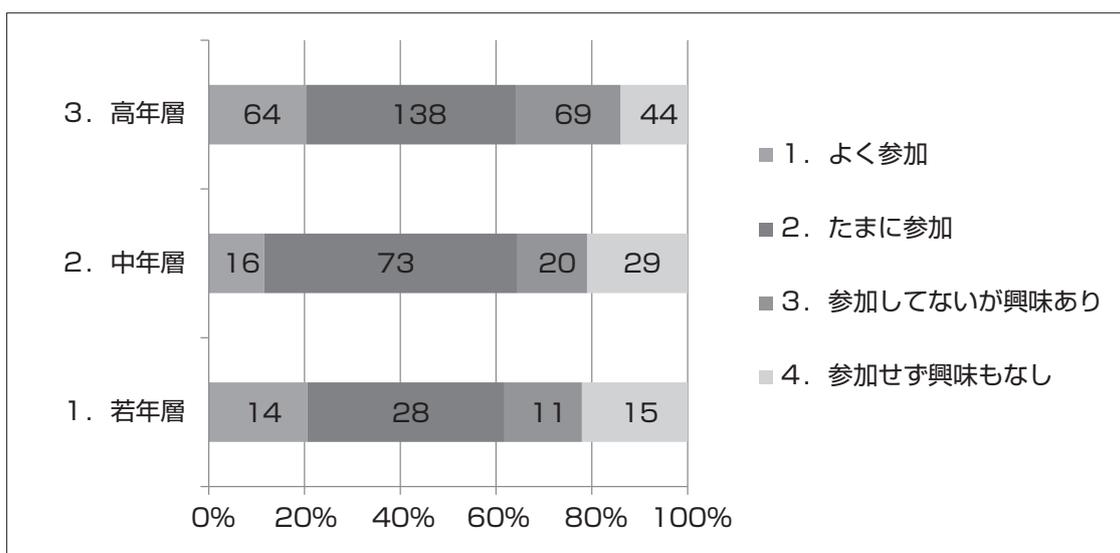


図6-3 地域の行事やイベントへの当日参加の世代差

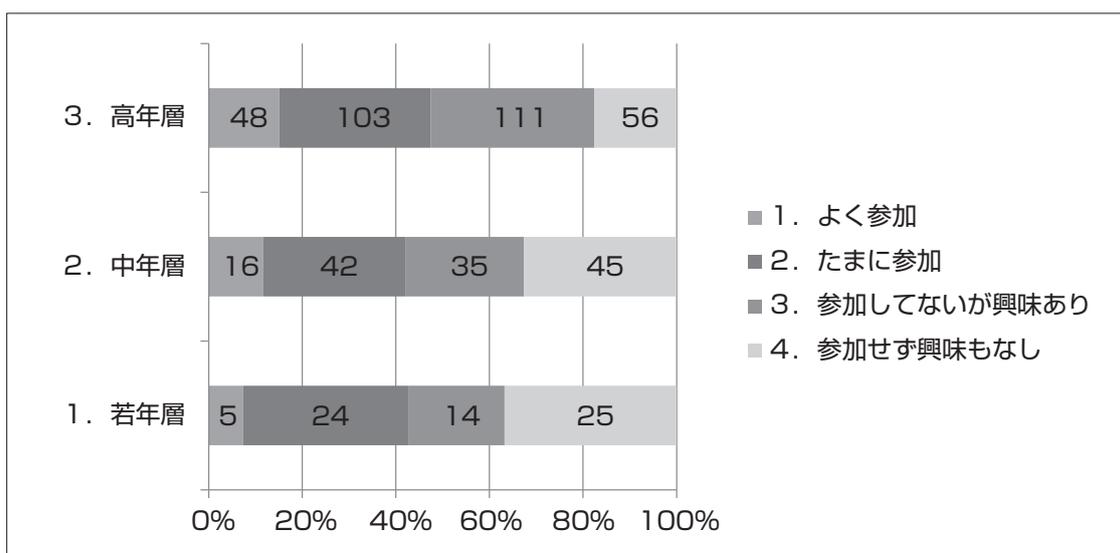


図6-4 地域のイベントにお世話をする立場で参加したことがあるかの世代差

以上の結果をまとめると、若年層は地域の行事やイベントに全く関心がないわけではなく、行事やイベントにはそれなりに参加しているし関心も高い。しかし、行事やイベントの世話役、さらには町内会や自治会の仕事となると、参加の度合いは低く、そもそも興味さえ持っていない人が多い。年齢層が高いほど、地域の行事や自治会の仕事に積極的に参加していることがわかる。

## 2. 震災後の暮らしや人間関係の世代差

では、震災後の生活や人間関係の特徴やその変化には、どのような世代差があるのだら

うか。特に、若年層はそれより上の年齢層と比べてどのような特徴をもっているだろうか。このことを明らかにするために、以下ではAIC（赤池情報量基準）によるクロス表の分析結果を報告していく。分析プログラムは、統計数理研究所が開発したCATDAP（Categorical Data Analysis Program）を使用した。

目的変数は世代である（若年層、中年層、高年層の3群）。説明変数には、学歴や家族形態などのデモグラフィック項目、最近の災害についての項目、枝分かれ質問を除外し、ほぼすべての質問項目を用いることにした。その際、各質問の回答選択肢について、例えば、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「ややあてはまらない」「まったくあてはまらない」の5択を、「あてはまる」「どちらでもない」「あてはまらない」の3択に統合するなど、適宜、回答選択肢の統合を行った。

表6-1は、AICによるクロス表の分析結果のうち世代差との関連が強い項目（AIC値が-5よりも小さいもの）を列挙している。各説明変数のAIC値は、負で小さいほど（絶対値が大きいほど）目的変数との関連が強い。AIC値が正の場合、関連があるとはいえない。要するに、AIC値が負で小さい項目ほど、世代差が大きい項目ということになる。

表6-1をみると、まず世代差が大きいのが仕事や収入にかかわる項目である。若年層は震災をきっかけに職についたり転職したりした割合が多く、中高年層は震災前と同じ仕事をしている人が多い。このことを反映してか、収入や貯金も若年層の方が増えたという人の割合が多い。AIC値でみると、続いて世代差が大きいのは定住希望であり、若年層の方が村外に出たいと考えている割合が多い。このような世代差は、地域活動、特に自治会の役員やイベントの世話役といった地域活動の中心を担うような役割への若年層の関心の低さと関連しているかもしれない。

次に世代差が大きいのは、町内会や自治会の仕事をしているかどうかであり、ほかにも地域活動への参加に関する項目が表れている（順位5, 19, 24, 25）。さらに、震災をきっかけとした人間関係の変化に関する項目（順位6, 7, 13, 14, 15, 17, 18, 26, 29）、震災前後の日常生活の質の変化に関する項目（順位8, 9, 20, 28, 31, 32）が全体として世代差が大きい。地域活動の世代差については第1節で確認しているので、以下節を改めて、人間関係の変化および日常生活の質の変化の世代差の特徴をみていこう。

なお、そのほかに世代差のある項目としては、防災にかかわる項目がある。具体的には、地震保険への加入（順位16）や避難訓練への参加（順位30）は高年層の方が割合が高く、防災情報の収集は中年層が高く高年層が低い。ただ全体として防災関連に一貫した世代差を見出すことはできなかった。また、高年層の方が野田村は復興したと感じているようだ（順位22）。

表6-1 世代差と関連の強い項目（AIC分析）

順位	説明変数	AIC値	順位	説明変数	AIC値
1	職業変化	-65.96	17	相談仕事	-11.87
2	増減収入	-65.89	18	相談冠婚	-10.24
3	増減貯金	-54.83	19	活動参加⑤	-10.2
4	定住希望	-34.82	20	生活比較⑦	-9.83
5	活動参加④	-34.4	21	住居被害	-9.38
6	増減村外	-34.13	22	村復興感	-9.1
7	増減仕事	-32.47	23	防災準備①	-8.65
8	生活比較①	-28.09	24	活動参加①	-8.46
9	生活比較⑧	-25.6	25	活動参加②	-7.59
10	増減支出	-25.03	26	つながり⑦	-6.68
11	世帯年収	-24.66	27	生活復興	-6.66
12	生活比較⑥	-18.89	28	生活比較③	-6.01
13	増減家族	-16.13	29	つながり⑧	-5.88
14	つながり④	-14.69	30	避難訓練	-5.55
15	増減地域	-13.46	31	生活比較⑤	-5.52
16	防災準備⑤	-12.69	32	生活比較④	-5.42

### 3. 震災後の人間関係の変化の世代差

震災後の人間関係の変化に関する項目には世代差と関連するものが多かった。特に関連が強かった項目は、「震災の前後で、野田村での、家族・親せき、地域の仲間、仕事の仲間、村外の人々との付き合いは増えましたか、減りましたか」という項目であり、村外の人々（順位6）、仕事の仲間（順位7）、家族・親せき（順位13）、地域の仲間（順位15）のいずれも世代差が大きかった。

図6-5～6-8に各項目の世代別回答パターンを示す。全体に、若年層では付き合いが増えたと回答した割合が高く、年齢層が上がるほど付き合いが減った割合が高くなることがわかる。この傾向が村外の人々や地域の仲間との付き合いについて特に顕著であることを考慮すると、若年層の方が村外の人々を含めた新たなつながりの機会をもつことに積極的であることがうかがえる。

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与える要因の分析

第5章  
移動性向の  
変化について

第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る  
自由回答より

付録  
回答者の集計表

付録  
回答者用質問紙

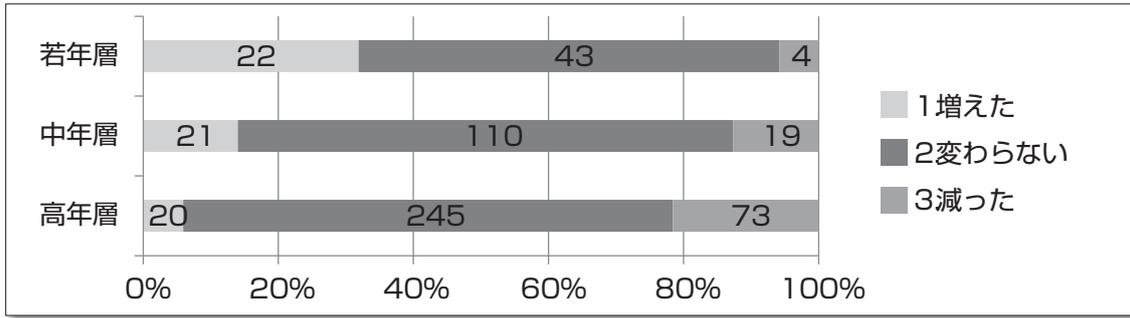


図6-5 村外の人々との付き合いの増減の世代差

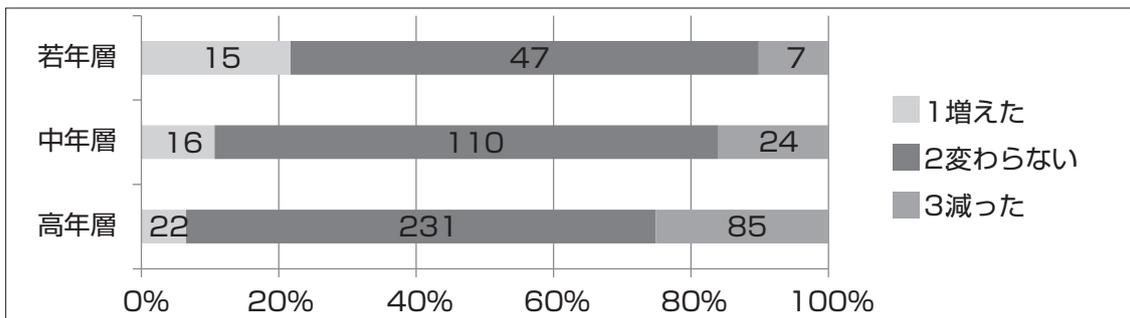


図6-6 地域の仲間との付き合いの増減の世代差

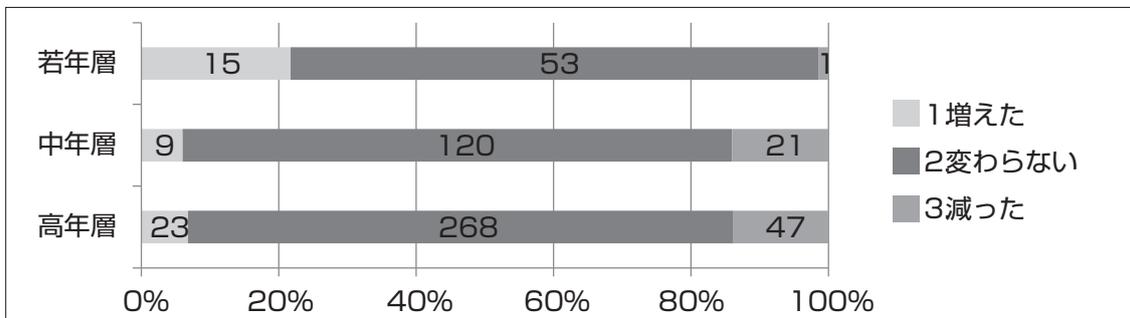


図6-7 家族・親せきとの付き合いの増減の世代差

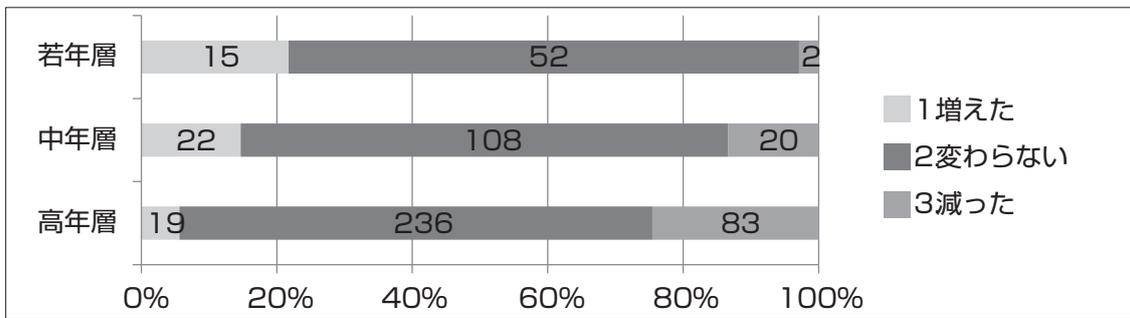


図6-8 仕事の仲間との付き合いの増減の世代差

また、「つながり」という項目は、「震災以降、人と人のつながりに、つぎのような変化や出来事がありましたか」という質問に「あてはまる」か「あてはまらない」かで答える項目である。「つながり④」（順位14）は「その後の人生を変える出会いがあった」という項目への回答であり、若年層の方が「あてはまる」割合が高い（世代別にみると、若年層36%、中年層19%、高年層16%）。「つながり⑦」（順位26）は「自分だけが他檜という気持ちが増した」という項目であり、高年層ほどあてはまる割合が高い（若年層8%、中年層21%、高年層29%）。相談仕事（順位17）と相談冠婚（順位18）はそれぞれ「以下のようなことについて、家族や親せき以外の、野田村の知り合いで実際に手伝ってくれたり、相談に乗ってくれたりする人はいますか」という項目への回答である。仕事の相談については若年層の方が「いる」割合が多く（若年層55%、中年層49%、高年層39%）、冠婚葬祭の手伝いについては高年層の方が「いる」割合が高い（若年層34%、中年層60%、高年層61%）。

#### 4. 震災前後の日常生活の質の変化の世代差

震災前後の日常生活の質の変化も全体として世代差が比較的大きかった。具体的には、「あなたは、現在（令和2年8月）の生活を、震災前の生活と比べてどのように感じておられますか」という質問である。具体的には、世代差との関連が強い順に、生活比較①「忙しく活動的な生活を送ること」（順位8）、生活比較⑧「仕事の量」（順位9）、生活比較⑥「元気ではつらつとしていること」（順位12）、生活比較⑦「家で過ごす時間」（順位20）、生活比較③「まわりの人びととうまくつきあっていくこと」（順位28）、生活比較⑤「自分の将来は明るいと感じること」（順位31）、生活比較④「日常生活を楽しく送ること」（順位32）である。なお、残る一つの生活比較の項目②「自分のしていることに生きがいを感じることも」、表6-1のリストには含まれなかったものの、世代差と弱い関連があった。

図6-9～6-15に各項目の世代別回答パターンを示す。ここでは、CATDAPで隣接カテゴリーの不等間隔プーリングを指定して、目的変数との関連が最も高くなるように回答選択肢の統合を行っている（表6-2）。

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与える要因の分析

第5章  
移動性向の  
変化について

第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る…  
自由回答より

付録  
回答者の集計表

付録  
回答者用質問紙

表6-2 生活比較の項目の回答選択肢の統合

生活比較①	1. 減った（「かなり減った」、「少し減った」を統合）、 2. 変わらない・増えた（「変わらない」、「少し増えた」、「かなり増えた」を統合）
生活比較②	1. 減った（「かなり減った」、「少し減った」を統合）、 2. 変わらない、 3. 増えた（「少し増えた」、「かなり増えた」を統合）
生活比較③	1. 減った（「かなり減った」、「少し減った」を統合）、 2. 変わらない、 3. 増えた（「少し増えた」、「かなり増えた」を統合）
生活比較④	1. 減った・変わらない（「かなり減った」、「少し減った」、「変わらない」を統合）、 2. 増えた（「少し増えた」、「かなり増えた」を統合）
生活比較⑤	1. 減った（「かなり減った」、「少し減った」を統合）、 2. 変わらない・増えた（「変わらない」、「少し増えた」、「かなり増えた」を統合）
生活比較⑥	1. 減った（「かなり減った」、「少し減った」を統合）、 2. 変わらない・増えた（「変わらない」、「少し増えた」、「かなり増えた」を統合）
生活比較⑦	1. 減った（「かなり減った」、「少し減った」を統合）、 2. 変わらない、 3. 増えた（「少し増えた」、「かなり増えた」を統合）
生活比較⑧	1. 減った（「かなり減った」、「少し減った」を統合）、 2. 変わらない・増えた（「変わらない」、「少し増えた」、「かなり増えた」を統合）

それぞれの項目について世代別の特徴をみていこう。生活比較①「忙しく活動的な生活を送ること」については、年齢層が高いほど「減った」割合が高い。生活比較⑧「仕事の量」は高年層の「減った」割合が特に高い。生活比較⑥「元気ではつらつとしていること」、生活比較⑤「日常生活を楽しく送ること」も、それぞれ高年層ほど「減った」割合が高い。生活比較⑦「家で過ごす時間」は、若年層で減り、高齢層では増えている。生活比較③「まわりの人びととうまくつきあっていくこと」は、若年層で「増えた」割合が高く、高年層では減っている。生活比較④「日常生活を楽しく送ること」は、若年層で特に「増えた」割合が高い。総じて、若年層は、それ以外の年代層と比べて、まわりの人とうまくやることが増え、家で過ごす時間が減り、活動的ではつらつと日常生活を楽しんでいる傾向がうかがえる。

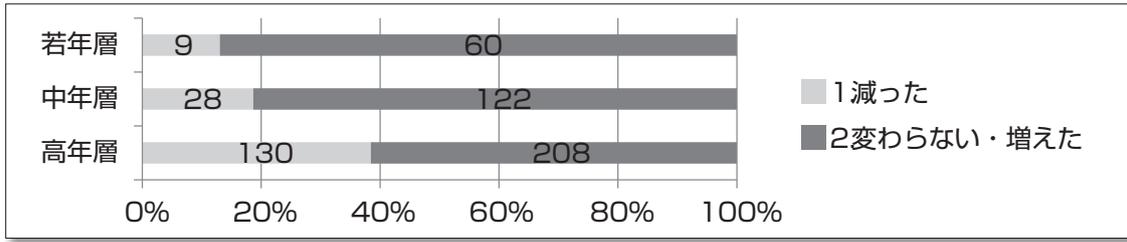


図6-9 生活比較①の世代差

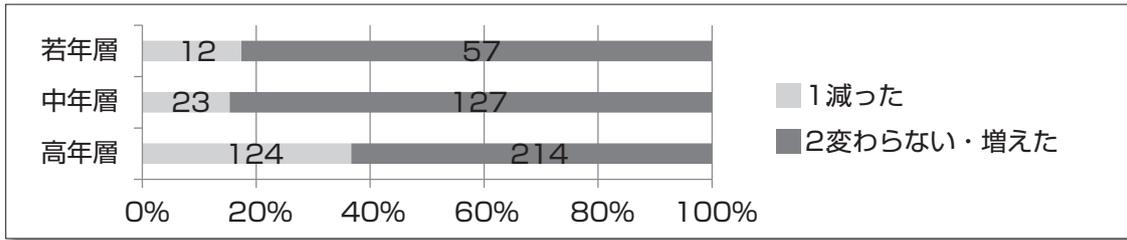


図6-10 生活比較⑧の世代差

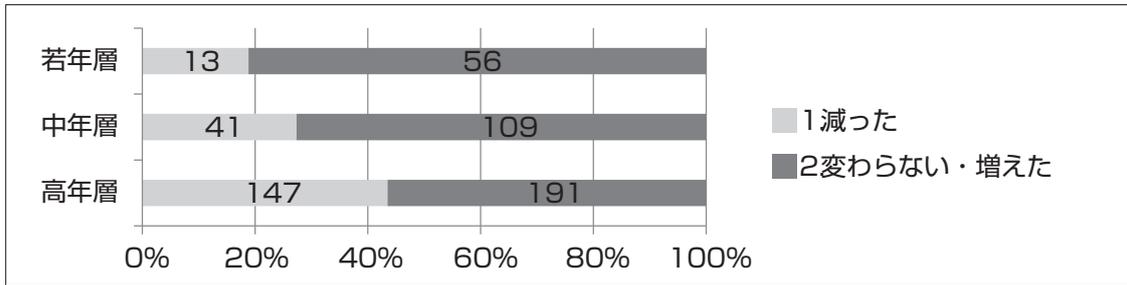


図6-11 生活比較⑥の世代差

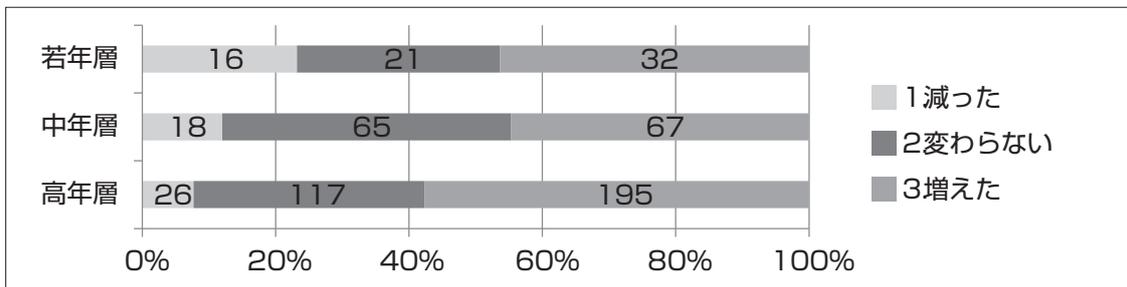


図6-12 生活比較⑦の世代差

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与える要因の分析

第5章  
移動性向の  
変化について

第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る...  
自由回答より

付録  
回答者の集計表

付録  
回答者用質問紙

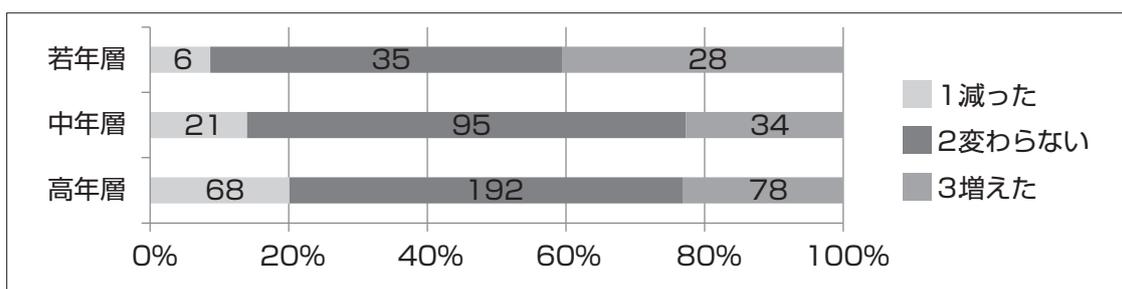


図6-13 生活比較③の世代差

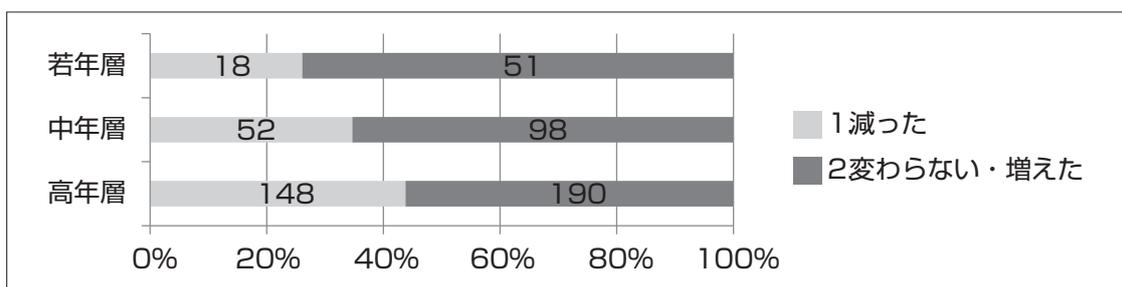


図6-14 生活比較⑤の世代差

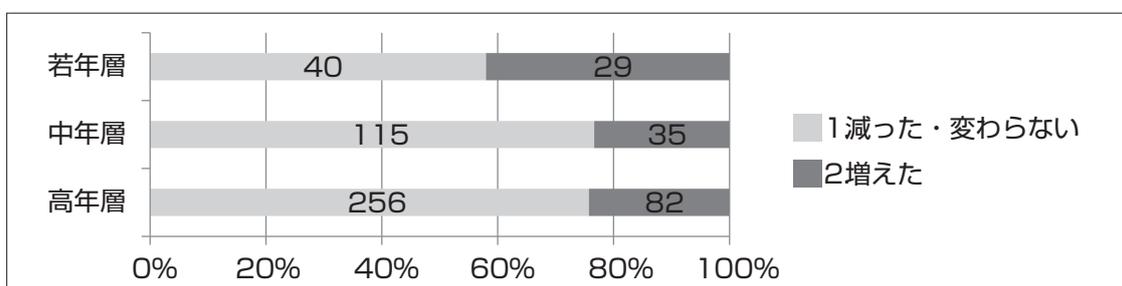


図6-15 生活比較④の世代差

## おわりに

以上の結果から、若年層は、現在の生活様式において、地域の活動に参加する頻度は低いものの、震災以前よりも人間関係は広がり、日常生活の質も充実していると感じていることがうかがえる。また、若年層は、地域の行事などに興味がないわけではなく、また、仕事が忙しいことが参加できない理由であることも示唆された。さらに世代間交流をはかり新たなコミュニティづくりを促していくためには、村外の人々との交流など新たなつながりの創出や維持なども重要となることと思われる。

# 第7章

## 野田村の声を探る：自由回答より

山口 恵子

### 1. はじめに

「野田村のみなさまの暮らしとお仕事に関するアンケート調査」では、質問紙の最後に、「まもなく東日本大震災から10年目となります。この10年を漢字一文字で表せば何になりますか。ご自由にお書きください。」(問48)、「現在、野田村での生活で困っていることや、野田村の将来の生活について、お考えになっていることをご自由にお書きください。」(問49)という自由回答の設問が設けられた。この設問に対しては、全回答者609名のうち、問48に388名、問49に156名の回答が寄せられている。本章ではこれらの自由回答について整理を行う。震災から約10年が経過した今、どのような声が寄せられているのだろうか。

なお、問49の自由回答は、前回調査でも同様の質問がなされており、前回調査での回答率は28.4% (1138名中323名) で、今回の回答率は25.6%であった。今回の調査は回答率自体はやや減少するにとどまっているが、全体の回答数は156名と限定的であり、かつ、各人の自由記述の文字数自体も大幅に減る傾向があった。そこからの記述をピックアップすることには一定の限界があるが、困っていることや要望などが減少したと考えるのは早計であり、現状の声を探っていこう。

以下、まず問48である漢字一文字で表すこの10年間について、その回答の傾向を示し、次に問49の生活で困っていることや将来の生活についての自由回答を整理する。最後にまとめる。

### 2. 漢字一文字で表すこの10年間

この10年を漢字一文字で表すという、やや難しい問いであったと思われるが、多くの方の回答を得た。回答数が5人以上であった漢字について多い順に並べると、表7-1のとおりとなる。回答数が3人という少数意見の漢字も補足的に示している。変化や変わるというイメージの「変」が33人と圧倒的に多く、次に前向きなイメージの「進」が22人と多かった。他方で、それに続くのは「耐」21人、「苦」16人、「忍」15人と、ややネガティブなイメージの漢字であり、この10年間の複雑な状況が想像される。

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与えた要因の分析

第5章  
移動性向の  
変化について

第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る…  
自由回答より

付録  
回答者の集計表

付録  
回答者用質問紙

参考までに、この多かった5つの漢字について年齢的な特徴があるかどうか確認したところ、「変」と回答した人の平均年齢は53歳であり、以下同様に、「進」44歳、「耐」63歳、「苦」53歳、「忍」66歳であった。やはり「進」という先のあるイメージは、より若い人が選択する傾向があるということだろうか。また、「変」「進」は震災によるなんらかの住まいの被害を受けていない人が多く答える傾向があり、それに比べると「耐」「苦」「忍」は何らかの被害をうけている人が多く含まれる傾向もみられた。

表7-1 回答の多かった漢字一文字

漢字	回答数
変	33
進	22
耐	21
苦	16
忍	15
絆	13
生	12
災	11
希	11
早	10
忙	10
復	8
無	8
心	7
歩	6
和	6
前	5
激	5

回答数3の漢字					
愛	縁	金	繫	健	幸
支	謝	新	想	動	望
命	流	力	疲		

ただし、この10年という長い月日をたった漢字一文字に縮めるなかで込められた思いは、もちろん正確には分からない。次の問49の自由回答の内容で想像ができるものもあったが、結びつけにくいものもあった。そこで、以下の自由回答の記述と同時に、この漢字一文字もそれぞれの回答の最後に示した。漢字一文字が付いていないものは無回答であったものである。そして、自由回答の内容と関連が想像されるものについては、適宜言及していく。

### 3. 野田村での生活で困っていることや将来の生活について

では次に、野田村での生活で困っていることや野田村の将来の生活について考えることに関する自由回答を具体的にみていこう。全体は、雇用やインフラ面への不満や希望、少子高齢化や人口減少への不安や希望、教育や子育て支援への希望、つながりのメリットとデメリット、生活の苦しさ、震災やコロナ感染症への思い、村政やボランティアへの要望、の7つに分けて整理する。

なお、回答はより典型的だと思えるものを抜き出しており、抜粋した回答の数にはあまり意味がない。また、一人の回答を丸ごとすべてとりあげているわけではなく、内容に応じて一部を抜粋したり、中略を行ったりしている。回答はほぼ原文のまま掲載しており、誤字の修正や漢字の統一などは行っていない。

#### 3-1 雇用やインフラ面への不満や希望

前回の調査と同様に、雇用やインフラ面への不満や希望は多く述べられていた。まずは、雇用面である。

「海あり、山あり、自然が豊かだし、食べ物も安いし、住みやすい所だと思いますが、不便である。特に、盛岡まで遠い。仕事はあるかもしれないが、給料が安い。」（「隠」）

「雇用を作る事、国家公務員法での賃金と都道府県の最低賃金の格差、雇用を作ったとしても生活できないと意味を持たない。」（「無」）

「若者の勤務先がない。大卒後の勤務先がないのは子供達が帰ってこれない。」（「歩」）

「仕事がない。子育てしながら働ける環境がない。野田村を出たいと思っている。」（「進」）

雇用が乏しい、仕事はあっても給料が安い、生活できない、大卒後の勤務先がない、子育てしながら働けるような雇用環境の整った職場がない、などの意見からは、一時の人手不足や復興事業の推進などによって仕事がないわけではないが、条件面での環境整備の課題があることがうかがえる。

また、店舗や医療・福祉機関の少なさ、その不便さにも多くの人が言及していた。震災以前から生じていたことであるが、その動向はさらに加速しており、高齢化が進むなかで懸念となっている。

「村内の食料品の店・食事の店が少なくなった。村内で用がたりずどうしても隣の久慈市に行って買い物をする率がふえている。」（「難」）

「これからの野田村というよりも自分の死に方を考えます。安い年金でも入れる老人施設を作ってもらいたい。子供達に迷惑をかけたくない。」（「齢」）

「公営住宅料の支援、健康保険の免除。」（「耐」）

インフラとしての道路については、野田・久慈間は2020年度末、野田・普代間は2021年内に開通が予定されている三陸沿岸道路に、期待と不安の両方が寄せられていた。

「三陸道が開通する事で通勤可能範囲が広がり、野田村もベッドタウン的な位置づけになり、人口増加が見込めるのではないかと期待しています。」（「歩」）

「三陸道完成で益す利便性には当然ながらリスクも孕む。動線が変わる事で消費・労働等の活動は更に村外へと流出&加速してゆくだらう。」（「衛」）

「三陸道路よりも、45号線を早くなおしてほしい。」

### 3-2 少子高齢化や人口減少への不安や希望

全体のなかで回答が最も多かったのは、少子高齢化や人口減少への危惧や希望であった。老々介護の増加、農業・水産業の将来への不安、地域活動の制約など、多々の影響があるなかで、人口増や世代間交流への希求が示されていた。

「高齢化、福祉の届いていない老々介護が増えている。」（「力」）

「若者の減少、老人世帯、子供の減少などで将来がとても不安です。」（「懸」）

「高齢化が進み、農業、水産業がどのようになっていくのか… 老人と若者の交流等お互いもってないものを共有していける生活環境が出来てくれれば良い様な気がします。」（「前」）

「住民の高齢化で地域での活動に制約があること。」（「耐」）

「昔は今より人口も多く、大型店も少なかったので、村内の商工業もそれなりに活気がありました。数(人口)の力が弱くなった分働く場所や、商店の品揃えも不足して村外への買物など村にとっては負の連鎖をくいとめるのが大変だと思います。人口を増やして行くことが一番大切なことだと考えています。」（「早」）

そして、自身の高齢期への不安も数多く言及されている。

「高齢でもあり、いずれは、車の運転ができなくなると買物、銀行、病院にもいけなくなり、生活が不安定になる。」（「変」）

「現在は自動車を運転できるから久慈市の病院等には自分で行けるが、高齢者になれば三鉄等を利用するとして駅迄歩くことやタクシー利用等少し心配である。家族を巻き込むのはどうしたものか考えたりする。家族もそれぞれ仕事があるので。」（「貧」）

「店舗が減り、人口も減り、新しい道路が開通するに伴い、増々村の活気が薄れていくような気がします。世代間の格差、若い人々が久慈・八戸等、車でどこまでも行って、自分たちの楽しみ、買物が出来るけど、年をとってくるとそれもできない。高齢者が楽しみを持って、日常生活に不便をきたす事なく、生活できる村であって欲しいと思います。」（「耐」）

「車がないので歩きなので駅が遠いです。村営バスが走っているけどバス停がないし思う

ようにいかないもんだ。」(「前」)

「自分の周りには子供がなく、年寄りが多く、話し相手がいなくて将来がとても不安です。」(「災」)

車の運転ができなくなることで不便になったり、楽しみが減ることへの不安、そもそも車を持っていないがバス停も遠い、そして高齢になるに従って、歩くのがますます大変になるであろうことが予想される。加えて、先の「子供達に迷惑をかけたくない」「家族を巻き込むのはどうしたものか考えたりする」というように、家族の援助が受けられる高齢者であっても、気づかいはあるものである。さらに、話し相手がいなくなることに強い不安が述べられていた。

### 3-3 教育や子育て支援への希望

以上のような少子高齢化への懸念が強い一方で、若い人々を中心に、教育や子育て支援への要望もいくつかみられた。

「小さな子供が遊べる屋内の施設（無料開放）、スポーツジム系の施設があった方がいい。」(「忙」)

「高校以降の子育て支援が足りないので、一番就学で支援が必要な為、何か策が欲しい。」(「輪」)

「教育にもう少し“力”を入れて欲しい。物質的な支援（経済的）だけではなく、人間力が育つような教育システムを取り入れて欲しい。」(「時」)

「心の相談のネットとかメールで相談出来たらありがたい。小さい子供がいたりでなかなか行けないが相談したい事がたくさんあって悩んでいる。」(「苦」)

最後の「苦」を漢字一文字として選んだ女性のように、子育て中で出たくても出れない、相談ができない、という悩みは、コロナ禍においてさらに切実なものになっていると考えられ、早急の対応が必要であろう。

### 3-4 つながりのメリットとデメリット

先に話し相手が良いことが挙げられていたが、そもそもの野田村の住民同士の強いつながりを評価する声やそれを望む声は少なくなかった。しかし他方で、コミュニケーションや人付き合いがストレスや重荷になっているという意見もあった。

「住民同志の繋がりが強い、子供たちの笑顔あふれる村。」(「縁」)

「地域のつながり、絆が薄れないような村としてのあり方を望みます。」(「希」)

「話し相手や相談する人が近くにいない事が困ります。」(「安」)

「コミュニケーションとか良く聞きますけど人によっては、それがストレスになることが

多々。」(「心」)

「人付き合いの重要性は理解できるが、濃過ぎるのは問題である。人付き合いから解放される休日が増えてほしい。」(「転」)

「仕事(職種)が多様化する中で、共働きはもちろん、女性も日曜出勤等があり、子育て、仕事、生活+地域の役割は荷が重い。5時で仕事が終わるとも土・日が休みとも限らずなので世代的に出席しないと思うとけっこうつらい。今のご時世には(将来的にも)ムリがでてくるのでは。」(「結」)

とりわけ最後の女性の回答は、女性が外で雇用されて働き、子育てし、生活を担い、そして地域の諸活動にも出席し、と多くの役割を果たしていることが「けっこうつらい」と吐露されている。家族や地域の中で当然のように期待されてきた役割が重荷であることを表明することさえも難しい場合があると考えられる。女性にさまざまな負担が偏ることがないように、意識的に変えていくことが必要であろう。

### 3-5 生活の苦しさ

さらに、お金のなさ、仕事の減少、支払いの多さ、体力や貯金の減少、不公平感など、切実な生活の苦しさに関する言及も見られた。

「お金もなく、暮らしが苦しい。支払いは減らない。」(「忍」)

「困っていないことの方が少ない。自宅の老朽化、仕事の減少、支払いの多さなど。」(「和」)

「年金が少ないため、生活大変。」(「夢」)

「働くための体力や貯金や給料が、働く場所の変化もあってジワジワ減っていると感じた。充実もなく疲れたなあと思っただけで毎日思っただけで過ごしたなと思いました。」(「疲」)

「お金のある人、仕事のある人はいいでしょうが、家が建っても、決まった業者、決まった職人や村外の職人に仕事がいき、村内の人間が仕事が出来ない。でも、税金は払わなければならない。復興はお金がある人達だけに与えられるものですか。」(「苦」)

これらは漢字一文字の意味が垣間見える語りのようで、憤りも伝わってくる。ハード面の「復興」が進んでいくようにみえるなかで、個々人の生活の不安定さは見逃されるべきではないだろう。

### 3-6 震災やコロナ感染症への思い

前回の調査と比べると、今回の調査の自由記述では、震災そのものに直接触れた回答の数自体は大きく減っていた。しかし、強い気持ちが吐露されていた。

「津波の被害にあった家を修理して住んでいますが、ここまで波がきたのだと思うと恐怖心でいっぱいになります。10年がたってもです。」(「耐」)

「人口減少、未婚者の増加、世代間の価値観の違い、そして何より、震災後の表に出ないストレスの貯蓄（経済的・精神的）が大きな課題となっているように思う。」（「闘」）

「震災の時からですが、津波の届かないところや農業、畜産業も、それなりに被害はありました。津波で家が流された人も大変だと思いますが電気もなく、食べ物もなく過ごした人もいたことを考えてみてください！津波だけが震災ではありません、100分の1の被害だとしても、その人にとっては大変なことです。」

「震災から復興はある程度進んでいると思いますが新型コロナウイルス感染症が早く治まり村や地域の行事等が以前のように出来て、活性化すること、人の交流が増えるようになることを望みます。」（「絆」）

「コロナを終わらせてほしい、早く、速く。」（「恐」）

以前と比べると時間がたつにつれて、「復興感」や日常生活の取り戻しが高まっていくのは自然なことであろうが、10年たってもぬぐえない恐怖感の存在や表に出ないストレスの蓄積などの指摘は重要なものであろう。また、直接の津波被害を受けていない地区の苦悩が軽んじられていることへの憤りも、ずっとぬぐえない感情として残っていると推察される。さらに、2020年から勃発している新型コロナウイルスの感染症問題は、人の交流や行事などに深刻な影響を及ぼしており、その終息が強く望まれている。

### 3-7 村政やボランティアへの要望

最後に、その他の村政やボランティアへの要望等をまとめておこう。

「復興予算で公園や建物を多く造り、将来維持管理費が負担になる事が考えられるので、どのように財源確保をするか早急に考えて行くべきである。」（「苦」）

「村政の推進にあたっては村民との合意形成を図ることを大切にしてほしい!!正に住民のための地方自治の実現である。」（「創」）

「役場職員はもっと村はわたしが先頭に立って頑張ります。の気概が欲しい。もっと希望と勇気を持つことだ。」

「放置空き家の撤去推進をしてほしい。災害時の倒壊や家の屋根の剥落があったが、何十年も不在のため、連絡方法もわからず、（中略）困ったことがあった。」（「生」）

「のんちゃんネットの充実をお願いします。大切な情報をこれらもお願いします。」（「天」）

「野田村にシルバー人材センターが出来れば良いと思います。」

「イベントを新しくすることなどにマイナスに考える人が多いように思えるので、これまでのイベント等も減ったりして楽しいことのない村にならないか少し心配。」（「変」）

「外部からのボランティアには大変ありがたく感謝していますが、もっと地域の人々の立場により添ってほしい。そして村民が自発的自立的に生活できる方向にしてほしい。」

言及されているように、今後、ハード面の維持管理費は大きな課題となっていくことが

予想され、合意形成を丁寧に行いつつ、「気概」を持って進めることが望まれている。また村のイベント等は生活を豊かにする住民の楽しみとしてあることがうかがえる。ボランティアが地域の人々の立場に寄り添うとはどういうことか、あらためて考えつつ、進めていく必要があるだろう。

## 4. おわりに

以上、7つにまとめて整理してきた。さまざまな想いが読み取れ、すぐに実現できることと時間がかかること、難しいこともあるが、多くの方がよりよい野田村のあり方を願っておられることを確認しておきたい。

最後に、一人の高齢者の回答に耳を傾けよう。

**「私は野田村で生まれ野田村で終活する事に悔いが無いです。」（「変」）**

震災で大きな被害を受けた方である。人生において「悔いが無い」ことなどなかりうと思われるが、それでも長い人生を振り返ったとき、野田村で生きてきたことに「悔いが無い」と言えるのは、大切な想いであろう。野田村で生まれ育った住民が一人でも多くそうした想いを持てるように、また、村外生まれの住民、および村に関わる人々が同じように豊かさを共有できるように、これからも村づくりが求められている。

# 付 録

## 回答者の集計表



# 野田村のみなさまの暮らしとお仕事に関するアンケート調査

n = 609

計画数： 2726

直接配布数：2214

有効回答数： 609

有効回収率： 27.5% (609/2214)

## I. 東日本大震災での被害についておたずねします。

問1 東日本大震災の大津波によりお住まいに被害はありましたか。

	被害はなかった	全壊（流失等）	大規模半壊	半壊	一部損害	無回答
調査数	392	105	58	14	22	18
構成比率	64.37	17.24	9.52	2.30	3.61	2.96

問2 震災時（2011年3月11日）にお住まいだった行政区を教えてください。

	中沢	広内	港	下新山	中新山	上新山	北区	愛宕町
調査数	3	1	28	12	16	14	56	5
構成比率	0.49	0.16	4.60	1.97	2.63	2.30	9.20	0.82

	横町	門前小路	前田小路	本町	旭町	下明内	上明内	下泉沢
調査数	10	32	13	8	47	24	25	28
構成比率	1.64	5.25	2.13	1.31	7.72	3.94	4.11	4.60

	上泉沢	中平	南浜	米田	和野平	沢山	日形井	種綿
調査数	20	36	24	48	1	1	14	1
構成比率	3.28	5.91	3.94	7.88	0.16	0.16	2.30	0.16

	間明	大葛	玉川	玉鉾	根井	下安家	村外	無回答
調査数	2	1	33	3	14	26	51	12
構成比率	0.33	0.16	5.42	0.49	2.30	4.27	8.37	1.97

問3 震災時のお住まいの種類を教えてください。

	一戸建て（持家）	一戸建て（借家）	民間のアパート	村営住宅	店舗等併用の持家	その他	無回答
調査数	500	19	5	4	11	1	18
構成比率	82.1	3.12	0.82	0.66	1.81	0.16	2.96

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与えた要因の分析

第5章  
移動性向の  
変化について

第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る…  
自由回答より

付録  
回答者の集計表

付録  
回答者用質問紙

問4 震災直後から現在の住まいまでに住んだことのあるお住まいの種類をすべて教えてください。(複数回答可)

	震災前のお住まいと同じ(修復を含む)	避難所	仮設住宅	みなし仮設住宅	親戚・知人宅(村内)
調査数	398	62	63	28	57
構成比率	65.35	10.18	10.34	4.60	9.36

	親戚・知人宅(村外)	震災前とは異なる自分の住宅(村内)	震災前とは異なる自分の住宅(村外)	その他	無回答
調査数	34	44	6	2	28
構成比率	5.58	7.22	0.99	0.33	4.60

問5 あなたは、自分の生活の復興が、どれくらい進んでいると思いますか。

	ほぼ復興した	半分以上復興した	やや進んでいる	まったく進んでいない	無回答
調査数	399	115	43	3	49
構成比率	65.52	18.88	7.06	0.49	8.05

➡ 「1. ほぼ復興した」と答えた方にうかがいます。ほぼ復興したのはいつ頃ですか。  
( 年ごろ)

	2011	2012	2013	2014	2015
調査数	15	30	24	18	31
構成比率	2.46	4.93	3.94	2.96	5.09

	2016	2017	2018	1019	2020	無回答
調査数	41	22	46	45	21	106
構成比率	6.73	3.61	7.55	7.39	3.45	17.41

問6 あなたは、野田村の復興が、どれくらい進んでいると思いますか。

	ほぼ復興した	半分以上復興した	やや進んでいる	まったく進んでいない	無回答
調査数	268	254	51	1	35
構成比率	44.01	41.71	8.37	0.16	5.75

➡ 「1. ほぼ復興した」と答えた方にうかがいます。ほぼ復興したのはいつ頃ですか。  
( 年ごろ)

	2012	2013	2014	2015	2016
調査数	2	1	2	7	12
構成比率	0.33	0.16	0.33	1.15	1.97

	2017	2018	2019	1020	無回答
調査数	29	64	69	27	55
構成比率	4.76	10.51	11.33	4.43	9.03

## II. 震災前後の人付き合いについておたずねします。

問7 震災の前後で、野田村での、家族・親せき、地域の仲間、仕事の仲間、村外の人々とのお付き合いは増えましたか、減りましたか。

### (1) 家族・親せき

	増えた	減った	変わらない	無回答
調査数	51	79	462	17
構成比率	8.37	12.97	75.86	2.79

### (2) 地域の仲間

	増えた	減った	変わらない	無回答
調査数	59	126	393	31
構成比率	9.69	20.69	64.53	5.09

### (3) 仕事の仲間

	増えた	減った	変わらない	無回答
調査数	60	116	378	55
構成比率	9.85	19.05	62.07	9.03

### (4) 村外の人々

	増えた	減った	変わらない	無回答
調査数	70	104	397	38
構成比率	11.49	17.08	65.19	6.24

問8 以下のようなことについて、家族や親せき以外の、野田村の知り合いで実際に手伝ってくれたり、相談に乗ってくれたりする人はいますか。

### (1) 健康の相談

	いない	いる	震災前はいたが、今はいない	震災前はいなかったが、今はいる	必要ない	無回答
調査数	173	326	6	7	70	27
構成比率	28.41	53.53	0.99	1.15	11.49	4.43

### (2) 冠婚葬祭の手伝い

	いない	いる	震災前はいたが、今はいない	震災前はいなかったが、今はいる	必要ない	無回答
調査数	146	337	7	2	85	32
構成比率	23.97	55.34	1.15	0.33	13.96	5.25

(3) 農作業の手伝い

	いない	いる	震災前はいたが、今はいない	震災前はいなかったが、今はいる	必要ない	無回答
調査数	174	143	3	4	227	58
構成比率	28.57	23.48	0.49	0.66	37.27	9.52

(4) おカネの相談

	いない	いる	震災前はいたが、今はいない	震災前はいなかったが、今はいる	必要ない	無回答
調査数	243	134	2	1	195	34
構成比率	39.90	22.00	0.33	0.16	32.02	5.59

(5) 仕事の相談

	いない	いる	震災前はいたが、今はいない	震災前はいなかったが、今はいる	必要ない	無回答
調査数	158	249	3	5	157	37
構成比率	25.94	40.89	0.49	0.82	25.78	6.08

(6) 住宅再建の相談

	いない	いる	震災前はいたが、今はいない	震災前はいなかったが、今はいる	必要ない	無回答
調査数	160	109	1	2	292	45
構成比率	26.27	17.90	0.16	0.33	47.95	7.39

問9 普段、あなたが何かを手伝ったり、相談に乗ったりすることはありますか。

(1) 家族・親せきのために

	よくある	たまにある	あまりない	無回答
調査数	108	300	170	31
構成比率	17.73	49.26	27.91	5.09

(2) 家族・親せき以外の、野田村の知り合いのために

	よくある	たまにある	あまりない	無回答
調査数	34	245	292	38
構成比率	5.58	40.23	47.95	6.24

問10 震災以降、人と人のつながりに、つぎのような変化や出来事がありましたか。それぞれについて、それが自分自身に「あてはまる」か「あてはまらない」かのどちらかに○をしてください。

	1 あてはまる	2 あてはまらない	無回答
① 心を開いて話すことができる人との出会いがあった	165 (27.09)	358 (58.78)	86 (14.12)
② その人のおかげで被災後の生活設計が定まったと感じられるような人との出会いがあった	85 (13.96)	435 (71.43)	89 (14.61)
③ 被災から立ち直すきっかけを与えてくれた人がいた	110 (18.06)	407 (66.83)	92 (15.11)
④ その後の人生を変える出会いがあった	95 (15.60)	411 (67.49)	103 (16.91)
⑤ ボランティアのありがたさを知った	379 (62.23)	152 (24.96)	78 (12.81)
⑥ 震災をきっかけに同志的なつながりができた	142 (23.32)	371 (60.92)	96 (15.76)
⑦ 自分だけが頼りという気持ちが増した	120 (19.70)	396 (65.02)	93 (15.27)
⑧ 行政への頼もしさが増した	231 (37.93)	286 (46.96)	92 (15.11)
⑨ 近所づきあいの大切さを知った	348 (57.14)	187 (30.71)	74 (12.15)

問11 あなたは、震災以前と比べて、野田村が暮らしやすい村になったと思いますか？

	暮らしやすくなった	少し暮らしやすくなった	変わらない	少し暮らしにくくなった	暮らしにくくなった	無回答
調査数	40	103	305	93	24	44
構成比率	6.57	16.91	50.08	15.27	3.94	7.22

問12 次の村まつりや行事の中で、後世に残したいものを3つまで選んでください。

	小正月行事	16日市	塩の道を歩こう会	愛宕神社例大祭 野田まつり	野田ホタテまつり
調査数	217	188	59	453	146
構成比率	35.63	30.87	9.69	74.38	23.97

	村総合文化祭	村民運動会	なもみ	砂祭り	その他	無回答
調査数	158	63	132	86	9	59
構成比率	25.94	10.34	21.67	14.12	1.48	9.69

問13 あなたの住んでいる地域には、いろいろな活動やイベント、また、近所づきあいがあると思います。震災後10年ほどの間で、以下のような活動にどの程度参加なさっているでしょうか。

①地域のイベントにお世話をする立場で参加してことがありますか。

	よく参加している	たまに参加している	参加していないが興味はある	参加しておらず、興味もない	無回答
調査数	76	181	178	138	36
構成比率	12.48	29.72	29.23	22.66	5.91

②野田まつりの準備に参加したことがありますか。

	よく参加している	たまに参加している	参加していないが興味はある	参加しておらず、興味もない	無回答
調査数	77	114	237	139	42
構成比率	12.64	18.72	38.92	22.82	6.90

③地域の行事やイベントにどの程度当日参加していますか。

	よく参加している	たまに参加している	参加していないが興味はある	参加しておらず、興味もない	無回答
調査数	106	253	110	99	41
構成比率	17.41	41.54	18.06	16.26	6.73

④町内会や自治会の仕事をしていますか

	よく参加している	たまに参加している	参加していないが興味はある	参加しておらず、興味もない	無回答
調査数	138	220	82	129	40
構成比率	22.66	36.12	13.46	21.18	6.57

⑤趣味やスポーツのサークルに参加していますか。

	よく参加している	たまに参加している	参加していないが興味はある	参加しておらず、興味もない	無回答
調査数	60	129	187	197	36
構成比率	9.85	21.18	30.71	32.35	5.91

### Ⅲ. これまでの暮らしについておたずねします。

問14 野田村のご出身ですか。

	はい	いいえ	無回答
調査数	419	175	15
構成比率	68.80	28.74	2.46

問15 野田村以外で、暮らしていたことがありますか。

	はい	いいえ	無回答
調査数	239	114	81
構成比率	39.24	18.72	13.30

問16 学校に通うため、何歳まで、どこで暮らしていましたか。一番最近の経験を教えてください。

( ) 歳から ( ) 歳まで、( ) 都・道・府・県

最大値	最小値	平均値	中央値	無回答
23	0	13.98	16	109
最大値	最小値	平均値	中央値	無回答
30	0	19.59	18	105

問17 仕事のため、何歳まで、どこで暮らしていましたか。一番最近の経験を教えてください。

( ) 歳から ( ) 歳まで、( ) 都・道・府・県

最大値	最小値	平均値	中央値	無回答
53	0	22.20	18	75
最大値	最小値	平均値	中央値	無回答
70	0	37.58	18	73

問18 野田村に帰ってくることになった理由を教えてください。主なものをいくつか選んで下さい。(複数回答可)

	家業を継ぐ必要があった	村外での仕事をやめる、変える必要があった	野田村は、生活が便利だから	知り合いに囲まれて暮らしたかったから
調査数	42	53	4	28
構成比率	6.90	8.70	0.66	4.60

	野田村に住んでいた家族が、希望したから	豊かな自然の中で暮らしたかったから	その他	無回答
調査数	100	30	9	37
構成比率	16.42	4.93	1.48	6.08

問19 あなたが野田村に帰ってきて、困ったことがありますか。もっともあてはまるものを、1つだけ選んでください。

	仕事がない	生活が不便になること	付き合いが大変	家族が村外での暮らしを希望
調査数	54	29	29	3
構成比率	8.87	4.76	4.76	0.49

	子どもたちの教育のために	とくに困ったことはない	無回答
調査数	4	77	43
構成比率	0.66	12.64	7.06

## 【全員におうかがいします。】

問20 これからもずっと、「野田村」に住み続けたいと思いますか。

	野田村に住み 続けたい	村外に 引っ越したい	一度は、村外で住んでみたい が、そのうち帰ってきたい	無回答
調 査 数	503	69	12	25
構 成 比 率	82.59	11.33	1.97	4.11

問21 「野田村」に住み続けたい理由は何ですか。

もっともあてはまるものを、1つだけお選びください。

	村内に仕事があるから	野田村は、 生活が便利	知り合いに囲まれて 暮らしたい	家族が希望している
調 査 数	106	79	148	93
構 成 比 率	17.41	12.97	24.30	15.27

	震災があったから	その他	無回答
調 査 数	8	43	26
構 成 比 率	1.31	7.07	4.27

問22 村外に引っ越したい理由は何ですか。

もっともあてはまるものを、1つだけお選びください。

	野田村には 仕事がない	野田村は、 生活が不便	野田村では 付き合いが大変	家族が希望している
調 査 数	19	31	14	5
構 成 比 率	3.12	5.09	2.30	0.82

	震災があったから	その他	無回答
調 査 数	4	6	2
構 成 比 率	0.66	0.99	0.33

問23 20歳以下のお子さん、お孫さんがいらっしゃる方、みなさんにおたずねします。お子さんやお孫さんに、将来、野田村に住んでほしいと思いますか。

	野田村に住み続け てほしい	村外で暮らして ほしい	一度は村外で暮らすかもしれない が、いつかは帰ってきてほしい	無回答
調 査 数	98	55	181	275
構 成 比 率	16.09	9.03	29.72	45.16

#### Ⅳ 最近の災害について、おたずねします。

問24 近年発生した次の災害に関連して、自身の仕事や収入に関わる影響はありましたか。当てはまる番号に○をつけてください。

(1) 平成28年台風10号

	大いに影響があった	ある程度影響があった	あまり影響はなかった	全く影響はなかった	わからない	無回答
調査数	45	75	188	210	35	56
構成比率	7.39	12.32	30.87	34.48	5.75	9.20

(2) 令和元年台風19号

	大いに影響があった	ある程度影響があった	あまり影響はなかった	全く影響はなかった	わからない	無回答
調査数	45	89	195	198	31	51
構成比率	7.39	14.61	32.02	32.51	5.09	8.37

(3) 新型コロナウイルス感染拡大

	大いに影響があった	ある程度影響があった	あまり影響はなかった	全く影響はなかった	わからない	無回答
調査数	79	130	150	137	63	50
構成比率	12.97	21.35	24.63	22.50	10.34	8.21

問25 「影響があった」と答えた方におたずねします。どのような影響がありましたか。すべて教えてください。(複数回答可)

	雇止めや解雇された	仕事的大幅に減った	収入が大幅に減った	住宅の修理などで支出が大幅に増加した
調査数	4	71	109	48
構成比率	0.66	11.66	17.90	7.88

	健康を害して、医療費関連支出が大幅に増えた	休廃業、倒産した	その他	無回答
調査数	23	4	8	61
構成比率	3.18	0.66	1.31	10.02

問26 防災のために普段から準備している事はありますか。すべて教えてください。

	防災情報の収集準備	非常持ち出し袋の準備	自宅の地震対策	家族間での避難場所の確認
調査数	207	168	131	242
構成比率	33.99	27.59	21.51	39.74

	地震保険への加入	被災時の家族間での連絡方法の確認	その他	特になし	無回答
調査数	189	169	2	108	39
構成比率	31.03	27.75	0.33	17.73	6.40

問27 東日本大震災で被災した初日に最も困ったことは何でしたか？1つ選んでください。

	家族・知人の安否情報の確認	飲料水	トイレの確保	食事
調査数	277	24	33	29
構成比率	45.48	3.94	5.42	4.76

	電気の確保	災害情報の確保	自分の安否情報の発信	避難場所
調査数	83	20	13	16
構成比率	13.63	3.28	2.13	2.63

	燃料の確保	病気やけが対処	プライバシー、安全の確保	その他	無回答
調査数	24	4	7	2	77
構成比率	3.94	0.66	1.15	0.33	12.64

問28 これまで家族や個人で避難訓練に参加したり、行った経験はありますか。

	はい	いいえ	無回答
調査数	373	213	23
構成比率	61.25	34.98	3.78

問29 村主催の東日本大震災追悼行事は、これからも続けた方がよいと思いますか。

	今の形で続けた方がよい	規模を縮小していくべき	そろそろやめることを考えた方がよい
調査数	176	212	67
構成比率	28.90	34.81	11.00

	もう必要ない	わからない	無回答
調査数	29	104	21
構成比率	4.76	17.08	3.45

問30 東日本大震災の体験や復興の経験を後世に残すことや国内外に広く伝えることについてどのように思われますか。

	積極的に行うべき	ある程度行うべき	あまり行うべきではない	そろそろ終えてもいい	よく分からない	無回答
調査数	183	331	4	15	55	21
構成比率	30.05	54.35	0.66	2.46	9.03	3.45

IV 最後に、ご自身のことをお聞きします。

問31 あなたの性別を教えてください。

	男	女	無回答
調査数	280	320	9
構成比率	45.98	52.55	1.48

問32 あなたの生年月を教えてください。

平均年齢 57.72 無回答 58

	全体	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～	無回答
調査数	609	39	39	67	117	174	115	58
構成比率	100.00	6.40	6.40	11.00	19.21	28.57	18.88	9.52

問33 あなたは、長子（長男・長女）ですか。

	はい	いいえ	無回答
調査数	315	274	20
構成比率	51.72	44.99	3.28

問34 あなたが最後に通われた学校についてお答えください。

	小学校	中学校	高等学校	専門学校	短期大学・高等専門学校	大学・大学院	無回答
調査数	6	174	231	77	46	62	13
構成比率	0.99	28.57	37.93	12.64	7.55	10.18	2.13

問35 あなたは、現在結婚していますか。

	結婚している	離別・死別した	結婚していない	無回答
調査数	460	74	69	6
構成比率	75.53	12.15	11.33	0.99

問36 結婚している、していた方にお聞きします。配偶者のご出身は野田村ですか。

	はい	いいえ	無回答
調査数	326	183	25
構成比率	53.53	30.05	4.11

問37 お子さんはいらっしゃいますか。

	はい	いいえ	無回答
調査数	58	503	48
構成比率	9.52	82.59	7.88

最大値	最小値	平均値	中央値	無回答
4	0	1.18	1	12

最大値	最小値	平均値	中央値	無回答
4	0	1.30	1	13

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与える要因の分析

第5章  
移動性傾向の  
変化について

第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る…  
自由回答より

付録  
回答者の集計表

付録  
回答者用質問紙

問38 野田村以外で生活しているお子さんはいらっしゃいますか。

	はい	いいえ	無回答
調査数	186	374	49
構成比率	30.54	61.41	91.95

最大値	最小値	平均値	中央値	無回答
4	0	0.96	1	9

最大値	最小値	平均値	中央値	無回答
4	0	0.93	1	9

問39 あなたは、震災前までは何人世帯でしたか。

	1人	2人	3人	4人	5人以上	無回答
調査数	36	152	114	99	191	17
構成比率	5.91	24.96	18.72	16.26	31.36	2.79

問40 あなたは、現在何人世帯ですか。

	1人	2人	3人	4人	5人以上	無回答
調査数	44	212	117	103	120	13
構成比率	7.22	34.81	19.21	16.91	19.70	2.13

問41 震災前は、どのような働き方をしていましたか。

	自営業・ 会社経営	家業の手伝い	正規の職員・ 従業員	パート、 アルバイト	派遣社員
調査数	110	25	193	63	3
構成比率	18.06	4.11	31.69	10.34	0.49

	契約社員・委託	日雇い、出稼ぎ	専業主婦(主夫)	無職	無回答
調査数	15	40	53	91	16
構成比率	2.46	6.57	8.70	14.94	2.63

問42 震災前のあなたのお主なご職業は何ですか。

	農林業	漁業	水産・ 食品加工業	製造・生産工場	建設・労務
調査数	48	33	11	54	81
構成比率	7.88	5.42	1.81	8.87	13.30

	卸売・小売	サービス業	飲食・宿泊業	医療・福祉	専門的・技術的 職業
調査数	37	61	11	48	33
構成比率	6.08	10.02	1.81	7.88	5.42

	管理的職業	公務員	その他	無回答
調査数	7	36	121	28
構成比率	1.15	5.91	19.87	4.60

問43 あなたの主なご職業は、震災で変化しましたか。

	震災前と同じ仕事をしている	震災が原因で無職になった	震災をきっかけに職についた	震災をきっかけに転職、転業した	震災前も今も働いていない	無回答
調査数	310	21	23	56	87	112
構成比率	50.90	3.45	3.78	9.20	14.29	18.39

問44 震災前のお勤め先の、現時点での復旧状況を教えてください。

	廃業した	まだ十分に復旧したとはいえない	ほぼ震災前の状況に復旧した	被害はなかった	勤めていなかった	無回答
調査数	20	22	143	178	128	118
構成比率	3.28	3.61	23.48	29.23	21.02	19.38

問45 あなた個人の収入も含めて、同居している家族全体では、どのくらいの年収がありますか。税引き前の額でお答えください（手取り額ではありません）。

	収入はない	100万円未満	100～200万円未満	200～300万円未満	300～400万円未満
調査数	32	36	64	105	69
構成比率	5.25	5.91	10.51	17.24	11.33

	400～600万円未満	600～800万円未満	800～1,000万円未満	1,000万円以上	無回答
調査数	102	50	21	29	101
構成比率	16.75	8.21	3.45	4.76	16.58

問46 震災前と現在で収入、支出、貯金額は増えましたか、減りましたか。

(1) 収入

	増えた	変わらない	減った	無回答
調査数	83	219	244	63
構成比率	13.63	35.96	40.07	10.34

(2) 支出

	増えた	変わらない	減った	無回答
調査数	258	214	53	84
構成比率	42.36	35.14	8.70	13.79

(3) 貯金額

	増えた	変わらない	減った	無回答
調査数	48	152	325	84
構成比率	7.88	24.96	53.37	13.76

問47 あなたは、現在（令和2年8月）の生活を、震災前の生活と比べてどのように感じておられますか。以下のそれぞれの質問を読み、当てはまる番号に○をつけてください。

あなたは、震災前と比べて	1 かなり減った	2 少し減った	3 変わらない	4 少し増えた	5 かなり増えた	無回答
① 忙しく活動的な生活を送ることは、	97(15.93)	84(13.79)	229(37.60)	69(11.33)	66(10.84)	64(10.51)
② 自分のしていることに生きがいを感じることは、	64(10.51)	83(13.63)	292(47.95)	68(11.17)	38(6.24)	64(10.51)
③ まわりの人びととうまくついあっていくことは、	42(6.90)	60(9.85)	353(57.96)	57(9.36)	39(6.40)	58(9.52)
④ 日常生活を楽しく送ることは、	55(9.03)	92(15.11)	301(49.43)	65(10.67)	34(5.58)	62(10.18)
⑤ 自分の将来は明るいと感じることは、	108(17.73)	127(20.85)	253(41.54)	35(5.75)	22(3.61)	64(10.51)
⑥ 元気ではつらつとしていることは、	75(12.32)	145(23.81)	259(42.53)	42(6.90)	20(3.28)	68(11.17)
⑦ 家で過ごす時間は、	22(3.61)	46(7.55)	225(36.95)	127(20.85)	130(21.35)	59(9.69)
⑧ 仕事の量は、	99(16.26)	72(11.82)	205(33.66)	81(13.30)	65(10.67)	87(14.29)

問48 まもなく東日本大震災から10年目となります。この10年を漢字一文字で表せば何になりますか。ご自由にお書きください。

問49 現在、野田村での生活で困っていることや、野田村の将来の生活について、お考えになっていることをご自由にお書きください。

回答数：156 (25.62)

無回答数：453 (74.38)

質問は以上です。ご協力いただき、まことにありがとうございました。

# 付 録

回答者用質問紙



# 野田村のみなさまの暮らしとお仕事に関する アンケート調査

東日本大震災により被災されたみなさまに、心からお見舞い申し上げます。

この調査は、弘前大学とチーム北リアスが野田村役場の協力を得て、調査・研究事業の一環として行うもので、野田村のみなさまの暮らしとお仕事について調査し、持続可能な地域づくりにつなげていくための基礎資料として利用するものです。

お忙しい中、誠に恐縮ですが、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

## ご記入に当たってのお願い

1. 令和2年8月時点でお答え下さい。
2. 回答は、あなたご自身に当てはまる選択肢を選び、番号を○で囲んでいただく形式がほとんどです。また、一部に具体的な内容を文章でご記入いただくところもあります。
3. ご記入済みのアンケート用紙は、同封しました返信用封筒に入れて、

**令和2年8月31日(月)までに**

投函していただきますようお願いいたします。

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与えた要因の分析

第5章  
移動性向の  
変化について

第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る…  
自由回答より

付録  
回答者の集計表

付録  
回答者用質問紙

- この調査の結果や内容は統計的に処理し、みなさまの生活の現状を把握することだけを目的として利用されますので、みなさまにご迷惑をおかけすることは絶対にありません。
- チーム北リアスは、東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県北沿岸地域の復興を長期的にお手伝いしようと、八戸、弘前、関西の有志が立ち上げたネットワークです。現在は、岩手県の野田村を拠点に活動しています。
- 本調査は一般財団法人北海道東北地域経済総合研究所のほくとう総研地域活性化連携支援事業の助成を受けて実施するものです。
- 調査の結果は、令和3年3月頃、報告書の形で、みなさまにお伝えしたいと思います。野田村役場や図書館などにも配置する予定ですので、興味のある方は、お手にとっていただければ幸いです。
- 本調査でご不明な点がございましたら、電話やファクスにて下記にお問い合わせ下さい。

### 弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター

電話：0172-39-3198      ファクス：0172-39-3189

E-mail：irrc@hirosaki-u.ac.jp

電話の受付は月曜日から金曜日の10時30分より17時までと  
なっております。なにとぞご了承ください

この調査に含まれている内容以外で、政府や行政、当センターへのご意見、ご要望がございましたら、このらんにお書きください。

## I. 東日本大震災での被害についておたずねします。

**問1** 東日本大震災の大津波によりお住まいに被害はありましたか。

1. 被害はなかった  
 2. 全壊（流失等）      3. 大規模半壊      4. 半壊      5. 一部損壊

**問2** 震災時（2011年3月11日）にお住まいだった行政区を教えてください。

1. 中沢      2. 広内      3. 港      4. 下新山      5. 中新山  
 6. 上新山      7. 北区      8. 愛宕町      9. 横町      10. 門前小路  
 11. 前田小路      12. 本町      13. 旭町      14. 下明内      15. 上明内  
 16. 下泉沢      17. 上泉沢      18. 中平      19. 南浜      20. 米田  
 21. 和野平      22. 沢山      23. 日形井      24. 種綿      25. 間明  
 26. 大葛      27. 玉川      28. 玉鋳      29. 根井      30. 下安家  
 31. 村外（都道府県名：\_\_\_\_\_市町村名：\_\_\_\_\_）

➔ 31に○をつけた方は、問5にお進みください。

**問3** 震災時のお住まいの種類を教えてください。

1. 一戸建て（持家）      2. 一戸建て（借家）      3. 民間のアパート  
 4. 村営住宅      5. 店舗等併用の持家  
 6. その他（\_\_\_\_\_）

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与える要因の分析

第5章  
移動性向の  
変化について

第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る…  
自由回答より

付録  
回答者の集計表

付録  
回答者用質問紙

**問4** 震災直後から現在の住まいまでに住んだことのあるお住まいの種類をすべて教えてください。(複数回答可)

1. 震災前のお住まいと同じ (修復を含む)
2. 避難所
3. 仮設住宅
4. みなし仮設住宅
5. 親戚・知人宅 (村内)
6. 親戚・知人宅 (村外)
7. 震災前とは異なる自分の住宅 (村内)
8. 震災前とは異なる自分の住宅 (村外)
9. その他 (具体的に )

**問5** あなたは、自分の生活の復興が、どれくらい進んでいると思いますか。

1. ほぼ復興した
2. 半分以上復興した
3. やや進んでいる
4. まったく進んでいない

➔ 「1. ほぼ復興した」と答えた方にうかがいます。ほぼ復興したのはいつ頃ですか。

(                      年ごろ)

**問6** あなたは、野田村の復興が、どれくらい進んでいると思いますか。

1. ほぼ復興した
2. 半分以上復興した
3. やや進んでいる
4. まったく進んでいない

➔ 「1. ほぼ復興した」と答えた方にうかがいます。ほぼ復興したのはいつ頃ですか。

(                      年ごろ)

## Ⅱ. 震災前後の人付き合いについておたずねします。

**問7** 震災の前後で、野田村での、家族・親せき、地域の仲間、仕事の仲間、村外の人々とのお付き合いは増えましたか、減りましたか。

- |            |        |        |          |
|------------|--------|--------|----------|
| (1) 家族・親せき | 1. 増えた | 2. 減った | 3. 変わらない |
| (2) 地域の仲間  | 1. 増えた | 2. 減った | 3. 変わらない |
| (3) 仕事の仲間  | 1. 増えた | 2. 減った | 3. 変わらない |
| (4) 村外の人々  | 1. 増えた | 2. 減った | 3. 変わらない |

**問8** 以下のようなことについて、家族や親せき以外の、野田村の知り合いで実際に手伝ってくれたり、相談に乗ってくれたりする人はいますか。

- |                  |        |       |                  |                    |         |
|------------------|--------|-------|------------------|--------------------|---------|
| (1) 健康の相談 ……………  | 1. いない | 2. いる | 3. 震災前はいたが、今はいない | 4. 震災前はいなかったが、今はいる | 5. 必要ない |
| (2) 冠婚葬祭の手伝い ……  | 1. いない | 2. いる | 3. 震災前はいたが、今はいない | 4. 震災前はいなかったが、今はいる | 5. 必要ない |
| (3) 農作業の手伝い ……   | 1. いない | 2. いる | 3. 震災前はいたが、今はいない | 4. 震災前はいなかったが、今はいる | 5. 必要ない |
| (4) おカネの相談 …………… | 1. いない | 2. いる | 3. 震災前はいたが、今はいない | 4. 震災前はいなかったが、今はいる | 5. 必要ない |
| (5) 仕事の相談 ……………  | 1. いない | 2. いる | 3. 震災前はいたが、今はいない | 4. 震災前はいなかったが、今はいる | 5. 必要ない |
| (6) 住宅再建の相談 ……   | 1. いない | 2. いる | 3. 震災前はいたが、今はいない | 4. 震災前はいなかったが、今はいる | 5. 必要ない |

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与える要因の分析

第5章  
移動性向の  
変化について

第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る…  
自由回答より

付  
録  
回答者の集計表

付  
録  
回答者用質問紙

**問9** 普段、あなたが何かを手伝ったり、相談に乗ったりすることはありますか。

- (1) 家族・親せきのために  
 1. よくある                      2. たまにある                      3. あまりない
- (2) 家族・親せき以外の、野田村の知り合いのために  
 1. よくある                      2. たまにある                      3. あまりない

**問10** 震災以降、人と人のつながりに、つぎのような変化や出来事がありましたか。それぞれについて、それが自分自身に「あてはまる」か「あてはまらない」かのどちらかに○をしてください。

	1 あてはまる	2 あてはまらない
① 心を開いて話すことができる人との出会いがあった		
② その人のおかげで被災後の生活設計が定まったと感じられるような人との出会いがあった		
③ 被災から立ち直すきっかけを与えてくれた人がいた		
④ その後の人生を変える出会いがあった		
⑤ ボランティアのありがたさを知った		
⑥ 震災をきっかけに同志的なつながりができた		
⑦ 自分だけが頼りという気持ちが増した		
⑧ 行政への頼もしさが増した		
⑨ 近所づきあいの大切さを知った		

**問11** あなたは、震災以前と比べて、野田村が暮らしやすい村になったと思いますか？

1. 暮らしやすくなった                      2. 少し暮らしやすくなった                      3. 変わらない  
 4. 少し暮らしにくくなった                      5. 暮らしにくくなった

**問12** 次の村まつりや行事の中で、後世に残したいものを3つまで選んでください。

- |                  |              |             |
|------------------|--------------|-------------|
| 1. 小正月行事         | 2. 16日市      | 3. 塩の道を歩こう会 |
| 4. 愛宕神社例大祭 野田まつり | 5. 野田ホタテまつり  |             |
| 6. 村総合文化祭        | 7. 村民運動会     | 8. なもみ      |
| 9. 砂祭り           | 10. その他（具体的に | ）           |

**問13** あなたの住んでいる地域には、いろいろな活動やイベント、また、近所づきあいがあると思います。震災後10年ほどの間で、以下のような活動にどの程度参加なさっているでしょうか。

- ①地域のイベントにお世話をする立場で参加してことがありますか。
- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 1. よく参加している      | 2. たまに参加している     |
| 3. 参加していないが興味はある | 4. 参加しておらず、興味もない |
- ②野田まつりの準備に参加したことがありますか。
- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 1. よく参加している      | 2. たまに参加している     |
| 3. 参加していないが興味はある | 4. 参加しておらず、興味もない |
- ③地域の行事やイベントにどの程度当日参加していますか。
- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 1. よく参加している      | 2. たまに参加している     |
| 3. 参加していないが興味はある | 4. 参加しておらず、興味もない |
- ④町内会や自治会の仕事をしていますか
- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 1. よく参加している      | 2. たまに参加している     |
| 3. 参加していないが興味はある | 4. 参加しておらず、興味もない |
- ⑤趣味やスポーツのサークルに参加していますか。
- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 1. よく参加している      | 2. たまに参加している     |
| 3. 参加していないが興味はある | 4. 参加しておらず、興味もない |

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与える要因の分析

第5章  
移動性向の  
変化について

第6章  
新たなコミュニティ  
づくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る…  
自由回答より

付録  
回答者の集計表

付録  
回答者用質問紙

### Ⅲ. これまでの暮らしについておたずねします。

**問14** 野田村のご出身ですか。

1. はい      2. いいえ → 次のページの間20にお進みください。

**問15** 野田村以外で、暮らしていたことがありますか。

1. はい      2. いいえ → 問20にお進みください。

**問16** 学校に通うため、何歳まで、どこで暮らしていましたか。一番最近の経験を教えてください。

(      ) 歳から (      ) 歳まで、(      ) 都・道・府・県

**問17** 仕事のため、何歳まで、どこで暮らしていましたか。一番最近の経験を教えてください。

(      ) 歳から (      ) 歳まで、(      ) 都・道・府・県

**問18** 野田村に帰ってくることになった理由を教えてください。主なものをいくつか選んで下さい。(複数回答可)

1. 家業を継ぐ必要があった
2. 村外での仕事をやめる、変える必要があった
3. 野田村は、生活が便利だから
4. 知り合いに囲まれて暮らしたかったから
5. 野田村に住んでいた家族が、希望したから
6. 豊かな自然の中で暮らしたかったから
7. その他 (      )

**問19** あなたが野田村に帰ってきて、困ったことがありますか。もっともあてはまるものを、1つだけ選んでください。

- |                 |                  |
|-----------------|------------------|
| 1. 仕事がない        | 2. 生活が不便になること    |
| 3. 付き合いが大変      | 4. 家族が村外での暮らしを希望 |
| 5. 子どもたちの教育のために | 6. とくに困ったことはない   |
| 7. その他 ( )      |                  |

**【全員におうかがいします。】**

**問20** これからもずっと、「野田村」に住み続けたいと思いますか。

1. 野田村に住み続けたい → **問21**へ
2. 村外に引っ越したい → **問22**へ
3. 一度は、村外で住んでみたいが、そのうち帰ってきたい。 → **問22**へ

**問21** 「野田村」に住み続けたい理由は何ですか。もっともあてはまるものを、1つだけお選びください。

- |                   |               |
|-------------------|---------------|
| 1. 村内に仕事があるから     | 2. 野田村は、生活が便利 |
| 3. 知り合いに囲まれて暮らしたい | 4. 家族が希望している  |
| 5. 震災があったから       |               |
| 6. その他 (具体的に )    |               |

**問22** 村外に引っ越したい理由は何ですか。もっともあてはまるものを、1つだけお選びください。

- |                 |               |
|-----------------|---------------|
| 1. 野田村には仕事がない   | 2. 野田村は、生活が不便 |
| 3. 野田村では付き合いが大変 | 4. 家族が希望している  |
| 5. 震災があったから     |               |
| 6. その他 (具体的に )  |               |

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与える要因の分析

第5章  
移動性向の  
変化について

第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る…  
自由回答より

付録  
回答者の集計表

付録  
回答者用質問紙

**問23** 20歳以下のお子さん、お孫さんがいらっしゃる方、みなさんにおたずねします。お子さんやお孫さんに、将来、野田村に住んでほしいと思いますか。

1. 野田村に住み続けてほしい
2. 村外で暮らしてほしい
3. 一度は村外で暮らすかもしれないが、いつかは帰ってきてほしい

#### IV 最近の災害について、おたずねします。

**問24** 近年発生した次の災害に関連して、自身の仕事や収入に関わる影響はありましたか。当てはまる番号に○をつけてください。

	大いに影響があった	ある程度影響があった	あまり影響はなかった	全く影響はなかった	わからない
平成28年 台風10号	1	2	3	4	5
令和元年 台風19号	1	2	3	4	5
新型コロナウイルス 感染拡大	1	2	3	4	5

**問25** 「影響があった」と答えた方におたずねします。どのような影響がありましたか。すべて教えてください。(複数回答可)

1. 雇止めや解雇された
2. 仕事が大幅に減った
3. 収入が大幅に減った
4. 住宅の修理などで支出が大幅に増加した
5. 健康を害して、医療費関連支出が大幅に増えた
6. 休廃業、倒産した
7. その他 ( )

**問26** 防災のために普段から準備している事はありますか。すべて教えてください。(複数回答可)

1. 防災情報の収集準備 (マスメディア、IT 関連など)
2. 非常持ち出し袋の準備
3. 自宅の地震対策 (家具の転倒防止など)
4. 家族間での避難場所の確認
5. 地震保険への加入
6. 被災時の家族間での連絡方法の確認
7. その他 (具体的に )
8. 特になし

**問27** 東日本大震災で被災した初日に最も困ったことは何でしたか？  
1つ選んでください。

1. 家族・知人の安否情報の確認
2. 飲料水
3. トイレの確保
4. 食事
5. 電気の確保
6. 災害情報の確保
7. 自分の安否情報の発信
8. 避難場所
9. 燃料の確保
10. 病気やけが対処
11. プライバシー、安全の確保
12. その他 (具体的に )

**問28** これまで家族や個人で避難訓練に参加したり、行った経験はありますか。

1. はい
2. いいえ

**問29** 村主催の東日本大震災追悼行事は、これからも続けた方がよいと思いますか。

1. 今の形で続けた方がよい
2. 規模を縮小していくべき
3. そろそろやめることを考えた方がよい
4. もう必要ない
5. わからない

**問30** 東日本大震災の体験や復興の経験を後世に残すことや国内外に広く伝えることについてどのように思われますか。

1. 積極的に行うべき
2. ある程度行うべき
3. あまり行うべきではない
4. そろそろ終えてもいい
5. よく分からない

#### IV 最後に、ご自身のことをお聞きします。

**問31** あなたの性別を教えてください。

1. 男            2. 女

**問32** あなたの生年月を教えてください。

明治・大正・昭和・平成 (            )年 (    )月

**問33** あなたは、長子（長男・長女）ですか。

1. はい            2. いいえ

**問34** あなたが最後に通われた学校についてお答えください。

1. 小学校            2. 中学校            3. 高等学校  
4. 専門学校            5. 短期大学・高等専門学校  
6. 大学・大学院

**問35** あなたは、現在結婚していますか。

1. 結婚している            2. 離別・死別した            3. 結婚していない

**問36** 結婚している、していた方にお聞きします。配偶者のご出身は野田村ですか。

1. はい            2. いいえ (            )市・町・村

**問37** お子さんはいらっしゃいますか。

1. いない            2. いる ➡ 娘 (            )人    息子 (            )人



**問44** 震災前のお勤め先の、現時点での復旧状況を教えてください。

1. 廃業した
2. まだ十分に復旧したとはいえない
3. ほぼ震災前の状況に復旧した
4. 被害はなかった
6. 勤めていなかった

**問45** あなた個人の収入も含めて、同居している家族全体では、どのくらいの年収がありますか。税引き前の額でお答えください(手取り額ではありません)。

1. 収入はない
2. 100万円未満
3. 100～200万円未満
4. 200～300万円未満
5. 300～400万円未満
6. 400～600万円未満
7. 600～800万円未満
8. 800～1,000万円未満
9. 1,000万円以上

**問46** 震災前と現在で収入、支出、貯金額は増えましたか、減りましたか。

- (1) 収入：    1. 増えた      2. 変わらない      3. 減った
- (2) 支出：    1. 増えた      2. 変わらない      3. 減った
- (3) 貯金：    1. 増えた      2. 変わらない      3. 減った

**問47** あなたは、現在（令和2年8月）の生活を、震災前の生活と比べてどのように感じておられますか。以下のそれぞれの質問を読み、当てはまる番号に○をつけてください。

あなたは、震災前と比べて	1 かなり 減った	2 少し 減った	3 変わら ない	4 少し 増えた	5 かなり 増えた
①忙しく活動的な生活を送ることは、					
②自分のしていることに生きがいを感じることは、					
③まわりの人びととうまくつきあっていくことは、					
④日常生活を楽しく送ることは、					
⑤自分の将来は明るいと感じることは、					
⑥元気ではずかしていることは、					
⑦家で過ごす時間は、					
⑧仕事の量は、					

**問48** まもなく東日本大震災から10年目となります。この10年を漢字一文字で表せば何になりますか。ご自由にお書きください。

**問49** 現在、野田村での生活で困っていることや、野田村の将来の生活について、お考えになっていることをご自由にお書きください。

質問は以上です。ご協力いただき、まことにありがとうございました。

第1章  
調査の概要

第2章  
震災10年目の  
生活実態

第3章  
震災10年目の  
復興感

第4章  
復興感と復興時期に影  
響を与える要因の分析

第5章  
移動性向の  
変化について

第6章  
新たなコミュニ  
ティづくりと世代差

第7章  
野田村の声を探る…  
自由回答より

付録  
回答者の集計表

付録  
回答者用質問紙

## 執筆担当者

氏名	所属	担当章
李 永 俊	弘前大学 人文社会科学部 教授・地域未来創生センター長	第1章 第2章 第5章
永 田 素 彦	京都大学 人間・環境学研究科 教授	第3章 第6章
花 田 真 一	弘前大学 人文社会科学部 講師	第4章
牧 田 大 輝	京都大学 人間・環境学研究科 修士課程	第6章
山 口 恵 子	東京学芸大学 教育学部 教授	第7章
林 超 凡	弘前大学 人文社会科学部 修士課程	集計表

---

2021年3月

編集・発行 弘前大学人文社会科学部  
〒036-8560 青森県弘前市文京町1  
電 話 0172-39-3198  
Email : irrc@hirosaki-u.ac.jp  
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/irrc/>  
報告書の全文は上記ホームページでご覧いただけます

---